

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十五年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇三五号



日川協加盟

No.1035

八月号

第19回 川柳塔まつり

と き 平成25年10月12日(土)

午前11時開場・午後1時開会

と ころ ホテル・アウリーナ大阪 4階 金剛の間(中・西)

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 電話 06-6772-1441
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車)

《 同 人 総 会 ・ 議 事 》 午前10時より

平成24年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成25年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《 各賞表彰式・記念句会 》

表 彰 式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「津軽発おもしろ景色スペシャル」 川柳塔社 高瀬霜石氏

兼 題 「広 い」 島根石橋芳山選

「ささやく」 青森松山芳生選

「テンポ」 和歌山木本朱夏選

「机」 大阪太田昭選

「忘れる」 大阪河内月子選

事前投句 「樹」(9月2日必着) 川柳塔社 主幹 小島蘭幸選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正 午(午後4時半終了予定) ※各題の「天位」に賞呈

◎会 費 2,000円(当日頂きます) ※記念品 呈

ご昼食は各自でお済ませください

《 懇 親 宴 》

と き 平成25年10月12日(土) 午後5時～7時

と ころ ホテルアウリーナ大阪 3階 葛城の間

☆会 費 7,000円(会席料理) 先着申込み120名様

☆宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8,000円(朝食付き)

* 事前投句および懇親宴・宿泊のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて9月2日(月)までに本社事務所宛、お送りください。

* 懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振 替 00980-4-298479

麻生路郎七夕句碑まつり

小島 蘭 幸

「ところで、今日の催しは、何とお呼びすればよいのでしょうか」、取材に来られた尾道ケーブルテレビの女性スタッフの一言に、私は思わず「句碑まつり、麻生路郎句碑まつり」と叫んでいました。尾道川柳会の皆さんと一緒に路郎先生ご夫妻の文学碑に参拝するようになって三年になるのに、正式な名称をつけていなかったのです。急遽、尾道の皆さんと相談をして、路郎先生の命日七月七日に因んで「麻生路郎七夕句碑まつり」としました。

七夕竹に参加者の願いを込めた作品を短冊に書いて吊るすのですから、ピッタリの名称と自画自賛しているところです。尾道ケーブルテレビで取材した句碑まつりを、何回かに分けて放映されるということで、私をはじめ参加者全員にインタビュ、短冊の作品に込めた思いをそれぞれ熱く語られました。

里帰りして落ちついた比翼塚

賢悟

路郎さんにあやかりたくて句碑に添う 寛

ちははの星もおわすや大銀河 大本和子

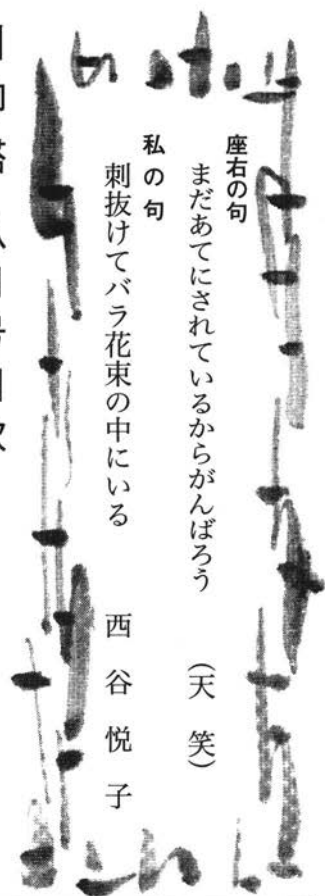
川柳塔熱く見守る路郎星 村上和子

生々庵葉薫風路郎の忌 蘭幸

私は故人となられた歴代の川柳塔社主幹を七月七日の路郎忌に、路郎先生と共に偲びたいという思いを込めて作りました。そして川柳塔社がますます発展しますようにと願いを込めて、七夕竹のてっぺんに短冊を飾りました。

路郎先生のふるさと尾道に文学碑が建立されて今年で十二年になります。七月三日、お酒が好きだった路郎先生にワンカップ12個をお供えして文学碑にお酒を注ぎました。馥郁とした香りの中で私は、今年の路郎賞・川柳塔賞の応募が沢山集まりますようにと願っていました。

さて今年も路郎賞・川柳塔賞の応募の時期になりました。七月号表紙裏の記事を見て、万全の準備をされている方も多いと思いますが、今一度、応募資格を確認して、八月号刷り込み用紙に5句を楷書で書き、八月十日必着でご応募よろしくお願い致します。あなたの作品が、路郎賞・川柳塔賞に選ばれることを心から願っています。



座右の句

まだあてにされているからがんばろう

(天笑)

私の句

刺抜けてバラ花束の中にいる

西谷悦子

川柳塔 八月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「流水」

■巻頭言 麻生路郎七夕句碑まつり	小島 蘭 幸	(1)
知っているようで知らない日本語	恒松 町 紅	(2)
川柳塔(同人吟)	小島 蘭 幸 選	(4)
川柳塔の川柳讃歌 ¹⁰⁴	木津 川 計	(47)
自選集		(48)
温故知新		(51)
水煙抄	西出 楓 楽 選	(52)
新川柳鑑賞 ¹⁸	麻生 路 郎	(75)
西尾 葉句抄		(76)
英語 de Senryu ²⁰	吉村 侑久代	(77)
俳風柳多留一二篇研究 2		(78)
愛染帖	新家 完司 選	(80)
檸檬抄「拭く」	奥田 みつ子・森山 盛桜 共選	(84)
江戸を楽しむ ⁸	小 栗 清 吾	(87)
一路集「自 然」	川 端 一 步 選	(88)

知っているようで

知らない日本語

恒松 町 紅

手許に、ごま書房刊行の言語学者、柴田武先生著の「知っているようで知らない日本語」という本がある。その中から紹介してみる。

「手を焼く」

大やけどをしてしまう？

子どものやんちゃに困りはてた母親が「お前はほんとうに手の焼ける子だね」と言うと、それじゃあママはお手々が火傷してしまうの」と、心配のあまり泣きだしたという笑い話がある。

子どもの「世話」をするのには「手」をあれこれつかうところから、「手」には「世話」の意味がある。

また「焼く」のは、物だけでなく、心も焼くことがある。「焼く」に、心を悩ます「気を配る」の意味があるのはそ

一路集（「赤い」）

太田扶美代選

(89)

せんりゅう飛行船³²

竹村紀の治選

(90)

初歩教室「マジック」

新家完司

(91)

川柳塔鑑賞

山本蛙城

(92)

水煙抄鑑賞

鴨谷瑠美子

(94)

全日本川柳二〇一三年青森大会

稲見則彦

(96)

『麻生路郎読本』余滴⁽¹⁶⁾

桑原道夫

(97)

民族の詩歌⁽¹⁵⁾

三好專平

(98)

■エッセー 人生について思う事

堂上泰女

(102)

路郎賞・川柳塔賞 選考規定

芳賀博子

(103)

七月本社句会

中居善信

(104)

句会燦爛

朱夏・いさお

(106)

各地柳壇(佳句地十選／三浦強一・山本義子)

中居善信

(110)

鮎のささやき

中居善信

(111)

八月各地句会案内

中居善信

(125)

柳界展望

中居善信

(126)

■編集後記(ひとこと／前田楓花)

中居善信

(128)

座右の句

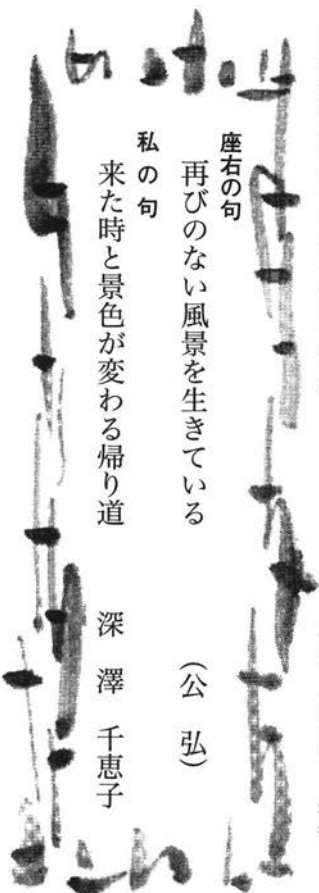
再びのない風景を生きている

(公弘)

私の句

来た時と景色が変わる帰り道

深澤 千恵子



のためである。

つまり、「手を焼く」のは、あれこれと世話をさせられることだ。子どものうちはともかく、大人になっても変わらないと、本人が大やけどをすることになる。

「みぞおち」

何が落ちているのか？

人間の体には、急所がいくつかある。そこを蹴られたり、突かれたりすると、痛さで悶絶するところか、下手をすると命とりになりかねない。「みぞおち」もその一つで、胸のあばらの下のほう、中央前面のくぼんだところを指す。

この「みぞおち」、もともとは、水落ちからきている。山で水が落ちるところ、言葉を変えれば分水嶺のことだ。おそらく、胸のあばら骨を山に見たてれば、その下のくぼんだところは谷に当たるから、この場所を「みぞおち」と呼ぶようになったのだらう。

「みぞおち」は、「みずおち」の音がこし変わってできた言葉だ。



小島蘭幸選

和歌山市 木本朱夏

昭和遠く踏切番はもう居ない
トタン屋根に降る雨音にある昭和
昭和一桁鋼のごとき背骨持つ
アニメから学ぶ昭和の好奇心
ボンネットバスで昭和を巡る旅
一族が集う昭和の盆の窪

河内長野市 山岡富美子

八月の雲もラジオも疵を抱く
ご先祖の墓地に少年兵眠る
眼科歯科耳鼻科と続く雨宿り
気取るにはちよつと尻尾が太すぎる
ノンアルコールなのに悪酔いしています
自然体それがわたしの処方箋

松山市 宮尾みのり

小康という神様の贈りもの
あの世への準備蔵書を処分する
その日まで生きた証を子へ残す

DNAのせいと短所も受け入れる
決断の速さを非情とも言われ
だまし絵の中へ怨念埋めておく

堺市 柿花和夫

夢ひとつ味方に付けてパラサイト
損得を離れた酒は腑に落ちる
絶頂を過ぎて味方は妻ひとり
空オケで年齢詐称ばれました
青いリュックに理想を詰めたのは昨日
女子会に占拠されてた俺の島

香芝市 大内朝子

ネガティブな心からりと五月晴
一期一会積む人生の宝物
花いちもんめ幼馴染がまた逝った
アングルを時どき変える好奇心
蝉しぐれノーマアヒロシマを叫ぶ
望郷に浸る三丁目の夕陽

高知市 小川 てるみ

不器用でまだ紙の辞書虫めがね
カルガモの一家団欒孫と見る
かかりつけ齒科医の顔はまだ知らず

和歌山市 牛尾 緑 良

うぐいすの競い鳴き聞く朝の窓
ワンランク落とした服がよく似合う
突然のアポに掃除を急かされる
梅雨入りは突然でした五月晴れ
思ひ出を手繰ると母の膝の上
まる二日経ってひよつこり女優の名

和歌山市 楠見 章 子

新緑のシャワーで今日も目を洗う
こつそりと食べたカレーがまだ匂い
ダイヤより嬉しい温かい言葉
ワインの蓋開けても魔女になりきれず
銀髪の似合う女にあこがれる
アドリブでとんでみようか水溜り

弘前市 高瀬 霜 石

よよと逃げる白い豆腐のころろざし
目の前の山をほめては酒こぼす
行きずりの相合傘は軽い仲
神の前 神の声しか聞こえない
気がかりなことには触れず星の下
影を踏む七十年の長い影

松江市 川本 畔

エベレストいいえ階段よつこらしよ
体重が落ちても散歩重い足
握力に不安左手添えてお茶

尼崎市 軸丸 勝 己

不器用でまだ紙の辞書虫めがね
カルガモの一家団欒孫と見る
かかりつけ齒科医の顔はまだ知らず

拍子木に見得切るだろう君の通夜（故郷人氏）
不戦勝負いごとを避けてから
故郷へ夜行列車が出てひとり
日の丸の折り目正しきまま遺品
定位置でいただきますと茶がふたつ
長生きの母を見習う梅ひとつ

弘前市 稲見 則 彦

朝顔に今朝も挨拶し忘れる
国民の半分起きている6時
玉子かけご飯でシアワセになれる
返信の早さで計る敵味方
人生はマラソンじゃないハードルだ
よかつたらどうぞこちらへ雨宿り

笹舟に乗ってわたしの旅続く
アナログを灯すと見える過去の道
やがて来るお一人様の指定席
ダイエット別腹にある非常線
先生のいい子ではないクラス会
一杯のバリュウムで済む今朝の食

堺市 楽原道夫

日本の未来空疎な揭示板

スクワットしてると神が通り過ぎ

教室の後ろの黒板に告る

中庭に星のカケラを埋めてやる

粘ついてきた抽斗の奥の物

平成も四半世紀の常備灯

樫原市 居谷真理子

握手して吉か凶かの静電気

舌の先尻尾の先つちよまでワタシ

浅蜷煮殺して本日つつがなし

自販機の律儀がぬくい釣りを出す

ハーブティー仏さんにも私にも

逝くときはこの世に深く礼をする

大阪市 谷口義

時どきは食べたくなってくる暑中

血圧は低目で義理堅い男

腹を立てたら蹴躰いたりもする

にっちもさっちもが夕焼けになりました

言いそびれたままで昼御飯になり

さりげなく暑中見舞を出しておく

熊本市 永田俊子

生まれて百年なるようになった小さい私

戦死者思う青梅ひとつ握りしめ

青梅が地軸を叩く九条是非

いつか来た道忘れたらしい落とし穴

白玉団子過去埋めて丸める百寿

いいじゃない多神教者のお身拭い

篠山市 酒井真由

遊んで欲しいパパは報道カメラマン

大相撲中断五時のニュースです

八月の森に水音火の匂い

吐息ただよう五重の塔のてつぺんに

若き日の自負はかえらぬ晶子の忌

素のままが似合う漢といて涼し

枚方市 伊達郁夫

神様が気付いてくれるまで叫ぶ

青信号魔女のトリックかも知れぬ

歩かねばまだ歩かねば枯れていく

長生きを祝う陰には泣く介護

出来たての夏がふらふらやって来る

てつぺんに届かぬ石を今日も積む

紀の川市 辻内次根

スーパーに何があるかを知り尽くす

爪楊枝程の立場を確保する

ストックはほとんど期限切れ間近

片付けた部屋に慌てた跡がある

男だと力説節から漏れる

一斉に飛んだ雀は幻か

鳥取市 森 山 盛 桜

捨てられたティッシュは死んでなどいない

無遠慮に人差指を向けて来る

遠雷の如く罵声を聞き流す

横文字を挟むと非才には見えぬ

タイマーの律儀さに気が滅入る

ステコは白だと思うのは古い

河内長野市 村 上 直 樹

拝み討ち改憲論を真つ二つ

放屁一発悩みを空へぶつ放す

加齢やと言うてとことん葉漬け

急かされてとうとう遺書を書かされる

ぼこぼこでも愛車と妻はこのまんま

茶柱の湯呑みを妻の手に戻す

藤井寺市 太 田 扶 美 代

物忘れ突然現われた臍

ハイキング吉野の風はうすみどり

つらい話まだ後編があるなんて

うす塩振れば食べられそうな緑

泣き虫ね何も無いのに泣いてはる

猫の足拭いて雑巾使い切る

堺 市 矢 倉 五 月

水割り琥珀ひとりぼっちも悪くない

正直が過ぎて転んだ二度三度

一行のドラマがわたしまだ書けぬ

ルージュ濃くぶれず歩いてるあなた
ピーヒャラと笛を吹くしか手立てなく
タンポポの綿毛年輪など知らず

大阪市 榎 本 日 出

金持の悩みの方が深刻ね

鬼になつていないか鏡じつと見る

逃げられぬ疫病神と立ち向う

腕組んで歩いたことのないふたり

大器晩成昔の夢と諦めた

乱雑な部屋が私の別世界

羽曳野市 三 好 専 平

ペンペン草になつてゆられてみたい風

捨てられた自転車だれかを待っている

鬼哭啾啾パチスロ屋の看板

九回の裏に藤川もういない

告解の人まずしくて隠れ里

小便が出るこの上なにをのぞむのか

八尾市 宮 崎 シ マ 子

笑ってくれる友へ私のどじ話

百万の束封切ったことがない

叱らずに父の大きな咳払い

防風林父の腕よふところよ

窓際で野生に戻る羽繕い

忍の字が頭にあるが血がたぎる

吹田市 山 本 希久子

いい旅でした津軽方言温かい
引潮の海で無能をさらけ出す
わたくしの耳を素通りカタカナ語
夕焼けの向こう明日がほほ笑んだ
城塞の石垣反戦歌唄う
良いニュース悪いニュースと梅雨晴れ間

西宮市 緒 方 美津子

免許証を返しあわててウオーキング
宝くじでまだ笑ったことがない
父の日におおきにという妻の酌
メタボの夫を論している野菜
なが電話夫寝てからいたします
じゃが芋は箱より土間が好きらしい

岸和田市 岩 佐 ダン吉

庇われていたんだと知るありがとう
時どきはヒト科卒業したくなる
規則だと私に言う気なんですか
とりあえずお義理の拍手だけはする
まだまだと両の拳を固くする
右左器用な舌を持つてはる

豊中市 水 野 黒 兎

ゆうゆうに見えて汗あり新記録
自ずから路郎水府の下に蹊^{せき}
生葉の香りも初夏の道修町

熊蔵は祖父の名ほんま怖かった
梅雨晴れ間虫干しをする記憶力
無の境地からほど遠い歯の治療

鳥取市 夏 目 一 粹

シャボン玉ひろい空でもすぐ弾け
有頂天指の爪までさくら色
神さまに文句いいいたい時もある
極楽はないと思つて生きている
種を蒔くことを忘れていませんか
無い袖をふると心が満ちてくる

出雲市 竹 治 ちかし

簡単に褪せない昭和史の汚点
まだ意欲あつて赤字の墓が建つ
国会を傍聴日本人の顔
美学とは悲し ベツカム引退し
悔いのない生命でしたと差し上げる
度ごとに中身問うてるのし袋

鳥取市 高 浜 勇

ドア押せば青空だとはかぎらない
穴掘つて過去に土かけ水を撒く
人並みに心の窓にゴーヤ植え
やがて来る結末触れぬようにする
落ちて行く峠にやがて立つだろう
もう一度会いたいという人になる

奈良市 米田 恭 昌

靈山寺に來れば亡き師亡き柳友偲ばれる(靈山寺吟行)
薔薇の漢字書く助つ人の電子辞書

私から私勞るばら届く

役員会身内ばかりの小売店

趣味の欄いつも読書と木偶坊

どや顔のアベノハルカス日本一

池田市 栗田 久子

紫陽花の候思い出す人がいる

一呼吸置けばあなたを許せそう

最後には相手の方に向く流れ

野菜好き夏は毎日サラダの日

ごめんねと即座に言つた後は楽

グラス手に鮎の小骨は苦にならず

四條畷市 吉岡 修

すぐ終るくせにながながにらみ合う

雷を落とす彦左の役が要る

なんだろう切手が横にはつてある

お笑いがニュース読むのを聞き流す

外交はもつとわいわい言うてくれ

虫かごに入れたゴキブリ虫の顔

尼崎市 市坪 武臣

亡き父の最後の手紙宝物

偉大な師弟二人揃って榮譽賞

一本の線のためらうあみだくじ

トンネルはスピード上げて通り抜け

箸袋旅の記念に頂こう

世渡りの上手な波にヒョイと乗り

神戸市 伊勢田 毅

祭壇の亡妻がやんわり釘を刺す

雨の日は遺影の亡妻と長話

あぶな絵を知らないままで逝つた妻

亡妻に似た後姿に従いて行く

今日の計遺影に伝え外へ出る

寝て起きてひとり仏の灯を拝む

枚方市 海老池 洋

国防軍へじりじり動く第九条

デフレインフレ弱者がいつも泣かされる

身に覚えあつて苦笑をするマンガ

開き直れば低く見えだす高い壁

山なりのボール投げ合う夫婦仲

薄塩で残り時間を食べている

松山市 古手川 光

富士山の本音はそつとしておいて

原発輸出御負け付いてるかも知れぬ

いいものはいい押し付けられた憲法も

改憲して孫戦場へ遣りますか

クールビズヒト科喰つてゐる野性

今でしよう今を生きろと蟬しぐれ

藤井寺市 鈴木 いさお

人生の余滴へスパイスを少し

フィクションの世界で君と添い遂げる

口遊む挽歌は亡母の七回忌

遅咲きの花だゆると枯れましよう

ホスピスの窓から洩れるアヴェマリア

みちのく紀行啄木も見た山や川

高槻市 片山 かずお

声高の言葉足らずが揉めさせる

挨拶が遅れて気まずさが続く

老け込んでなるかと夢を持ち続け

古いこと忘れぬ妻の記憶力

ほがらかを装い肩こりが続く

わかっている言うのに妻が指図する

大阪市 江島谷 勝弘

同い年なのにピカピカ光ってる

ストローでビール飲んだが旨くない

古稀まじか今が花だと思ってる

胸座を掴んだが投げ飛ばされる

官邸に幽霊が出るのですって

淋しいと思わなかった定年日

鳥取県 西谷 悦子

挫折した夢のはしっこ挿木する

脇役も主役もこなす古稀になり

前向きに生きて感謝の日日送る

価値観の相違乗り越え添うている

飢え知らず生きる感謝の米を研ぐ

生真面目を変えたいままに月日経ち

大阪市 神夏磯 典子

家中に灯りをつけた誕生日

いちにちがだんだん軽くなるひとり

愛猫と長生きごっこしています

抜けがらもよいいくらでも入る知恵

地図の上遊んでいます老いの馬車

くすり十錠 舌に励まされ

高槻市 安田 忠子

好きなこととしている時は天気です

婦唱夫随二万歩歩き旨い酒

ギャル達の集いのような串カツ屋

子に心配かけず好き放題してる

嬉しそうに花の本見るおばあちゃん

温い便座にやつと替え平和

米子市 吉田 陽子

久し振りミシン楽しく踏み続け

庭見れば露にさんしょうメニユー湧く

一〇〇〇メートル制覇を夢に山登り

サイドミラーの死角頭にたたき込む

頼みの綱がないか引き出しあけてみる

時々はこっそりしてる四つん這い

東かがわ市 川崎 ひかり

草に寝て見る空心丸くなる
旅をして我住む町が世界一
かけ違ふボタンそのまま梅雨に入る
人様の全て知らない方がいい
気配りが過ぎて私に影がない

大田市 中居 善信

探してる同じ匂いのする人を
肩の力抜きすぎたのか風邪をひく
原発もダムもいずれば負の遺産
歩を一つ天下分け目となる場所へ
元氣そうだとみんなは言うがそうでない

西予市 黒田 茂代

シューマン聞く時は何にも考えぬ
京の旅最後の夜の胡麻豆腐
過去を探すと無くしたものの多いこと
満開のそれでも淋し桐の花
剪定の出来る高さに切る庭木

高知県 小澤 幸泉

豊かさをゴミ山脈に積み上げる
主義主張やめて拍手がなりやまず
手弁当さげて素直な亭主族
雑草の強さが消えた城下町
壁紙をはがすと親父泣いている

熊本県 岩切 康子

古花を摘まれ美しく生く矢車草
気が乗らぬ何故か何故か自問自笑
入院着靴下までも名前書く
矢車草抜けば後にはコスモスが
岩間から伸びる草木逞しい

唐津市 坂本 蜂朗

停年後妻のガイドで生かされる
リハビリで希望をつなぐ喜寿の春
人人が優しくなったロスタイム
ご近所の素顔が見える格子窓
学帽も制服もなくイヤリング

唐津市 山口 高明

拝顔の秘仏はゆかし孔子像
あるものがあれば義理など欠きはせぬ
コンタクト外せば美女もピカソの絵
あのひとに火の輪くぐつて逢いにいく
玄関に虫除け予防おとこ靴

札幌市 小沢 淳

寒冷地裏切り知らぬイモの花
やあやあと自慢話のカモにされ
取扱い注意の遺跡私です
定速でいつも流れに遅れてる
いくばくの道に肩の荷重くなる

札幌市 三浦強一

幸せという逃げ水を追っている
男氣を出して得しことがない
駅裏の昭和残像縄のれん
オフレコの話が旨い縄のれん
居眠りの妻は埴輪の口をして

砂川市 大橋政良

檜山に芋やかぼちやの市が立つ
老々介護めがね外して涙拭く
容赦なくおそいかかつてくる軌跡
退化する心の疵が黒かった
耳向ける方に流れるスキヤンダル

弘前市 岡本花匠

カッコーの初鳴き聴いて種を蒔く
三浦氏の快拳に賛辞する市民
ヘルパーに笑顔の妻がよみがえる
ストレスの海は嫌いな狭心症
菜園に豆ときゅうりの貌光る

弘前市 今愁女

白神の温泉から眺む世界遺産
神の憤怒か竜巻が多発する
ほどよい雨の台風ならば待つ農家
あの大雪だ空梅雨なんて滅相な
水無月の早朝カッコーの初音聴く

弘前市 須郷井蛙

白髪でも禿でも生きた勲章じゃ
愛犬と勝負しあっている命
デイサービス懐メロ曲に拍手沸く
窓際の意見軽い音にされ
朝刊を待つて延長見ずに寝る

弘前市 高橋洋子

風下に生きて味わう面白味
立ち直り日記すらすら書ける幸
百歳を生きてためらう医者通い
ピカピカのお鍋に母の生きた道
大胆な夫の手料理乙な味

弘前市 富士慕情

自分史の苦労話に付く尾鰭
隣との境界線にある火種
土に還る方程式がまだ解けぬ
花野飛ぶ蝶は目移りばかりする
陽が落ちて月はますます冴えてくる

青森県 松山芳生

りんごと遊んで長寿と手を繋ぐ
恐れはしない地球を守る平和論
トレモロに語り尽きない好奇心
忘却の彼方に眠る森がある
北へ北へとモグラ叩きがまだ続く

黒石市 相馬 一花

遊びから悟りを開く糞真面目
わが同期雄一郎が万万歳
団塊の夫婦は言わぬ腹の底
津軽三味聴いて体調整える
もう傘寿この世で油売りたいな

平川市 小寺 花峯

濁点が離れぬ先のいばら道
また友を作ってしまう酒がある
独り飲むおそらく明日も一人だろう
武骨な手針の穴にはかなわない
いつだって変わっています塩加減

さいたま市 星野 育子

父の日は偲んで手紙読み返す
帯タスキに合わず選ぶ党がない
ひらがなと漢字のバランスが大事
コンサートホールの質は聴くマナー
オイコラッとは言わないDJポリス

東京都 岸野 あやめ

紳士です静かな会釈する気品
さびしいね後期高齢ランク付け
今の世も臉の母はやはり居る
簿記の手は要らぬパソコンあればよい
催促は出来ぬ内緒の約束に

東京都 まえで とよこ

ベランダの植木鉢にも夏がきた
あさのかぜバセリバジルの芽がかおる
おべんとう しそのふたばをひとつのせ
半袖の腕たのもしきPKO
街をゆくスパークールビズたのし

横浜市 小野 句多留

乱高下株に眠れぬ貧乏性
親離れ始めた夏期のスケジュール
御開帳二時間待ちを有難がり(山形山寺立石寺)
終盤の旅明日からを重くする
足早の講師につづくブラリ会

横浜市 菊地 政勝

いざこざの訳をすずめが知れたがり
極論を吐いて延命策を練る
うつすらと涙が滲む解凍魚
思いやる気持は見せぬシュレッダー
歳時記の謀反つゆ時水不足

川崎市 三浦 きぬ

一年の計などあれば老いられず
少しでも早目に逝くが幸せよ
何歳から老後ですかと尋ねたい
退職後たどりついたがこのホーム
大正昭和どっぷり浸り旅立つ身

富山市 島

ひかる

犬山市 関本 かつ子

雲漢の鵲橋にある逢瀬

煩惱を掻き千切らせる津軽三味

真夏日に雪舞う三味に酔い痴れる

遍歴を辿り落ち着く斜陽館

乾ききった雑巾にある独り言

可児市 板山 まみ子

北海道遊びでならばパラダイス

でき過ぎて困る野菜が配られる

世間の目気にしないから斜に生きる

晩酌の一杯達者への褒美

八十で山に行く人寝てる人

犬山市 金子 美千代

頼みたい事溜めておく子の帰省

はつらつと動き抜け殻持ち帰る

通りがかりに入った終活セミナー

インドアの仕事は雨の日へ残す

期限切れに追われて食べる備蓄品

犬山市 吉田 幸子

田植機に任せただけでいかぬ苗

つまずいた小石が答持つて来た

草原のダニは散歩の犬ねらう

屈辱から抜け一回りでかい胸

警鐘に耳傾ける赤い靴

一日に三度磨いて歯周病

物置の一等席に防災具

円相場内緒の株も乱高下

漁師にもガイドにもなる島育ち

飼い主が楽しむだけの犬の服

愛知県 早川 遡行

予約してあるから急ぐことはない

誤字脱字しつかり書いたつもりでも

耕せば答えてくれる春の土

あれ以来やさしくなった鬼コーチ

六十と七十の差はあまりない

京都府 高島 啓子

飄逸な顔ときにする哲学者

ホップステップまでは人並みにできる

釈然とせぬが口出すことはない

達人は流れに沿って生きていく

聞き役になつてお冷やを二杯飲む

京都府 坪井 孝一

団塊の辿り着く沖遠ざかる

人生ゲームどんと背を押すボクの影

最初はグーあとは凡人演じてる

微笑みを好意とすぐに変えるボク

艶のない靴でも家族温めてる

京都市 西村 益子

夫留守溜めてたビデオ消化する

加齢かな涙腺弱く笑い者

探春に疲れ木陰でお茶と飴

私色に少しふくれた蚊の御中

ゆつたりとプールに浮いて憂さ晴らす

京都市 藤井 文代

どちらかが相づち打てば咲く噂

ゆつたりとしたくせかせか暮らしてる

よそいき着備えてるだけ誘いなし

787煙に巻いてまた飛んだ

鳥インフルかかればきつと著名人

京都市 榎本 宏子

門口まで毎日來てる福の神

純粹なところ邪魔する世間体

ばあちゃんの古着孫にはニューモード

風水の通りに部屋を変えてみる

お好きにどうぞ息子を嫁にハイタッチ

京都市 三宅 満子

原発の不安と猛暑闘ぎ合い

緑蔭のしじまを破る笑い声

好奇心あふれ身体がついて來ぬ

会いたい人來ないし欠席にマル

宇宙への夢も百円貯金から

亀岡市 井上 森生

病むことも人生航路を盛り上げる

病苦ならすべてを受けて立つ覚悟

激痛を走らす我が身の強いこと

身の痛み与えた神の意を探る

病魔から見事抜け出る策を待つ

長岡京市 山田 葉子

見逃してもらった罪は数えない

多病かかえ残り時間を明かされる

見守ってもらいぼつかり灯がとまる

追求しない君の秘密は君のもの

コーラスで盛り上がったらすぐランチ

大阪市 阿野 壽美子

会長に祭り上げられ奮起する

子供留守騒音なしで拍子抜け

定年で憧れた暇有り過ぎる

戸を開けてお帰りの声疲れ飛び

ほどほどのお酒にするは難しい

大阪市 池上 清治

園遊会誘いがあれば行くつもり

誘われて着てゆくものに迷いだし

寝る時のマスク朝には顎の下

お辞儀するマスクの女妻だった

繁昌亭天神様が肩を貸し

大阪市 井丸昌紀

理想論に飽きて本音の出る屋台
寒さには弱いが暑さにも弱い
切り札を握つていと言つておく
紫陽花は晴れが好きだという噂
特上にぎり実は生姜が主役です

大阪市 岩崎公誠

半分は自信ないまま吠える僕
階段の真ん中辺り運拾い
本だけの知識並べて薄っぺら
あくまでと挑む姿勢の放つ鬼気
笑顔から貰つたヒントすばらしい

大阪市 榎本舞夢

八十歳お祝いされて気がついた
母の年越えてこれから私流
クラス会最後に残るのは誰か
然りげ無く立つても座席譲られる
八十の手習スマホ教えられ

大阪市 大川桃花

救急車友はお家に着いていた
イベントに行く居てはる顔馴染
カメラマン多くて薔薇も疲れ気味
母の日に特上うなぎ御馳になる
片眉でごめんあそばせ電話口

大阪市 奥村五月

過疎の村地蔵さまだけまだ元氣
妻グルメ僕は手酌でカップ麺
家計簿がグツとこらえる徳俵
左遷地で人の温もり知りました
古希すぎて母に甘えて生きている

大阪市 笠嶋惠美

おついたち決意の一步出て齒科へ
齒科の椅子やつと座つて身をまかす
夫入院まさかまさかの金婚日
息子にはざっくり話すこれからを
娘には細かく話すこれからを

大阪市 川端一步

異状なし三食昼寝終えました
お話も少しひかえた味がよい
しとやかで眩しい時もありました
やわらかい本にあしたの道を聞く
孫たちにふるまい慎しい二人

大阪市 熊代菜月

四季咲きの花に想いをさとられる
赤丸をまた増します医者通い
肝試ししっかり手と手にぎり合い
春彼岸亡夫の時計捻子を巻く
我が一生長し短し恙なく

大阪市 古今堂 蕉子

つかえは取れぬ良くても悪くても
日なたの椅子日蔭の椅子に負けて夏
築百年ゆつくり時間過ぎて候
計算の出来ぬ人生だから丸
同窓会今や五人に絞られる

大阪市 小谷 集一

淋しきは労りの目に出会うとき
決断を迫ると愛が消えて行く
輪の中でひとり光っている孤独
妻の振るタクト無視してマイペース
老いてなおいざ鎌倉の時を待つ

大阪市 近藤 正

ニューボール知らぬ存ぜぬコミッショナー
経ヶ岬にXバンドミスマッチ
口止めをした本人が口を割り
やみくもに誘致してみたオスプレイ
小選挙区司法の壁が許さな

大阪市 坂 裕之

世間並み妻や仲間を支えられ
真ん中で勝負挑んで結果出す
親切な役所の態度何かある
決済がきつちりできてから言つて
あるがまま生きていきたい歪んだ世

大阪市 佐藤 忠昭

優しさが弱い子供を駄目にした
草食系優しい男気に食わぬ
優しくて不平言わぬが頼りない
優しくて男前だがパラサイト
優しい子財産無いとは切り出せず

大阪市 澤田 定子

ほろ苦い路の煮物は祖母の味
さくらんぼ味も形も大好きよ
町会の婦人部喫茶閑古鳥
囀りに歩を止め樹上見上げてる
長い読経眠気もおし痺れ足

大阪市 田浦 實

職人気質好きと誇りが支えてる
逆風に耐えた粘りが物を言い
敬老パス散歩コースの円広げ
子育てツバメ雨の散歩の背中押す
鮎鮎の大好きなのが縁となり

大阪市 津村 志華子

仏間の灯此処がいちばん寛げる
堪忍の袋の口は閉じておこ
こだわりを捨ててさばさば生きている
元気かいメールは少し素っ気ない
進化する世に戸惑うている河童

大阪市 津 守 なぎさ

気づかいを肌で感じる甥夫婦
お隣と今日も元気の御挨拶
エアコンがある安心の夜が更ける
熱中症不安外出控えとく
みな無口予約検診待ち時間

大阪市 寺 井 弘 子

知っているはずの言葉が宙に浮く
散り散りに道草をする花いかだ
百均で心ゆくまで浪費する
古書市で手放した本買い戻す
主婦の顔捨てて至福の絵画展

大阪市 原 田 すみ子

参観日家業の母の身はひとつ
仲良しの姉妹だから有るはじめ
居てること知らせる咳をたまにする
群れてても雑草という草は無い
生きてきた自信風にも揺れるとき

大阪市 板 東 倫 子

道徳も礼儀も知らぬ金満国
お互いに老いたら話が合って来た
弾けるか萎むか若者手段無し
仙人の年になつても生きている
そろそろと出番の用意策たち

大阪市 平 嶋 美智子

猛暑日の警備するどい眼して
温情をいただき感謝感謝です
胸はずむ社交ダンスの遙かな日
雀らのチウンチウンチウンに癒される
こんもりのサザンカ宿にする雀

大阪市 伏 見 雅 明

打ち明けて胸のつかえがさらに増え
罪のない嘘も暮らしの潤滑油
理想論振り回すより今日のパン
いざとなりや鬼とでも手を組む覚悟
手始めにボンボン捨てる整理学

大阪市 升 成 好

吹き抜ける心の風を止められず
身のたけに合わせて前向きに生きる
悩むから医者に聞かない酒の量
人並みはいいみそ汁にたまご焼き
不器用な手だが握ると温かい

大阪市 松 尾 柳 右 子

医者通い仕事のように成っている
一日の終わりだよと髪洗う
歯が抜けて食事不安に成ってくる
風呂上り冷水飲み座りこむ
買物の行き帰りにウォーキング

大阪市 山崎 君子

母の日にあじさい届くうれしさよ
娘の電話いつも嬉しく感謝して
ヘルパーさん何でもござれ嬉しくて
初夏の空四天王寺の鐘ひびく
デイサービス習字久々筆を持つ

大阪市 山本 加お里

ど忘れを笑って照れる内はいい
今年こそそのんびりいこう途中下車
しんどいとたまには言って驚かす
健康で看護ができる幸せよ
早朝の月を眺めて勇気わく

大阪市 吉内 夕力子

今ちよつと勢いがあるドンと出る
好きに生き言われてもなお孤独
一言の荷物持ちましよ小学生
行くまでは反省くすり笑顔です
白木蓮一輪いやす内の庭

大阪市 吉村 一風

平凡に生きて好きです玉子焼き
まだ弾む残り火そつと抱いている
皿洗う水出しすぎと叱られる
ポコポコと心静まる木魚の音
今日は赤飯仏壇の鐘訝えている

堺市 大久保 のん子

若い気のリズムで今日も明けてくる
八十路きてまだ夢すてぬ日過す
逆立ちもしよう昔が戻るなら
満ち足りたひと日寝息も安らかに
恥じること年をとつても忘れない

堺市 大隅 克博

向い風味方につけて離陸する
ストレスに鍛えられてる僕がいる
二人居る弱い私と強い僕
当り前の事に感謝をもつとせにや
性能を良くするだけで省エネか

堺市 荻野 像山

雑踏を避けて出会ったひつたくり
ペダル漕ぐだけで見せ場になるお猿
擦りむいたようなズボンを穿く文化
欠席者殺す噂のクラス会
急がずに楽しましよういい老後

堺市 奥 時雄

いくらかはビールに釣られてのゴルフ
飛び過ぎのオービーですと慰める
コンビニとヘルパー村の命綱
ファールボール返してあげて肩痛め
歯痒いと貶すが自分では出来ず

堺市加島由一

ふる里の朝まで続くクラス会
釣り三味いなか暮らしも選択肢
父の日は妻が演出してたんだ
涼しげに首筋の汗拭く少女
慶弔の慶が少なくなる猛暑

堺市源田八千代

同胞の隙に入り込む余地はなし
父の日も肌着とパジャマしか要らぬ
ショートステイ禁酒禁煙では困る
ミニ畑に大袈裟な杭 夏野菜
発表会に向け絶妙なハーモニー

堺市齋藤さくら

梅雨入りに晴れが続いて喜べぬ
父さんの形見の辞書を使つて
人並みに親を送れただけのこと
病院の待合室が社交場に
いつの日か私を孫がおんぶする

堺市澤井敏治

夏の海でつかい夕陽じゅんと吞む
暑中見舞い冬眠中と書き添える
欠席の追伸に書く 生きている
青空にすまんすまんとタバコ吸う
水鉄砲恋のちよっかいかも知れぬ

堺市(敬)志田千代

猛暑日をしのぐ真つ赤な泣うちわ
柄物のステコなんてはけるかい
五十年前に誘つて欲しかった
同期会卒業いたしますかしこ
その時に叱らなければならぬボチ

堺市遠山唯教

原発に翻弄されて生きる日日
しかたなく活断層の上にいる
魂を揺さ振る嫁のアヴェマリア
こころざし半ば無念の友見舞う
空きつ腹にビンタを食つてきた昭和

堺市内藤憲彦

さりげなく先にソロバン弾く妻
行止りまで二人仲良く生きていく
この島に原発要らぬ八月忌
グサリ刺す娘だんだん母に似る
予告編に飽きて本編身に行かぬ

堺市西村りつえ

わけありを語れば軽く明るなり
飲む会の大事な下戸は外さない
気遣いせず一人で眠る墓の下
真似るたびゴッホの絵から遠くなり
紫陽花に迷わされてる絵具皿

堺市宮本かりん

カーテンを開けると朝の顔になる
娘ともワンクッションを置いておく

すぐけんかすぐに忘れて二人

一日の疲れが飛んだいい電話

嬉しい話聞いても老いの目が潤む

堺市村上玄也

朽ちてゆく身体を自覚してる喜寿

痛いのも痒いのもみな年のせい

何べんも見たとこ妻が探し出す

連休は首引つ込めて亀でいる

褒められてやる気が湧いてくる稽古

和泉市横山捷也

正直だ鏡に老いはだまされぬ

冷蔵庫レシビ残して妻は留守

補聴器に軽い噂が飛び火する

夜明け前から目覚めている無職

熱カンの一杯生きてる音がする

泉佐野市山本蛙城

受診券カードケースに蟠踞かな

人が人恋しくなれと梅雨に入る

知命から余命へ迫る岸の音

怠けると手足痛むと骨が鳴る

放つとかれ経読む日々の葱坊主

茨木市島田誠一

補助輪が取れて不敵になるベダル
残すもの無くて遺言書きづらい

くだおれ太郎も雇用不安定

包丁と通帳妻は離さない

コンビニが淋しがり屋を呼ぶ夜更け

茨木市藤井正雄

還付税蘭の鉢買うゆとり買う

落花生読書は一時中止する

練習が実った知事の始球式

もう一度逢う約束の人の通夜

アドリブでさらい失言カバーする

大阪狭山市矢野梓

懐しい服また仕舞う衣更え

煮えるまで流しの前でストレッチ

言葉数少なく誤解されやすい

こんな日もあったのかしら日記見る

髪染めて昔の友に逢いに行く

交野市森本弘風

素人が素人らしく演じてる

よれよれになった背広にある誇り

酒の量監視されてる父の日も

酒の毒昨日の事も忘れさせ

アベノミクス地震予報に似ておぼろ

河内長野市 植村喜代

地球も怖い星になり逃げ場なし

平和でも並ぶのですねラーメン屋

だんだんに屈む体を見てさびし

クラス会来る人減つて友の家

大殺界過ぎたはずにもころげ落ち

河内長野市 梶原弘光

ぎくしゃくに歯止めをかける花一輪

創業期皆の足並み揃つてた

タイミング早い拍手をにらまれる

私には過ぎた主人と犬が吠え

切られ役隠し持つてる不発弾

河内長野市 木見谷孝代

冷奴飽きない味にあるヒント

煎餅のいい音がしてまだ丈夫

お煎茶で始まりお煎茶で終わる

目玉焼きの硬さでもめている夫婦

誕生日思いをこめてバラを描く

河内長野市 黒岩靖博

終焉にそなえ身支度待つ切符

後ろ髪ひかれて故郷あとにする

諍いはゴメンで終る夫婦仲

句作りで下車を忘れて句も忘れ

若作りしても走れず老いの坂

河内長野市 坂上淳司

長雨に蛙も鳴かぬ休耕田

農機具のローンを残し休耕田

休耕田御田植祭華やかに

上等の傘は忘れぬ梅雨晴れ間

ふんふんと心療内科聞き上手

河内長野市 谷久美子

鏡見て今日一日の運を読む

咲き誇る花にもあつた選択肢

正念場ぐつとこらえて先を読む

海だけをもとに戻した大津波

爺ちゃんが旅行決めたら傘がいる

河内長野市 松岡篤

路地の風吸うて気持がゆつたりと

ベットより安い理髪ですつきりと

ごめんねですつきりとした老夫婦

土付いた野菜鮮度を自己主張

先祖よりベットの墓に足繁く

河内長野市 水谷正子

ダイケアで覚えた艶歌風呂の中

行く川の流れにも似たケアセンタ―

三浦さんその意気や善し八十路坂

桜みて花火見れそうまだ元気

台風の便りほつほつ夏は来ぬ

河内長野市 山室光弘

値上りの鰻土用の前に食べ
押さえ役不在のトラにサヨナラが
乱高下アベノミクスの涙雨
白旗を挙げて戻した繕りの数
貸してくれ戻す気のない子の無心

岸和田市 堤 梢代

漬物をかんで健康たしかめる
手の皴もつまめるようになりました
人間が好きでカラオケ唄ってる
ぼちぼちと歩いて歳を数えてる
うつとうしい梅雨空眺め喝を入れ

岸和田市 森 元 ふみよ

アベノミクス原発外交駄目でしょう
歳かさね燃ゆる恋などまぶしすぎ
これからはゆると行こう米寿道
一枚の写真で元氣取り戻す
旅立ちの写真はどれとかしましい

岸和田市 雪 本 珠子

素っぴんの私に猫がリアクション
作句にも氣乗りがしない日が続く
娘逝き人生観が変わりだす
成り行きの波に任せる我が余生
現実を忘れない時ないですか

吹田市 太田 昭

白米が昭和の飢えを語り出す
芋だけで生きる幸せだつてある
七転び転んだままで寝てしまう
還らない人と飲んでる旨い酒
省略法でアレソレこれで生きている

吹田市 大谷 篤子

逆風をゆつくり対峙受けとめる
すっぴんの心で仲間と笑い合う
七合目手前で知った力加減
余命など知らないままで完走する
ストレスが溜まると花の手入れする

吹田市 木下 敏子

倅せな顔を浮かべている湯舟
八十路坂生命線はどの辺り
アベノミクスまだまだ不安曇り空
いらいらとしても明日は明日の風
今日の日をしつかり生きた手を合す

吹田市 藏 田 光子

つばめの巣頭上注意を促され
玉子かけひよこ一羽を食べました
得意気に力関係見せつける
力だめし勇氣を出して解いてみる
不安氣に握りしめてる小さな手

吹田市 須磨活恵

経緯の絆大事に日々を織る
熱いものまだ迸る生きている
青葉風心の灰汁が抜けるよう
好奇心いろんなドアをノックする
わたくしの味方掃除機洗濯機

吹田市 瀬戸 まさよ

具の多い味噌汁カレー母の味
差し上げたい栄誉賞山ほどいます
几帳面新聞溜めるのは嫌い
あの人もこの人も思い出話
長生きをしようね友の目に涙

吹田市 野下之男

口と足どれも元気なトップです
ミサイルも出たり消えたり忙しい
大口をたたけばこだま帰り来る
そうれ見ろ言いたいだろう富士の山
あの人が僕の母役学芸会

高石市 浅野房子

達磨さん転んだ私もころんだ
長生きを痛い痒いと文句言う
医者薬よりタクシーが高く付く
六月に真夏日なんておかしいな
夕立を聞かなくなつてから久し

高槻市 井上照子

逆風に挑むランナー気骨あり
地球儀の海で真赤に燃える国
心ある言葉に揺れて許し合う
退院へ明るい声の四人部屋
若くあれ呆けては家に居られぬぞ

高槻市 指宿千枝子

五月晴れ東京湾を渡る旅
九十九里浜のお昼は海の幸
賑やかに食の至福に酔うている
浜に立ち夕日の加護で帰路につき
どの旅も行きはよいよい日記帳

高槻市 富田美義

あれソレとゼロに近づく物忘れ
家族葬の時代気遣い程々に
余生とは軽い会釈でこと足りる
仏壇の妻へ尽きない有難う
欲ですか無病息災せめて喜寿

高槻市 富田保子

要らぬのに墓地や株買え電話増え
嫌な世や悪いニュースはすぐ信じ
にんまりと妻に任せる濡れおちば
日本茶をボトルで飲んで美味しいか
わが道を歩く笑顔に会えるまで

高槻市 佐 甲 昭 二

高槻市 初 代 正 彦

やんわりと同封されてきた本音
ざわざわと私を囲む電子音

旗色は悪いが八十路の心意気

指折って本当の友の数を知ら

隣家との絆を保つ低い塀

高槻市 左右田 泰 雄

痛いところ突かれそつぽを向く白髪

八十路坂ゆっくり越える水入らず

照れくさい振りしてどもるパピプペポ

見極める力をくれた虫眼鏡

水くさいことは言わぬが花ですな

高槻市 島 田 千 鶴 子

母の日に自分に褒美買いました

テスト後は何も残らぬ一夜漬

御無沙汰を詫び合っている通夜の席

何食わぬ顔してヒントだけ貰う

電子レンジチンと鳴らして愛戻す

高槻市 杉 本 義 昭

若人をふるい立たせる甲子園

蛇行して一期一会に実を付ける

らんぼうな言葉の奥にある真

二代目になると傾く屋台骨

いちびりに耐えた同士がゴールイン

お茶漬けが一番好きと料理長
お父ちゃん猫なで声に気いつけや

まだまだと次の道を行く気概

大波を避けるつもりでいた誤算

若竹の灰汁は手抜きを許さない

高槻市 峯 村 勲 弘

衣替え家計に重いクールビズ

世論調査いつも私は蚊帳の外

ビオロンの音色に浸る雨の午後

おめでたの予兆パンダに託す夢

顔一面笑うサンコンさんが好き

豊中市 江 見 見 清

優しさをかなぐり捨てさせた面子

ストレスは溜めても血圧は低い

活断層がうごめくらしい街に住む

日替りの土俵で妻に負けている

道しるべ倒れて天を指している

豊中市 松 尾 美 智 代

蹴躓く度に理想は色褪せる

カサブランカ病の床にきつすぎる

話しながら手を動かして誉められる

時どきは転けて夫を振り向かす

夫婦で話す十年先の孫の事

豊中市 松村 里江

豊田林市 中崎 深雪

その後如何が気になるお人たんと居る

合鍵を渡されるほど信じ合い

紐一本締めて着崩れ直します

病む友よ拭いても曇る梅雨鏡

ホップステップジャンプが出来ぬあかんたれ

豊中市 藤井 則彦

空世辞を軽くなした澄まし顔

縦書きで綴るとしゃんとする背筋

ロダンの真似しては悪知恵絞り出す

育児の話になるとトイレへそつと立つ

二刀流ルーキーなんて見せぬ意地

豊田林市 片岡 智恵子

悟るまで何度も鼻を打つ金魚

夢は死ぬまで欲ばりのまま持ちつづけ

とつとつきの話とび出す鍋料理

若くいよう歳を忘れることにして

暗算の自信薄れて老いを知る

豊田林市 中井 アキ

丸木橋渡れば迷い消えますか

欲少しまだ残つてる白髪染め

そのままが好き優しい声を聞かされる

お誘いを断つてからまた微熱

それきりを反省してる筆不精

さくらんぼ口に含めば童顔

五七五はこころの小道に咲かす花

父の日は嫁だけが気配りの品

どくだみの白が正義を訴える

えらそうな顔して夏がやつてくる

豊田林市 山野 寿之

叶つても叶わなくとも夢を抱く

騙された振りして笑顔見せておく

ひらがながカタカナになる滑走路

古希迎えだんだん似合う寺参り

常識を捨てたら個性光り出す

寝屋川市 富山 ルイ子

大金を子等に残して友は逝く

家族葬お通夜の前に友に逢う

ミニトマト去年1400も取れ

あげるのが好きでせつせと水をやる

五時起きで配る野菜はまた胡瓜

寝屋川市 平松 かすみ

知恵袋父から貰いまだ残り

夏ですと教えてくれるアマリリス

電子化に占領された台所

遠路からわざわざ入れた白紙票

消費者にじわじわ円安が迫る

寢屋川市 森

茜

いい色をいただく樹皮がはがされる
ことり鳴るガラスの氷から初夏に
スノーピーとりだして読む淋しい日
連弾のおろそかにせぬ息づかい
組織から抜けてみたいと思う蟻

寢屋川市 山本三郎

自分史をマンガで書けば面白い
へソクリを工夫凝らして隠しく
連休の団地静かに陽が落ちる
連休に元氣いっぱい子の笑顔
ちらし見て安い市場へ走らせる

羽曳野市 安芸田泰子

紫陽花のプライド捨てた炎天下
言い敗けたお返し猫が難を受け
番組に合せて定めるスケジュール
領いただけ納得したわけでない
エベレスト登頂をした同い年

羽曳野市 宇都宮ちづる

怖かった亡母の話で盛り上がる
お隣の上達を待つピアノ音
タイマーに振り回されて主婦をする
野球中継あるとテレビが二台要る
できちゃった婚らしいドレスがふくらだ

羽曳野市 徳山みつこ

亡父より亡夫を偲ぶ父の日よ
シリコン入れた心空洞に
散らかしたのだけれ私しかない
片づけてどうぞお通り風の神
顔あげてひとりぐらしヘデビュする

羽曳野市 永田章司

コンビニもシルバー族へ招き猫
入れ歯ですガムとするめは遠慮する
開発でナビが欲しいと渡り鳥
年一度櫛の歯欠けるクラス会
警察の証拠真贋先ずチェック

羽曳野市 吉村久仁雄

グルメ旅終えて素うどんすする幸
年金の舌粉もんに強くなる
肩書きが失せてあふれるオヤジギャグ
隠し玉まだありそうな顔をする
妻の椅子座ると違う景色見え

東大阪市 笠井欣子

三回忌終えて肩の荷軽くなり
想うこと多すぎ白髪抜けてくる
不器用もうそは上手についている
体調のすぐれぬ時に不意の客
式服を出して嬉しい孫の婚

東大阪市 北村 賢子

風鈴の音に涼もらう里の駅
齒医者さんとして食うとは言わへんが
腕く蟬くさむらに置く炎天下
初めから顔をつくつていく車内
ツヤツヤに命たぎっている若葉

東大阪市 佐々木 満作

たればを悔いては明日に繋がらぬ
父の日に思わぬ子から旅切符
夢の中主役演じる僕がいる
指切りをしたのにそれつきり疎遠
デザートに如く食後の飲み薬

枚方市 安達 忠央

若い嫁俺の常識通じない
雑草の生える隙なし竜安寺
仏様信じたくなる遍路旅
長男がきつちりしてて楽隠居
過疎の村落に着けますと老い選び

枚方市 小林 わこ

一番に寝て一番に起きるおばあさん
一日の喜怒哀楽に疲れます
一段落つけて明日は墓参り
一つ覚え二つ忘れて笑えない
良い人でいようと半分は眠る

枚方市 丹後屋 肇

うたたねに羽織つてくれる夢の妻
ゴールインコースに一礼日本人
蚊一匹叩き殺して詫びている
反原発トラウマ一票振りかざす
探検家妻に詫び状書いている

枚方市 寺川 弘一

どんぐりも並んだ時は背伸びする
大いびき迷惑かけているらしい
手もみする生命線が伸びるよう
駅弁が食べたくなって旅に出る
人生にカンニングペーパーは無い

枚方市 二宮 紫鳳

コーヒーの香りで和する夫婦仲
春うらら愛犬自慢の散歩道
ほどほどの目もりが欲しいずばら癖
わだかまり雨に流してレインボー
会話にもナビが欲しいと老い二人

枚方市 二宮 山久

病む右手ふるい立たせてペン走る
生けてなおりんと生きてる花菖蒲
病窓の遠山山並み夏まじか
梅雨晴れ間布団たたきの音がする
蜜柑花におい放つて里帰り

藤井寺市 伊藤 アヤ子
気楽そうに生きてはるけど苦勞性
夢を語り続けて今も終らない

疊替え來客を待つ心地良き
クジャクサボテン一日だけの華かな
寝た切りの母こぼれゆくあの頃も

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

ふる里に人の氣配のないお寺
雑用は時計まわりに攻めてくる
しあわせな蝶が造花にふと迷う
激しさを絞り出さねば画布は白
水玉模様淋しいときのラブソング

藤井寺市 津田 シルク

鷹になる夢は添寝のママがみる
腰痛でお辞儀できない悪しからず
爺ちゃんのスニーカーキが壊れ
心付け懷に入れ初参加
何んとかなるさ独り咳き小豆粥

藤井寺市 高田 美代子

とつぜんの夏に首振る扇風機
何気ない眩きをふと拾われた
友達も婆ちゃんだった久し振り
父さんへの手紙そろそろ届く頃
シャワー全開今日一日を流す

藤井寺市 増井 ヨシ枝

天国から頑張れコール届く朝
アドレスも電話も消して梅雨晴れ間
恋心少しのぞかせ切手はる
痴呆の母亡母に逢いたし涙する
前向きと言われ顔出す好奇心

藤井寺市 俣野 登志子

老いの身仕度軽く少なくて慌てない
ここだけに出来ないここだけの話
暑いけど脱げば荷物になる上着
合併症軽い目眩にある覚悟
喧嘩後のいつものケーキよく膨れ

藤井寺市 吉田 喜代子

秀吉も驚いているモトクロス
目の前に置いた品物探すとは
三日前のメール知らない娘の怒り
サマータイム夏の野菜に起こされる
虫嫌い仲よくなつた虫も居る

藤井寺市 若松 雅枝

服に靴揃えて慶事まだ来ない
封筒が喜ぶ記念切手貼る
皺くちやの顔にも優し夏帽子
大阪にハルカス出来て日本一
卒寿の母も來客あれば紅をさす

松原市 森 松 まつお

声高の議論へビールついであり
激論になつてビールの泡も消え
世界遺産みんな見たいが暇もない
ゆつたり目の下着で過ごす日が増える
ショッピング疲れを知らぬ妻である

箕面市 酒 井 紀 華

人形に魂入れて息吹き返す
瓶の中勝手に遊ぶやじろべえ
空き瓶の貯金ただいま八合目
梅酒のビン定地にすわり琥珀色
ゴミの日にナポレオン瓶すてである

箕面市 出 口 セツ子

神様の愛でここまで生きのびる
追突されもう健康に戻れない
事故以来の痛みを老いとごまかされ
生きている証と痛み友とする
モノクロの日々を彩る子が二人

箕面市 広 島 巴 子

清清し少女のような青紅葉
千の風吹いたか亡父の夢を見る
悲しみの涙紫陽花虹に変え
格差ではないよ蛞蝓蝸牛
認知症予防に蚊との一騎打ち

守口市 井 上 桂 作

憲法の改正のは是非論尽くせ
朝夕の温度差減つて心地よく
熱中症三日前には雪かぶり
鯉のぼりまとめて祝う大空に
いつまでも近くて遠い鮮の国

八尾市 内 海 幸 生

同窓会これが最後の但し書き
強がりへ憫れみ込めた瞳をもらう
児の笑顔大人のエゴや愚痴に勝ち
セピア色した写真にはある気分
鎮めよう鏡へつくり笑いして

八尾市 高 杉 千 歩

卒寿米寿愛国論で夜を徹し
墓撫でるそう遠くない安住地
空梅雨に心配事が多すぎる
妃殿下の笑顔ばかり映される
演歌から叙情歌軍歌歌えない

八尾市 寺 川 はじめ

貰うもの貰うてあつさり帰る孫
コンビニに夜警託して街眠る
参院選やつと止まるかあのねじれ
直ぐ出そうでなかなか出ない九秒台
アベノミクスいよいよ禿げて来たメッキ

八尾市 村上 ミツ子

毎年よ梅雨入りの後降らぬのは
大阪湾にスナメリの親子見る
豊かな海の象徴スナメリが泳ぐ
後期高齢ときめく誘いありません
正論のパンチがつんとこころ打つ

大阪府 桑田 ゆきの

広告の裏にしつかり投稿句
から梅雨にイエローカードアベミクス
紫陽花も雨欲しがっている指針
風読んで裏口の戸開けている
九回の裏に潜んでいた女神

大阪府 野田 栄呼

紆余曲折気分転換歌唄う
物忘れ齡のせいだと怖くない
百歳をたぐり寄せるも夢でない
時忘れ庭の草抜き憩いの場
めりはりを探して今日も自由席

大阪府 初山 隆盛

萌えるいのち諸行無常の風の中
湯の宿にミナミを知っている女
せつかちも気長もおなじちよこで呑み
本場所と年金ともに年六度
合掌をすれば仏と対話でき

大阪府 米澤 俣子

篝火に美人鶴匠のデビュージュウ
もう二度と白いページに戻れない
少子化を喰う枇杷の実子沢山
善人に拾われラッキーな財布
核を持つ国が持つなという理屈

神戸市 木村 貴代子

食べたいと思える今日にありがとう
雨に泣き雨に喜ぶ地球人
雨が降る幸せいつか忘れてた
目も耳も休みが欲しいスマホの世
誘われた入部定めの人と遭う

神戸市 白川 淑子

つい頑張る昭和の癖が直らない
円熟期などと坊さん言うけれど
嬉しい日へそくり長いレシートに
指一本で出来るパソコン見つけた
坂の上パイプオルガン朝のミサ

神戸市 山崎 武彦

ふるさとを知らぬ男の祭り好き
ふるさとの風しか知らぬ母白寿
おだやかな海と頑固が対峙する
つり革にぶら下ってる安堵感
新しい出逢いを待っている綿毛

神戸市 山口 美穂

芦屋市 黒田 能子

お喋りの中から老いと生きる知恵
聞くだけでお役に立てぬ私です
未来図が小さくぼやけてきた傘寿
元氣そうに喋って疲れ持ち帰る
原発売の首相は事故に懲りてない

神戸市 山口 光久

飾らない世間見たくてメガネ買う
充電は済んだ明日の風を待つ
かすみ草主役になる日もう間近
チャンネルを選ぶ権利は孫にある
手入れた土は必ず恩かえす

相生市 中塚 礎石

祝日も畳んだままの日章旗
ペンだこへ休む暇なし鍬が待つ
運命を背負うて走るランドセル
妥協した輪にも小さな傷残し
千の恥背負い八十路の坂登る

明石市 梶谷 和郎

古い二人会話に孫を盛る夕餉
飼い主の空気を読んで振る尻尾
何事も金に置き換え考える
指先の渦に生き方問うてみる
ふるさとの訛に触れて鎧解く

人間に生まれてよかつたと思う
こつこつと紡いだものを大切に
ケアハウス夫婦で話す近頃は
ささやかですが贈ります志
幸せはいつもおいしい朝ご飯

芦屋市 竹山 千賀子

おしどりよおまえも独りぼっちかい
ハーマニカちよつぱり吹けて悦に入る
天然かと言われその気で過ごしてる
時々武器にしたいが出ぬ涙
センサーに今日も安全見守られ

尼崎市 加川 靖鬼

ぼつかりと浮いた頭を叩かれる
あじさいが山へ山へと誘い込む
猫じやらし私も猫になつてみる
味噌醤油酒ペニシリンみんな徴
口車に乗せてもらつていい気持ち

尼崎市 長浜 美籠

些細なはずなのに記憶を出ていかぬ
自問自答しても然程でない結果
シスターの手紙クルスを見るように
わたくしの尺度で埋めている余白
ああそうかそれならそれで行こ私

尼崎市 林 昭三

元氣なり雨戸を明けて欠伸して
粗茶どうぞ茶所のお茶格別に
薊なぜ不憫に思う刺を持ち
空梅雨は瑞穂の国の名が廃る
大阪の流行歌には雨お供

尼崎市 春城 年代

掛け軸の鯉跳ねているみどりの日
六月の闇に梔子仄と咲き
菜の花畠いちめんのおぼろ月
そんなこんなでかき込んでいる茶漬け
チェックのあともなつかしい亡夫のメモ

尼崎市 藤井 宏造

旅の宿つい食べすぎる朝の膳
手品師の洋服うさんくさすぎる
行きつけは青江三奈風ママの店
愛犬の介護なら喜んでする
社員証メダルのようにぶら下げる

尼崎市 山田 耕治

ただいまにランドセルごと抱いてやる
昼飯は妻の時間に合わせます
退院に光のシャワー降り注ぐ
小銭まできっちり分ける騒がしさ
目が合った若者さつと立ってくれ

加西市 金川 宣子

父の日は知らぬふりしてじつと待つ
ぎこちない仕草に託す介護ロボ
いよいよは金の力で介護受け
先頭のもみじマークで難逃れ
ハンガーに男の勝手吊るし上げ

川西市 西内 朋月

葉膳に蛇の黒焼き入れてある
新緑の宿に嬉しい豆御飯
善人の目線で見ると騙される
喧嘩するまえに白旗あげている
涙には弱くていつも損をする

川西市 山口 不動

フィクションを少し交えた弔辞読む
寝ころんで若葉を濡らす雨見てる
つばめの巣五匹も巣立つえらいなあ
アイマスク慣れない闇に寝つかれず
女子会の声高くなる飲みっぷり

川西市 米原 雪子

苦し紛れ言い分け嘘でカバーする
満面の笑顔迎えるハイタツチ
梅雨晴れ間勢づいた洗濯機
遅くても歩ける幸を噛みしめる
梅雨空を草花達が華やかに

三田市 石原 歳子

手の甲の血管浮いて母似です
金婚式をすることもなく夫が逝く
田を渡る風が遺影をなでてゆく
夫逝つて大黒柱繼ぐわたし
これからは月を愛でるも独りです

三田市 上垣 キヨミ

野仏に帽子あげたい日本晴れ
絵手紙の初歩教室に軽いくつ
ハッスルと葉を詰めて旅カバン
はつらつとラジオ体操地域の輪
老婆心捨てて今日から自由人

三田市 尾崎 一子

陽が昇る病の姑の頬なでる
新緑に祈る想いで姑見舞う
また一人ホスピス棟へ幸あらん
いい人がいい最期とはいかぬ世に
姑の笑み見たくてバスに乗る日課

三田市 北野 哲男

父の日は放浪したいのを我慢
ああビール夏の夕べの必需品
子が帰省柿の木ボンと叩きおり
様変わり古い故郷が夢に出る
乗り越して星降る駅に一人立つ

三田市 久保田 千代

待合室呼ばれるまでの週刊誌
感激の赤えんぴつに見る青春
棘ひとつ見せずに花は満開に
澄んだ目に涙のあともない魚
世の乱れ川の流れが美しい

三田市 田中 章子

リズムよい夫のいびきは誘眠剤
一日にひとつ笑いの種さがす
ちよつと待てこで笑ってくれるはず
古稀になる四人の兄はみな元氣
年齢に七十と書くうれしい日

三田市 福田 好文

目覚ましの要らぬ自由が老いを呼ぶ
霜降り目は目で味わつて並を買う
頷いて聞いた男が手を挙げぬ
人の目を気にせず咲いた零れ種
故郷に昔遊んだ川がない

三田市 堀 正和

一冊の句集も入れて旅カバン
笑わせてくれるガイドの津軽弁
神仏へお詣りもして花の旅
友が逝くもう絵手紙はやつて来ぬ
鳴き砂を踏んで命の声を聞く

西宮市 秋元 てる

雨の日の恋は雨の日に燃える
墓参り「それでいいんだ」を聞きたくて
最後まで残り多忙な墓参り
古里の祭りへ自慢の孫を連れ
やっとです生れた意味が分かりかけ

西宮市 足立 茂

貧乏性が出すぎて困るバイキング
ブランド品買ったが顔とミスマッチ
あっぱれと褒められてから五連敗
着想にちよつと加える子供の眼
パソコンが拗ねてお酒に切り替える

西宮市 片山 忠

MRI三十分はくたびれる
名曲は歌い継ぎたいナツメロ派
土地勘の悪い夫と行く梅田
気後れを美德とほめてもらいたい
せんべいを囓むより舐めて胃に落とす

西宮市 亀岡 哲子

誘われて煮つころがしを手土産に
バリアフリー出て山の道谷の道
あわてん坊すべて終つてから悩む
スマホなんぞに負けてたまるか親である
一応は見積り立てておく余生

西宮市 西口 いわゑ

諍も雨も上がったお茶にする
片付けた部屋で今度は探しもの
ぼつかりの雲よ気ままはいいですか
どんな時も花はわたしの味方です
さわやかに生きよ緑の風が押す

西宮市 牧 渕 富喜子

先生と書けるご長寿ただ祈り
日をずらしわたくし流の衣更え
言わずとも判るはとうに捨てました
オレオレの電話からぬ訳がある
梅雨入りの畳表のスリッパ

西宮市 山本 義子

悟りきつた顔をしてます昼の月
円高も株にもかかわらず暑い
昼いつときぼんやり出来るティータイム
まつ昼間姥捨山はかくあらん
白昼堂々遊べるというのも如何

西脇市 七反田 順子

もつと生きてもつと飲んでと妻の嘘
ホトトギス恋の季節がよく響く
水くみに犬が同伴をすると言う
曲り角ベルトきりと締めなおす
花談義犬談義して一回り

姫路市 古川 奮 水

奈良市 加門 萌 子

初孫を抱いて音痴が子守唄
記念日にメロンを切って二人だけ

F Mのメロディ眠気誘われる

鮎ずしの茶漬で元氣田植中

暑さ好き蜘蛛は巣づくり忙しい

奈良市 阿部 紀 子

祖母の横英霊の墓並んでる

両親の寺へ分骨頼みます

喧騒と混沌だけど難波好き

P Kに期待抱かせる面構え

遊んでる子等皆愛しハグしたい

奈良市 岩 本 浩 二

一波乱あつて絆が強くなり

喜寿越えて五欲煩惱冷めやらず

団樂の輪にいつも寡黙な父がいる

淡泊よりも少ししぶとい方がいい

物差して測り羊羹五等分

奈良市 大久保 眞 澄

非常用リュックおやつと酒ばかり

体臭の強さをバラは悩んでる

これからの新居三食介護つき

棘抜かれてカーネーションになったバラ

還暦以上上限なしの塾仲間

二の腕の女の色気褪せて来た
言い負けて夫は逃げる時代劇

また予報はずれてもせめられぬ得

日本の未来案ずる蟻だけで

やつぱり平和なんだサッカー野球

奈良市 辻内 げんえい

スッピンの優しく見える今日の妻

予定空き突然やる気湧いてくる

食べて寝るだけの暮らしに飽きてます

リサイクルすればするほどコスト高

人見知りでも孫がボク見て笑みくれる

生駒市 飛 永 ふりこ

今でしよう薔薇の優雅が競い立つ

わたくしのうかつ見破る花菖蒲

あなた似のまさかまさかの通り雨

くよくよを掻き消すオレンジの日差し

躊躇など睡蓮ボンと背を押す

和歌山市 岩 本 美智子

レースフラワー祖母の花名は簾草

国政論婆ちゃんの口眺めいる

婆ちゃんら賞味期限のしたたかさ

高級も回転寿司も手が出ない

寿司屋に来うまいうまいとわらび餅

和歌山市 上田 紀子

流れ星何を急いでいるのです
最高の殺し文句が決まらない
困ったと言ってる内は大丈夫
私が私に書こうラブレター
コーヒーも冷めてる梅雨のメランコリー

和歌山市 柏原 夕胡

泣いてくれる人だけでいいお葬式
生のないものにも助けられている
水恋えば天が応えてくれる梅雨
ゴミ箱だけはすぐに満タンになる
最後尾に居てお気楽なお葬式

和歌山市 喜田 准一

踏み込めば歴史の闇が深過ぎる
発想を変えれば明日が見えて来る
食欲があつてストレス溜まらない
やんわりと話す言葉が的を射る
想い出は霧水海鳴り岬の灯

和歌山市 坂部 紀久子

草引けばその場の蟻の大騒ぎ
老人の早く渡れと赤になる
胸のマグマお茶一服で治まらぬ
締切りの投函済ませ抜けがらに
おじぎして田植稔ると穂もおじぎ

和歌山市 武本 碧

しつこいが真似の出来ない味がある
若者の新語とりつく島がない
電池入れ替えれば動く夫婦独楽
さり気なく売られた喧嘩ポケットに
リサイクルなどは望まぬ葦である

和歌山市 田中 みね

心根のやさしい友を持つ幸よ
日本語の乱れが目立つのが悲し
イライラの一つ女性の長い髪
無駄吠えせぬ孫んちの犬えらいのだ
あなたに思うそれは敬語の使い分け

和歌山市 玉置 当代

梅らつきよう母から子へと継ぐ絆
歯の浮くような話に耳を貸さぬ妻
今日もまた首をかしげる聴診器
さまざまな音に守られ生きている
耳鳴りに巷の愚痴もかき消され

和歌山市 土屋 起世子

もう尻尾振るのはやめてお父さん
レポーター集まる今日はごみ出し日
独り家が賑わう燕巢をつくる
タンポポの綿毛乗る風乗れぬ風
知能犯最後に曾祖母ねだられる

平穩に朝の扉が開く幸

和歌山市 福井 菜摘

スクラムを組めば強気な雑魚の群

下積の苦勞は見せぬ苦勞人

年年と自己採点が甘くなる

花活けるころ砂漠にならぬよう

和歌山市 福本 英子

異常気象遅れを急かす花の乱

それぞれの個性で胡瓜曲りだす

非常口だからきつちり鍵かける

今晚のレシビ困ったカレーにしよ

カニ缶は期限ぎりぎりまで開けぬ

和歌山市 古久保 和子

ささゆりに会いに来たのに留守らしい

蛇行してまた伝説を産みおとす

旬をいただく大地に感謝忘れずに

炒りたての番茶と時を遡る

現実に戻り通帳記帳する

和歌山市 堀 富美子

持ち歩く遺影阪神巨人戦

むつかしい人には呆けを演じとく

花燕私命を競い合う

ときめきをハートにそつと蓋をする

その日まで私は羽根を休めない

不洗観音曾孫を抱いた宮参り

和歌山市 松尾 和香

ウメキタへ話の種と寄り道を

紅い糸まぼろしだった喜寿の坂

連れられて芝居見物母の日に

言い訳はしない我が道歩いてる

和歌山市 松原 寿子

真つ先にしあわせ芝居演じ切る

介護との戦が続く登り坂

四季めぐり記憶を辿る数え唄

生命力すごい雑草振じ伏せる

内緒だから視野に温めておきましょう

岩出市 藤原 ほのか

ばらばらに見えてはいても同じ色

バランスを考え今を生きている

人は皆喋りたくない訳がある

ひばりさん昭和の明かりありがとう

泣けるだけ泣いたら明日は晴れマーク

海南市 小谷 小雪

ドア開けてもらっただけでやる気出る

レストラン母の写真で参加する

健康を吊す手作り十葉茶

細切れな時を引き寄せ編んでみる

爪噛みの癖もう直せたでしょうか

海南市 堂上泰女

あれこれを映す世間の共鏡
訳ありの品に癒されてる財布
小団扇が届いた孫の暑気見舞
光触媒の蘭にお水を注いでた
まろやかになった分だけガス溜る

紀の川市 宇野幹子

蛇行して人も器を光らせる
母性愛はげしく揺れる萩の花
転がつてみようか角がとれるまで
仮縫いのままで七十路の坂の中
蛇口から夕辺の鬱がほとぼしる

紀の川市 北山絹子

人間の彩に染った猫がいる
大船に乗った積りの人と居る
修羅を抜け風を味方にして生きる
ブランドの土で育てたプチトマト
ふたりして歩いた道に虹が立つ

田辺市 岡本昇

そのうちにロボット医院出来そうだと
観光にロボット力車いかがです
表情のないロボットに馴染めない
妻リモコン俺ロボットで恙無し
ロボットと交換したい下半身

橋本市 石田隆彦

濃いお茶で決意の朝を引き締める
グルメ誌に載れば遠方からの客
欲一つ離して日日の身が軽い
入門の戸軽く開けてからの苦慮
飾りもの無くても華のある若さ

松江市 小川注湖

二十歳の夢応援するのは妻の役
輸入食材それで無駄食い日本人
海軍は辛いカレーで絆生み
日本食ヘルシー文化世界飛ぶ
平和主義戦後改憲無い誇り

松江市 錦織禮子

感動の油彩展ロビーで出会う
朝は希望夜は感謝で横になる
気を抜いて神の微笑むはずはない
無器用を追いかけているカレンダー
無地バッグハンカチーフで引き立たせ

松江市 松本知恵子

言わないがしつかり心読んでいる
落書きのノートに落ちている本音
待ち待ちて旗振りました植樹祭
いち日の余白で鳥を聴いている
ヒロインになつて泣いてる日記帳

松江市 松本文子

スカイツリーあの世と話できまいか
死にたい生きたい 本心はどうなのだ
何を抱いても懐が寒い

心休める水の匂いのする里で
花の匂い暮しの匂い手を包む

松江市 三島 淞丘

ペンと辞書持つには雨の音もよし
騙された振りして本音探り出す
気がつけば自分の中に鬼が棲む
願望の強さが運を引き寄せる
残り時間静かに刻む砂時計

松江市 石橋 芳山

椅子の数減って綿ぼこりが溜まる
真四角な時間にひび割れてしまう
くちびるが知ったかぶりを繰り返す
唇が多重に嘘を産んでゆく
消しゴムで消えた立ち枯れの男

出雲市 伊藤 玲子

淋しそうな声に粽を巻いてやる
太陽になれぬが友達でいよう
緑風に誘われ古事記の謎解きに
左掌に花弁(はなびら)キャッチいい予感
木洩れ日のキラキラ夢が降ってくる

出雲市 岸 桂子

暑さに負けて中途半端な拭き掃除
人間の弱さ知ってるコマーシャル
無謀かも知れぬ走れるまで走る
朝刊を読む時わたし素顔です
鉛筆をまとめて削る外は雨

出雲市 小白金 房子

灯芯がもえて心に宿る神
松喰いへチェンソーの響き山を這う
先代の器タラの芽もって出す
夕暮の温もり貰う出雲弁(晩ジマシテ)
手拭の白さしみこむ農の汗

出雲市 多久和 敬子

躓いた石が私の味方する
茶柱が立つたあの日は遠くなる
兄弟会うたって飲んで喋くって
古里で昔話をして帰る
平凡な暮しの中にある答

島根県 伊藤 寿美

寝て起きてたつた独りという指紋
今も聞える沈んだ故郷の笛太鼓
向い風わたし独りの艀が軋む
合槌を打って仲間になれていた
のど飴と一緒にとけてゆく誤解

美作市 大石 あすなろ

通学のバスは若さで咽せかえる
針穴を抜けてふくれてゆく噂
オブラート破れて本音あからさま
おしゃべりな雀一羽を連れた群れ
下駄箱に眠る昭和の靴その他

美作市 福原 悦子

民宿で心の地図を書き替える
円陣をまた狂わせる稲光り
三代の家を守り抜く覚悟
人柄は丸いが喘いでいる個性
丸い鼻心美人がいてくれる

広島市 岸 本 清

初対面名刺代りに笑顔みせ
山歩き花鳥風月友にして
ご機嫌をとる人は妻だけとなり
言い切って自問自答のいがい酒
老人会酒は出るかと聞いてくる

竹原市 石 原 淑 子

核拡散八月の空の慟哭
夾竹桃大きく揺れる平和都市
投資話暇でもすぐに切ることに
逢いたくて高速バスの客となる
反対派蟻の群れにもあるらしい

竹原市 岩 本 笑 子

良い知らせだろうが缺出してくる
お幸せですねと指輪誉めてくれ
病人に慣れて病院はしごする
菜園の虫にも生きる権利ある
忘れたい事がたくさんあり旅へ

府中市 藤 岡 ヒデコ

一年振り少し小さくなった姉
難聴の姉との会話途切れがち
子の居ない姉は弱音を洩らさない
サヨナラへ気丈な姿いとおしい
長旅の帰りに席を譲られる

宇部市 平 田 実 男

首枷を解かれ自由をもて余す
字余りがある人生も川柳も
終活の一つ辞世の句へ励む
負けて勝つことを覚えて丸くなる
真心をゆさぶっている札の束

鳥取市 有 沢 せつ子

豌豆ごはん食べて心も五月晴れ
健康な時に行こうと老いの旅
旅に出て心も息を吹き返す
顔写真美人に撮れた事がない
裾分けの玉葱どつと寄ってくる

鳥取市 池澤大鯨

ブランコを吊す枝なし喬木だ
枝道が多し迷路のような闇
ホルモンが好きで酒が勧んでる
割烹の御馳走よりも妻の味
酒がうまい二日酔いは神のいじわる

鳥取市 奥谷彩子

せまいながら四季の詩生むうちの庭
人間賛歌明日も夢も盛る器
彩あせぬふる里の絵に幼な友
老いの綻び繕う子等がいてくれる
喜怒哀楽に一役買っているお酒

鳥取市 加藤茶人

憎しみは愛の3乗かも知れぬ
相続の税はかからぬほどは貯め
結局は何も残らぬ趣味多彩
背景は言わずハト派の正義面
もう一度見直せ神が呉れた怪我

鳥取市 岸本宏章

株価より僕には今日のプロ野球
薬箱抱えて命永らえる
海拔は十二わが家の避難場所
セリーグが揃って負けた初夏の陣
尻拭いトップの役目かもしれぬ

鳥取市 岸本孝子

特売場のぞく元氣も失せてきた
匙よりも指三本で決める塩
元氣かと亡母がしばしば聞いてくれ
試着室鏡にっこりしてくれた
断捨離に区切りつけれる歳になり

鳥取市 倉益一瑤

刻がわたしを追い越してゆく船の旅
船長に命あずけて鳥になる
はぐれ鳥おまえも心細いのか
海と空ひとりじめして無の時間
水平線の向こうに誰か待っている

鳥取市 竹口清信

極楽へ必ず行くと決めておる
決めたこと実行せんと無駄になる
無駄話それでも時間だけは経つ
時間など夢中になれば氣にならぬ
人間が夢中になると恐ろしい

鳥取市 永原昌鼓

ピチピチの頃もあつたと足撫でる
老いの身へ緩んだ箍を締め直す
増税へ財布締めても出る赤字
油高イカや鮪が長らえる
ソコソコの暮らし満足して老いる

鳥取市 中村金祥

今日の日がおいしかったと言った孫
OB会昔の苦勞あぶりだす
通販で僕の病氣が癒るらし
うまいもん食えば虫歯も痛くない
神様の声にむかつて伸びていく

鳥取市 西川和子

成る様になるとじたばた慌てない
マンネリの味にスパイスちよい利かす
蒔いて無い芽が母の日に花を付け
昼寝でもしなよと欠伸止まらない
成る様になって今まで生き延びる

鳥取市 春木圭一郎

全時間やりたいことに使いたい
好きなこと全力でやり突き抜ける
前向きに生きるためにも体力だ
あの時の冒険きつと生きてくる
役に立ち笑顔をもらい生きてるか

鳥取市 平尾菜美

忘却の彼方減反おき去りに
治癒力にかけてる瘤だ我慢する
国会の空席岩で埋めたいね
手さぐりの鍵とひょうひょう核家族
無常とは知らず知らずに経覚え

鳥取市 深澤千恵子

同窓会少女の声で盛り上がる
皺のない柔をした手が苦をつかむ
臆病に生きて平和な今がある
おいしいと続けた味で飽きられる
心晴れ景色も変わる帰り道

鳥取市 福西茶子

指切った約束さくら散るように
父親になった息子が偉く見え
深夜二時やつと八句の出来上り
転んでも起きてもつづく歯の痛み
登頂した八十歳をライバルに

鳥取市 福永ひかり

ひよどりが偵察枇杷の実を守る
掛け違ったボタンが元へ戻らない
より遠く高くへ避難メッセージ
訂正の仕方で分かる人となり
まだ結びできてないから終れない

鳥取市 前田楓花

蠅座の女だが唄ほどじゃない
落日に感謝の気持ち言うのです
木洩れ日の下で笑って飲んだお茶
お喋りを終えて程よい疲労感
ひと言も喋らないけど娘の味方

鳥取市 吉田 孔美子

倉吉市 山中 康子

今年もつばめの求める軒でなし

誰よりも長生き庭の梅満々

大山を箱庭と観るシエアハウス

横にだれか来る開演までの賭け

顔忘れ惚けと言う荷になつて行く

鳥取市 吉田 弘子

嫉妬とや男偏にもあつてよし

偶然のいたずら横の指定席

旅先の珍味ヘルツ歴史など

脳トレへ漢字ドリルを初級から

人の輪へ溶ける楽しいボランティア

倉吉市 猪川 由美子

アベノミクスいい事ばかり続かない

慰安婦にくすぶり続く怨念だ

車社会へ買い物難民困り果て

ゆるキャラに大人もほんわか癒やされる

死に神がよく現れて困ります

倉吉市 牧野 芳光

口に出すとフイツと消える蜃気楼

わたくしがわたくしであるためのペン

言い訳が魔法のように湧いてくる

こんな日にパソコンなんか叩いている

夕暮れはいろんなものが降ってくる

合服を着る間も待たず夏衣

損得で片付けられた母ごころ

笑いたい機嫌を知っているからだ

シミホクロ威張ったようにしがみつく

恩返しもう出来ませんご免なさい

倉吉市 山本 玲子

雨は降る機嫌の悪いてるてる坊主

話の接穂コーヒー飲んで改める

物忘れ老化現象なら許す

晩学のつもりで句集読んでいる

分が悪くなると口数減らすわたし

米子市 後藤 美恵子

早乙女や田植え唄消す機械植え

お下がりの服に身体が泳いでる

働き蜂花を愛でてる暇はない

大気汚染ぐつと耐えてか樹には瘤

ユーモアが暴走ファン鎮まらせ

米子市 後藤 宏之

身に覚えあるが知らないことにする

役人の秘密兵器は修正ペン

にぎり飯手の米粒がまたうまい

今の世になかなか孔子通じない

街作り役所のテンポ遅すぎる

米子市 高田 振作

外出も病院通いだけとなり
生命線信じていいか白寿まで
オレオレの電話我が家に掛からない
また今度と言つて借金返さない
老夫婦今年も田植え出来ました

米子市 竹村 紀の治

息抜きに一晚酒を止めてみる
酒抜いて今日は肝臓慰労会
物干しに男丸ごと泳がせる
アイロンの要らないシャツが好きになる
何気なく「おおい」と呼んで苦笑い

米子市 中原 章子

運命に従う顔の目刺したち
デイサービス拒否をしていた夫デビユー
エネルギー交流をして流れ代え
ストレスを少し贅沢して溜めぬ
ミスプリント本人だけが知っている

鳥取県 石谷 美恵子

みどり風心も弾むハイウエイ
手弁当千倍うまい空の青
どんな顔されても我慢する鏡
雑種でも飼えば家族のマスコット
鯛の目の死角で雑魚はホラを吹く

鳥取県 岩崎 和子

プレゼント友の真赤なバラの花
亡き友の手作り花瓶バラと合う
塩と砂糖間違えほんと驚いた
此の年でこんな疲れに亡母想う
笑つてよ今夜もきつといいお風呂

鳥取県 斉尾 くにこ

水面の空を食べてる魚の口
危ないよほら人生の交差点
どの道もガラスの靴じゃ歩けない
夕暮れて脱ぐユルキヤラの防護服
すべつたら笑つてくれる人がいる

鳥取県 竹信 照彦

僕も出来る皿洗い器にチンとジャー
あー暑いほんとに梅雨か気象庁
より貧しアベノミクスで年金者
大企業の整理地方は首だらけ
儲けても株高給料は上げぬ

鳥取県 細田 裕花

口角を上げて鏡とにらめつこ
新しい羽釜のオーラ味に出る
ホッチキス支離滅裂を綴じておく
フットワーク良いケータイを褒めてやる
ドヤ顔の総理の舌がよく回る

残暑御見舞

〒581-0086

八尾市陽光園一三二二一三〇五
電話 〇七二一九六―五六〇二

宮西弥生

雑草の強さ人間勝てないね
逆らわぬ性かストレスばかり溜め
真つ直ぐな背骨に家族添いたがる
順調な老化の証酒旨し
まだ食べてないもの多く呆けられぬ

鳥取県 山本正光

青絵具だけで描けます日本海
塩加減一つで決まる出来不出来
ダルマさん髭は勝利の象徴だ
針箱に母の指ぬきはめてみる
颯感を買うほど文句たれている

鳥取県 山下節子

あれからは降ってはいない梅雨の入り
表掃く近所の噂聞くまでは
六十五あんたは若い肩叩く
投句からOBだった人を知り
網戸替え誰も気づかぬ家族達

鳥取県 松川行男

川柳信濃川『納涼川柳誌上大会』

◎ 定型のリズムでお願い致します

『ふく』表現自由(新作 2句)

選者 碧井 溪翠・大石 一粋
川俣 秀夫・木原 広志
佐瀬 貴子・東馬場美和子
古谷龍太郎・三宅 保州
横山 昌利・相田 柳峰
2次選者 島田 駱舟・千鳥 鉄男
太田紀伊子 他

締切 7月31日 消印有効
投句 お一人様一組 清記いたします
投句料 1000円(9月号発表)
賞 1位 魚沼産コシヒカリ10キロ
2位・3位 新潟産コシヒカリ5キロ
他 多数
一句の得点・6点以上の方全員に
新潟産コシヒカリ5キロ
投句先 〒940-2042 長岡市宮本町3丁目2433
川柳信濃川 相田 柳峰

第64回 広島平和祈念川柳大会

日時 8月18日(日) 10時会場

出句締切 11時30分

開会 13時

場所 広島市中央公民館 4Fホール
広島市中区西白鳥町24-36

TEL.082-221-5943

JR横川駅より大学病院行き

赤バス「西白鳥」下車5分

課題 各題2句

「灰」	小林てるじ	選
「菓子」	野村 賢悟	選
「誤算」	弘兼 秀子	選
「偲ふ」	小島 蘭幸	選
「未練」	久保 青花	選
「変化」	角本 華峰	選
「徒歩」	三浦 宏	選
「乾く」	増田マスエ	選

会費 1000円(発表誌呈)

共催 広島市中央公民館 広島川柳会

川柳塔の

川柳讃歌

104

木津川 計

肩書きは無いが真つすぐ生きている

横山 捷也

肩書きに輝いた頃、捷也さんはますます一本気だった。その威光を背に、径行直情に采配を振った。当節の頻出語で言えば、捷也さんは元もとブレない人だった。右顧左眄も知らず、むしろ寄らば斬るぞ、ただ真つすぐに生きてきたのである。偉い！

そこへ定年が来、肩書きのない名刺にとまどった、のではない。竹を割ったような生き方に、なんの迷いがある。天下の素浪人が我が道を真つすぐに往く。偉い偉い！

美しくなつてゆく遠くなる人

斉尾 くにこ

美は近接に耐えないのである。如何な美人や豪奢な薔薇も3cmの肉眼に鑑賞し得るか。適度に必要空間距離は、またその大なることを拒む。一〇〇m離れた雪の結晶に感嘆できる人もいない。

また美は時間的距離の「遠くなる」ほど「美しくなつてゆく」。思うに、くにこさんは高峰三枝子に似て今に甦らす。懐かしのブルースである。流れゆく泪に濡れるブルースの中で、思い出は歲月につれ美しく、切ない。

来し方を聞けば海鳴り 風の音

籠島 恵子

出版の育たない大阪で、しかし『編集工房ノア』は文芸の岩波書店である。毎日出版文化賞、読売文学賞他数多くの受賞作を次々世に出してきた。渾沌純平だった一人の出版社がPR誌『海鳴り』を出している。最新号25号は詩人・杉山平一を20人が追悼。僕も拙文を寄せた。「私はこの歳になつて杉山先生から一人立ちしなければならなかった」と。恵子さんが風の音に海鳴りを聴いたように、僕も風音に老詩人の透明な羽根音を聴く。

この空屋骨身削つて建てた家

後藤 宏之

一生のうち、草履の鼻緒をふみ切ったことなく、釘の頭に袖をひっかけて破ったこともない、万事に氣をつけて始末し、一代で銀二千貫目を貯め込んで長者になった二代目が、ふと覚えた遊びで身を持ち崩し……、というような浮き沈みが『日本永代蔵』には一杯書かれた。以来「恭儉己レヲ持シ」、勤勉に励んでやっ

と建てた家は何の事情でか無人になる。一代の興亡を目の当りにして宏之さんは暗然である。こんな家がこれから続出する、と。絡まった絆をほどく春の音

中井 アキ

家族という社会の最小単位が壊れる時代だ。親が不明になつても探さない家族、葬式もしない子供……。弱まり希薄になるばかりの絆の時代、孤独死や無縁死が日常的になる。

『絡まった絆』は繁りの纏れた家族の謂であらう。『父帰る』も『おくりびと』も共に父が妻子を棄てて出奔する。一方は帰り、他方は帰らない。が、両作にある末尾の血肉の叫びは親子の絆の切れざる証だ。アキさんの言う「春の音」である。

雑巾は前の姿は語らない

伊達 郁夫

ん？ と思つて選んだ。「前の姿」の雑巾はボロ切れを縫い合わせて作った。今は買うか、使い古したタオルを使う。「前の姿」という郁夫さんの謎めいた句が迷路に誘う。

あるいは、襤褸の汚れた雑巾に走る一筋の錦紗の糸のような「前の姿」の人物なのか。水上勉は「離れ替女おりん」「五番町夕霧楼」「越前竹人形」に「前の姿」の、美しい慕情の錦紗の人を見た。（『上方芸能』誌発行人）

自選集

小島蘭幸

両川洋々

本物のシャンソン聞いて来た津輕
最北端の塔を味方につけている
スケジュール表真つ白の夢を見た
はじめてのメールは妻に似たひとに
うちの会長ちつとも動かないのです

道のり

八木千代

板尾岳人

穏やかに今は流れているけれど
おとつと危うい淵のいくつかは
道のりよ 今も昔を曳きずつて
フィルムみたい影絵みたいに足のあと
この先も案じてくれる みちしるし 澤標

八十田洞庵

奥田みつ子

ふる里の老師がボクを覚えてる
しぶちんも寄付集めにはいさぎ良い
合格の願い大きく鈴を振る
仕舞風呂ストレス流す今日の事
意見など聞く耳持たぬ反抗期

人生暮色蛇行ばかりがなぜ続く
短命の手相を笑う大空よ
シュレツダーで不倫データはみな刻む
ルール無視モラルがパンクしたらしい
大空と握手してから出直そう
人間が怖くて月に帰ります
馬鹿と阿呆どつちでもよい馬が好き
わが句碑に逢つて人生歩む道（十和田市）
永遠に蹄聞こゆる雪の下（駒街道）
目の前で世界に響く歌姫の（シャンソンバー連）
道端の可憐な花に気が和む
空の青 若い若いと自己暗示
誘われて誘つて絆深くする
靈山寺古都にモダンなバラが咲く
美しい誤解のままに逝った人

河井庸佑

同じ山歩いて老いを自認する
頂点で思わぬ風に悩まされ
石橋を叩く間にチャンス逃げ
切り札を振り強気で押してくる
満足ではないが妥協をして納め

川上大輪

いつもの席にいつもの人がいる景色
ときどきは野心に塩をふつておく
予定など何もないから忙しい
人間だもの咲きたい時に咲けばいい
オスプレイより上手に飛べる赤トンボ

小西雄々

戦争はもうやめとけとあの世から
盃を交す息子に励まされ
別れ話お月様とはもうしない
酒臭い息で告白聞かされた
年かいな甲羅も骨も脆くなり

斉藤 荔

スマレ咲く去年と同じ位置に咲く
一輪車上手になって風みどり
蟻が運んで来た種だ花をつけ
アトリエのりんごぼつんと夕暮れる
何事もなく寒立馬の子が生まれ

塩満敏

生き延びて新しい日本見てみたい
これからが鶴彬さん出番です
傘寿でも老いらくの恋してみたい
日本の憲法世界遺産です
破廉恥な大阪市長辞職せよ

新家完司

仲間だよ胸の名札がしるしです
包丁もお金も便利だけど恐い
美少女が山姥になるイリュージョン
山姥とゴミを投げ合う終の宿
おふくろの位牌に懺が生えている

恒松町紅

よたよたとしてても何か考える
卒寿坂越えて何かと杖頼り
まだ出来る手先の方は呆けてない
あんな事出来ないのかと老いの愚痴
指先は元氣ですよとペンが言う

津守柳伸

オスプレイ祭囃子に水をさす
喰い力があつて猛暑もなんのその
DVの過去は話せぬ従軍婦
カラフルな傘紫陽花も負けてない
月一回命洗濯する湯宿

遠山可住

紅雨緑雨白雨と春の衣替え
沢庵をパリパリ食文化を閉める
ふる里の歴史を綴る無人駅
仮縫いの針にふくらむ小さい幸
ちよつとそこまでが大層な足になり

都倉求芽

少しでも余命をのばすモロヘイヤ
稲妻で充電してる百日紅
喪服着てゆく時だけは靴磨く
罪深い言葉で住職罪を説く
根元を手繰れば我が身にも及ぶ

土橋螢

わたくしと一緒に歳をとる女
恋びとが一番美人だと思う
昭和一桁戦争の負け残り
あつと言う間に八十歳になり
波高くなれと歌った海ゆかば

西出楓楽

クリーンヒット打てなくなつてから久し
要するに物を言わせたのはお金
未練しきり貸して戻らない本に
紅引いて今日という日に立ち向かう
はたちより六十歳に戻りたい

仁部四郎

新聞に贅肉がつく日曜日
火曜日のスポーツ欄は理性的
某社決断木曜日休刊
配達苦労はチラシ金曜日
土曜日最初にのぞく訃報欄

林瑞枝

大宇宙の一つの星よこの地球
名医との出逢い寿命がまた伸びる
優しさが欲しくて珈琲店をさがす
どんぐりの夢へ優しい雨が降る
天窓のいつもの位置へははの月

前たもつ

同世代刺戟受けたか夢さがす
消息を聞いたと電話くれる友
事あらば兄弟五人すぐ集う
貧乏ゆすりやつと止まつた八十年
餌さがす小鳥は今日も守られる

政岡未延子

アクセサリーになつたら困るから歩く
もう少し生きよう水を足しながら
天まで飛んでやがて堕ちてゆく帽子
今日生きるために私を甘やかす
まるとばつ見据えて広い輪の中に

島根県川柳大会

日時 9月23日(月・祝) 13時~16時30分
 会場 「ビッグハート出雲」白の間
 締切 13時30分 開会 14時15分
 参加費 1000円 欠席投句料 1000円
 兼題と選者 (各題2句)

「迷う」	牧野 芳光	選
「里」	竹治 ちかし	選
「糸」	内田 久枝	選
「帰る」	石橋 芳山	選
「浮く」	安黒 登貴枝	選
「仏」	渡辺 康乃	選
「無理」	寺田 勝美	選

投句先 〒693-0006 出雲市白枝町42

伊藤玲子 宛

TEL 0853-23-3200 FAX 0853-23-3201

投句締切 8月15日(木)必着

島根県川柳連盟 主催

特売の店ハシゴする月曜日
 晴耕雨読火曜日水曜日
 ウォーキング兼ねて通院木曜日
 自治会の名刺使った金曜日
 句会場巡り土曜日日曜日
 温度差にふりまわされている微熱
 公園の温度はひとを差別せず
 子に返す地球泣かせることしない
 タコ焼きをつまみ合いしてそれつきり
 ここだけの話聞いている酔いつぶれ

宮西弥生

三宅保州

温故知新

『谷垣史好句集』より

時の人 模様眺める糸を垂れ
 あいまいな顔しているが実力者
 吉良邸に迫る一人が欠けている
 死んだ筈の女が匂う闇の底
 死ぬときはひとりぼっちの雪だるま
 見送ってほしい一人が来ていない
 枯れ葉ひらひら頭の中はカネのこと
 鯛の子があればうれしい冬の酒
 使う気はないが毒矢を持つっている
 米朝が語る地獄は楽しそう
 笠智衆も僕もうとうと秋日和
 恋をして賢くなつて風邪を引き
 女傑一代死ぬまで男はんが好き
 みな誤解しているモナリザの微笑
 現実やめしに大中小があり
 安吾なつかし生きてることは息苦し
 ガムテープ貼っても喋りそうな口
 花の下 敗北したと思わない



西 出 楓 楽 選

神戸市 松 井 文 香

ふつと読んだ句集以前と違う彩
純白な心持ちたくただ祈る
限りある命火だから趣味に燃え
和む友話し上手に聞き上手
まだまだと大志いだいて老いの坂
朝日さす水平線に見る浄土

田辺市 大 峠 可 動

海峡に風が生れて悲が生まれ
幻想にゆらぐ言葉はうぬぼれか
やがて炎天僕は傍観者でいよう
泣き虫のとりこになった蟬しぐれ
炎天や日影ばかりの絵を描いて
湯の中で今日一日の数えうた

岩出市 村 中 悦 男

思い出をたぐれば遠い沖に出る
思い出をそつと虫干ししたくなる
父母の思い出強くなる余生

引き出しの奥の名刺のなつかしき
思い出は四つ辻毎に取った梶
つまずいた小さな段差まあいいや

鳥取市 山 下 凱 柳

はめられたふりして妻の腹探る
閑古鳥ばかり鳴いてるネオン街
生ぬるい原発処理に民怒る
高画素数写真皺染み隠さない
四十年経って爆発した不満
乾燥期なのか潤いない夫婦

豊中市 源 田 啓 生

八十路来て星占いを未だ信じ
サブリ飲め飲めとテレビが騒がしい
アベノミクス私を除けて矢が飛んだ
荷を開ける新茶が香る熱い情
ヘルパーの漲る若さ貰うて生き
家族葬決めて待つのに迎え来ず

西宮市 藤本 直

自分色の虹をみてますもう少し
誤解して別れた友が胸に住む
いい風は向こうの町で吹いている

真ん中に蹴り込む勇気W杯

長生きの秘訣読まない自然体

アベノミクス行くぞ矢弾の尽きるまで

米子市 見山 温子

切れた絆つくろう孫に感謝する

言いすぎた詫びに好物膳に出す

介護する体に元氣有り難う

腹八分すつかり忘れしサイズ

薬膳ツアー皆元氣な人ばかり

田植終え安堵のちまき孫とまぐ

鳥取市 近藤 秋星

一年の早さ今日から下半期

黄色い蝶になつて菜の花飛んでつた

ただ寝てるだけでないんだ充電中

何と言つても西瓜は夏の王者だね

永遠に我が故郷よ榮えあれ

いい季節たとえ死んでも生れても

尼崎市 中井 楓花

なるようになると失敗おそれない

どっこいしょよいしょと言つて動きだす

暑そうにゴーヤがぶらり揺れてます

暑おすなあもうかりまつか あきまへん

イヤリングうわさ話に笑つてる

ときめいて死ぬまで恋をしていたい

大阪府 小栢 こずえ

親だけに反応します子のつばめ

十人十色同じ色目はみな持たず

土砂降りも晴れの日もあり日々試験

遊びに行く当てがあるので仕事する

一日のエキス朝日がさして来る

植えるとは大地にいのち任すこと

鳥取市 谷口 回春子

仕舞い込みし過ぎてものを見失い

隠しても氣力体力直ぐにばれ

欲の皮藏をとるほど厚くなり

善と悪あれやこれやと腹の内

欲張りが欲に溺れて墓穴掘り

唾み合う心も解ける孫の笑み

南あわじ市 萩原 狸月

親の恩想う下宿の一人鍋

山もなく谷底もなく夫婦旅

年金が生活保護に見下され

風雪に耐えた人らし暖かい

スカイツリー街見下ろすだけに金

ダイエット膝がお礼を言っている

香南市 桑名孝雄

龍宮城の亀の迎えを待っている
難聴へ肺活量のない電話
字は太く声は大きく老いの知恵
若返り用の眼鏡が馴染まない
ラリルレロ言えたぞ今日も恙なく

北九州市 岡田幸生

軋みだす老軀に酒という油
熱冷めてゴルフ道具も今は邪魔
弁解をすればするほど目立つミス
齒に衣を着せライバルと和を保つ
満ち足りた一日だった缶ビール

北九州市 小松紀子

疲れたがつい出てしまうお年頃
終活を笑顔で語る旅支度
遺言はハワイの海で散骨を
常識は人によつては違ふらし
体内の時計狂つて不眠です

福岡県 本田さくら

蟻のくらし人は見習う事多し
初夏の朝廊下の汚れ陽が叱る
白鷺の農夫と共に田をつつく
いい夏をお中元でとチラシ来る
つばめ六羽巣立ちお礼に宙返り

唐津市 北村松風

桂浜幕末背負う竜馬像
リハビリの顔ほころんで面会日
コーヒーと緑茶で和む嫁姑
東方を拝んで母の朝が来る
お陰様パチンコチラシ裏白紙

佐賀県 真島久美子

取り返すほどの女じゃありません
半分こ出来ず独身です私
透明になつたら次の恋をする
振り向いているのに思い出は居留守
青いバラだけが宇宙を知っている

熊本市 杉野羅天

ニューファッション老女同士の目がひかる
伯父説いた中庸に今教えられ
政界は仇で恩義を返す様
名を上げてそのいばることいばること
ツーリスト負けろ負けろで物を買ひ

札幌市 佐藤登美子

昼眠く夜は目が冴え深夜便
花を愛で風と語らうウォーキング
言い合えばツレの器が鼻に付く
贅沢と言われてしまう子沢山
窓明かり一つ一つにあるドラマ

弘前市 高森 一 吞

延々とママ友電話胡座して

肩書がさも偉そうに風を切る

麻酔きれ五時から男縄暖簾

梅雨の空淡い初恋花菖蒲

ビリだつて声をからした運動会

塩竈市 木田 比呂朗

ケータイに残暑見舞の来る葉月

真夏日に少し派手目のシャツを着る

夕涼み端居賑わす発泡酒

右脳まで夏負けなのか弾まない

スマホから適性検査受けてます

横浜市 巖田 かず枝

父の日に子等が集つて旨い酒

マジですか男も日傘差す時代

無理をせず細く長くを目指す日々

失敗談聞くと相手は嬉しそう

ヒマラヤも富士も無理だが元気です

横浜市 川島 良子

空っぽになつて出直す第一歩

ありがとう柩に入れたラブレター

微笑んだ君の遺影が背中押す

そつとしてください心癒えるまで

寂しいと言えば私が壊れてく

横浜市 長島 亜希子

八百万の神を詣でて元氣出る(熊野古道五句)

修業精進メタボの僧は見かけない

長寿の水あまり飲まないようにする

神様と思えばしづきありがたい

小銭きれおつりが欲しいお賽銭

川崎市 成田 せいじ

自慢げに葉見せ合う古希の会

揚げ足を取れば務まる評論家

ソロバンの段位宝の持ち腐れ

一流になつた証のスクヤンダル

抱き癖がついてイクジイ責められる

富山市 有澤 嘉晃

お入りなさい私の傘でよかつたら

カン蹴りにちよつと不向きなアルミ缶

童謡や唱歌を子らに残したい

平凡も非凡に変える持続力

天地人怒るな孫の世も頼む

岐阜市 平野 あずま

へそくりを匿名で出す義捐金

苗植えて土は一気に夏を呼ぶ

自らの音痴に酔つて杯重ね

罪のない軒明日も日本晴れ

目を見詰め論すと犬も忠義面

熱海市 三谷圭角

ナツメロは恋し懐かしほろ苦し
若返りしたけりや食を減らすこと
つばめ舞い小虫掃除の有難し
干涸びたみみずを運ぶ蟻の群れ
国会の微細愚問にテレビ切る

豊橋市 藤田千休

孫を抱くための筋トレしています
ダイエツトスイツチバックくりかえす
逆上せても妻はまだ出ぬ美人の湯
右傾化に死の商人がほくそ笑む
どたキャンも割り込みもある予定表

八幡市 今井万紗子

息継ぎが下手で言い訳定まらず
笑顔ひとつ息吹きかけて夢紡ぐ
妻の小言時々むせて深呼吸
落ち込めばアンパン三つ買うてくる
鬱ですねん言うてる内は大丈夫

京都市 清水英旺

恐いものなし肉食女子の怪気炎
起きあがりこぼしストレスためている
八十になつたら被るベレー帽
エンドマークのあとの余韻がお楽しみ
青もみじめでて錦秋思い越す

大阪市 浅井公平

パクパクと食べる孫から氣をもらう
美術展ふわり心があたたまる
逝く前に借りた愛情返したい
昨日よりよい句を今日は作りたい
妻よりも一月早く逝きたいな

大阪市 太田としお

時の人命輝く三浦さん
お節介が過ぎると思う週刊誌
金持も金持なりの悩み事
ごめんなさい素直に言えて飯うまい
日本の中に日本の敵がうじゃうじゃと

大阪市 柴本ばつは

亀の井に流れてほつとする経木
万灯会送り火ゆるり経の中
四天王寺この偉大さよあらためて
盂蘭盆会すませ孫たち夏休み
燃えつくす煩惱五山送り火に

大阪市 高杉力

買わないが家具屋のソファ一休み
トロフィーがどやさど並ぶ応接間
蕎麦を打ちろくろを回し元氣です
一時間並び不味いとも言えず
地政学的リスクを避ける飲み席

大阪市 梅里南天

朝起きて言葉遊びを日暮れまで
この世まで何をしに来た飯食いに
寒さにも暑さにも負け空眩し
B型とAB型で輪をつくり
今日もまた残尿感で終わります

大阪市 藤田武人

久々にシャワーを浴びる雨蛙
渡し賃忘れエンマに金借りる
助手席を娘と妻が取り合つた
定年日また現れる分岐点
迷い道振り向き見れば真つ直ぐだ

池田市 上山堅坊

心のかび拭ってくれる飲み仲間
友と逢うこれつきりかも老いの明日
きつぱりとノーを返され救われる
息子へは片意地いまでも張っている
儉約のこころ貫き八十路坂

泉大津市 助川和美

老いの身に今日も気になる円相場
張り替えた網戸に通る初夏の風
暇あれば庭に妻いる五月かな
運動会園児に四人祖父母来る
お引越断捨離できず箱の山

貝塚市 石田ひろ子

みかんの花香りわたしは蝶になる
花束の最後一輪差して生き
感謝して反省もする仕舞い湯で
老いてなお張り合う人の居る至福
縦横斜め自分眺めて恐くなる

河内長野市 大島友子

昔はねそんな語りが出る歳に
切符握り締めた幼い一人旅
ばあちゃんの語りがじんと胸に来る
腰ひねりモデルウォーク諦める
悪い癖つい口にする残り物

堺市 梅木澄空

駅で待つ友にスピード上げてこぐ
うっかりで難儀起こった義理の中
救急のサイレン真似て犬が吠え
包装紙わくわく外すプレゼント
美容院此れにしてよと雑誌見せ

堺市 近藤治子

料理する家族の顔を浮かべつつ
老い集い文化センター熱くなる
ささくれた私の心ラッピング
つくりすぎ残った料理今日も出す
ど真ん中決めた本田よありがとう

堺市 羽田野 洋介

体重に比べてなんと軽い口

考えるふりしていつも眠ってる

手料理の妻へやりたい技能賞

気になること次から次と来る不思議

厄介な話になるとすぐ降りる

高槻市 鳥居 宏

顔にぼつぼつ人生の春悩ましい

心こめゆつくりと聞く悩みごと

笑顔には深い悩みのあることも

トンネルの彼方にきつとある光

ぼつぼつと軍拡ラッパ響きだす

高槻市 原 洋志

ほぼというあいまいな手にのせられる

ない袖を今日は一度も振つてない

二番目に好きと悔しいことを言う

言いそびれたことばかりある半夏生

手の平と同じ温度にする手紙

豊中市 荒巻 夢

衣食住足りて戦争忘れ果て

一兵卒精神論で命捨て

踏みしだかれた遺骨の上に花が咲く

九条の理想を捨ててどこへ行く

ギブミーチョコあの惨めさを伝えよう

豊中市 貝塚 正子

全部買うズバリ半値に負けといて

処世術従うことでうまくゆく

長生きはしたいがお金足るやろか

枕ジワ昼すぎまでもついている

運勢を見てから立てるスケジュール

寝屋川市 荒川 鈍甲

蝶が来る妻から手紙かも知れず

何かにつけて妻のお蔭と思う日日

形見分けする気もなれず三回忌

身の内で夢を発酵させている

生きる意味問いつづけてる油虫

寝屋川市 岡本 勲

今日あたり竹の子来そう糠を買う

孫の来る気配にサイフのぞく爺

バスツアー食べてしゃべつて何も見ず

上司抜く成果を挙げて左遷され

良薬と妻の一言にがすぎる

羽曳野市 藤原 大子

お小言も生きてる証栄養剤

忘れつばさ補い合つて日が暮れる

一言が口に出せずに不眠症

孫が来る俄かに活気づく二人

おしやれして気分を躁にチェンジする

東大阪市 西田 いくひろ

恋患いしてますそつとしておいで
強そうな女性に男気が引ける
かあちゃんの指図でうまくいく暮らし
髪薄くなって男も丸くなる
口コミで流行るラーメン屋の笑顔

枚方市 河田 洋子

一言が注目あびる時の人
時偶に声聞きたくてする電話
喜寿が来て駆け足で時過ぎて行き
古里の便り時折耳にする
今までの苦勞も時が幸に変え

枚方市 松原 保

無気味だな迷彩服を着る総理
学者さん何とかしてよ汚染水
円の価値下がり喜ぶ富裕層
見たくない巨人びいきの榮譽賞
知恵くらべかしこくなつたウィルスと

八尾市 赤木 妙子

ありがとうをポッケいっぱい持ち歩く
献体は無理かも体ポロポロで
友から文ひとりじゃないと思うとき
強かに生き気がつけば八十路
早苗田にもうすいと波紋出来

八尾市 山根 妙子

小寒から一足飛びで真夏日に
弦月を見てかしわ餅浮かぶ宵
富士山も拍手しそうな三浦さん
同級の御堂筋線ありがとう
秀吉もたまげたでしょうモトクロス

大阪府 神野 千恵子

インフルエンザ鳥には鳥の言い分が
酉年と聞きお人柄納得し
人間がカラカラカラと歩いてる
いつからか疎遠になつたハイヒール
かみなりぐも尾根をいつきに驚づかみ

大阪府 畑中 節子

子燕の餌待つ声の愛らしき
食通の青虫若い新葉食べ
物忘れ過した時間を巻き戻す
地球一つ消すかも知れぬ世の乱れ
頼らるる事を励みにネジを巻き

神戸市 木村 忠義

暗号もまげて書きます日記帳
捜し物何と自分のポケットに
ベルトを締め今日一日の武装する
晩酌を楽しみに日々生きている
晩酌が体調管理してくれる

神戸市 玄 番 美恵子

勢いも弾みもほしい古希の坂

元氣だよそれだけでいい子の便り

辛口の便りは母の応援歌

うっかりとこぼした愚痴は一人ごと

価値観の違いあつても良き仲間

神戸市 能 勢 利 子

言いわけをすればするほど墓穴掘る

いい人と言われたいので無理もする

都合悪いことは聞こえぬ振りしてる

エンディングノートありがとうだけ書いておく

ドラマ見てティッシュを譲り合うふたり

神戸市 山 根 弘 子

こつそりと充電してる錆びた脳

甘言にうっかりのつた泥の舟

生きるのが下手で此の世に溺れそう

喧嘩して去った友から春便り

ふる里で命燃やした君いずこ

加東市 安 達 厚

免許証かえして老いの身を守る

ごそごその事なら出来る老いの業

苦しみがあつて笑いがついてくる

あやしいと思いませんかオレオレは

老いの日に笑える種をまいておく

加東市 黒 崎 美紗子

右手首折れもどかしい思いする

忘れてた思わず使う右手ダメ

留守の間も庭木縁にして元氣

菜園に気合いを入れて土作り

植え替える咲く楽しみの苗選ぶ

川西市 大 坪 一 徳

青春のどの頁にも亡き友が

分岐点選んだ道の幸不幸

仏壇に供物欠かさぬ妻律義

髪僅か床屋も困りどうします

カラフルなステコ見せに銭湯へ

川西市 日 野 岡 和 之

歩には歩の役目大事に老い光る

隠しても顔に出ている腹の内

負けも佳し学ぶ薬と論すファン

今一度ピンチはチャンス紙一重

東北の喜怒哀楽へ鎮魂歌

篠山市 石 田 久 子

竹の子に敗けずのびたい習いごと

だんだんと重荷になった畑仕事

支え合う絆新茶の屋下がり

茶柱が一日気分はがらかに

熱湯を通し今年もラッキョ漬け

篠山市 北澤 稠 民

責任があるから重い荷をかつぐ
鏡さん私の心をのぞいてる
終り頃手伝おうかと声をかけ
我が庭の花の香りで酒を飲む
年重ねヨイシヨの声で動き出す

篠山市 佐々木 勇

青い海囲んだ島に住む恵み
酒煙草止めて心は充電中
途中から言うべき事が出てこない
苦手から得手に変わった変化球
春風に乗ってききたいいい知らせ

篠山市 藤井 美智子

梅雨なのに雨の神様お留守らし
最後まで元気でコロリ皆が言う
幸せに食べて達者でよく眠る
楽あれば苦あり人生百面相
物忘れ右から左へ超特急

三田市 雑賀 一 泉

かるがると仲間を捨てる永田町
電子化のすすむ財布の軽いこと
ガソリンを喰うがこの身は動かない
赤信号賢い犬はじつと待つ
毎日を楽しく生きてピンコロリ

三田市 辻 開子

出来ていた事出来なくて歳といふ
なき姉の歳になつたよ元氣だよ
お世話には笑顔が大事前をむき
絵手紙が今年も届き友元氣
老老の介護に負けず日日笑顔

西宮市 株元 玲子

習いくる子に励まされ活入れる
泣きごとと言うまい心練り直す
言つても仕方ないでも言いたくなる
夢中で歩いたらいつの間にか着き
今出来ることをし明日のあるを忘れ

兵庫県 上田 ひとみ

その傘について行きたい雨やどり
仲直りしたいんだってそのお口
スケッチにあふれ出す詩君の詩
もう一度扉を開けてみたかった
深緑 私も負けてなるものか

奈良市 尾畑 なを江

あつたならいいな体の部分品
一病を氣遣いながら九十四
こだわりの二つ三つはあるがよい
生き方を猫から学ぶこともある
眼鏡かけ少し上がった男ぶり

奈良市 前田 弘恵

ロボットに介護を受ける近未来
加護を享け八十路の坂もすつと越え
無駄食いはしていいのに腹が出て
特価品集め夕餉の支度する
茨みち幾度も越えて今の幸

奈良県 谷川 憲

近隣国深いつき合い難しい
地震多発ただ安全祈るのみ
嫁入りの着物が欠伸するタンス
ドアを開け一歩踏み出す病みあがり
病室の窓越しに見たカフェに行く

和歌山市 北原 昭枝

酔芙蓉意外な話そつと聞く
平凡なくらしの中に立つ煙
それ以上深く入れぬ傷の痕
隠された秘密がもれる鍵の穴
限りある命へつづる一行詩

和歌山市 平田 元三

煩わしくも楽しくもなし一軒家
父母眠る墓へ行く為愚痴溜める
決めてやる逸る心で立つ打席
北国の再走嬉し通学車
考える振りが軒を搔き出した

紀の川市 楠原 富子

パレットに命の色を芽吹かせる
恍惚の母が数える生きる意味
足音に妻の本音が見え隠れ
苦しみの中で掴んだ処世術
句読点打ってストレス捨てにいく

田辺市 小川 イセ

それぞれに生きた形の靴の裏
言い勝つて月がわびしく追つて来る
宿命と涙をそつと拭く時も
貼り葉灸で頑張る畑仕事
豆御飯ふつくら炊けて惹無し

和歌山県 森下 よりこ

嘘の中に本当が少し混じる人
梅雨には梅雨の風情をかもす花がある
毎日が多忙でボケを寄せつけぬ
年をとつたか仕事少しずつ遅れ
少しでも前向き赤い服を着て

鳥取市 大前 安子

同意書にいやがる署名ミミズ這う
偽りの顔は拭いたよ鏡さん
雑草は自然の風へ自己主張
蹟いた小石に罪を被せたい
あつさりと言ひ勝つた口洩さ増す

鳥取市 坂本 とも湖

政治家は笑顔のままで嘘をつく
認知症だれもが遠くない未来
音痴だが値引きしながら聞いてやる
ブランドで一切値引き認めない
アイドルの孫へ家族がみな浮かれ

倉吉市 岡崎 美知江

えらいなあ苺のある人愚痴らない
こそそと飲んだお酒はほろにがい
やさしさが誤解まねいて板ばさみ
外された席に新人坐ってる
お隣もそのお隣も高齢者

倉吉市 中村 毅

我が財布春夏秋冬クールビズ
何もかも加齢の所為にされちまい
一年生時に道草食い給え
涙腺も頭の螺子も緩みがち
高齢者マーク我が物顔で行く

米子市 野川 宣子

太い樹を陰で支える根も立派
シンボルの大樹惜しまれ土となる
独りぼつちにささやいたのは初夏の風
ジーンズの穴から未来見えてるか
閃かぬ脳にお酒で喝入れる

鳥取県 大塚 美代子

苦も楽も此の世に生きて居る証
誕生日ローソク消すも息が切れ
カレンダー見乍ら決める旅プラン
故郷は永久に変らぬ海と山
希望校目指しとび出す娘の瞳

鳥取県 田口 清帆

試食した手前ただでは帰れない
反抗期へ愛情と言う調味料
薫風の汚染吐き出す鯉のぼり
バイキング会費以上に皿に盛る
アルコール抜いて人生取り戻す

鳥取県 吉野 いさお

理屈では勝つても残る後腐れ
七十年洗い傷みの顔を拭く
息継ぎが時々狂う見栄を張る
うつぶんが溜まれば何時か発火する
ネクタイが首枷となる世間体

松江市 武島 ちよえ

主役にはなれぬが気品かすみ草
澄んでいる瞳はきつといい人だ
冷静に判断出来る他人事
電話ベル曾孫誕生日本晴れ
大丈夫医者の一言安定剤

松江市 藤井寿代

じいちゃんとかあちゃんしくない田んぼ

赤い花つけてもらって孤独です

ポストからはみ出している今日の鬱

陰日向支えてくれる影法師

ハッピーエンドにはならない最終回

松江市 山根邦代

幸せは笑顔のもとにやって来る

時々軽い話をして笑い

投げ出せば楽になるけど負けになる

人生の桜並木が続いてる

梅雨なのに真夏のような空の色

岡山市 工藤千代子

この雨が止めば行こうかひとり旅

雨の駅そんな別れもありました

未練かも雨の匂いがする手紙

笑む遺影午後から雨という予報

未送信ばかりが溜まる梅雨さなか

岡山市 丹下凱夫

雑草の花咲いている前頭葉

まぼろしを尋ねてみれば立葵

熱帯夜だけど冷たい猫の鼻

簡単にほどける為政者の絆

たまご掛けごはんは宿の自慢です

岡山市 前田恵美子

飛行機に飽きてトイレにウォーキング

上海は洗濯物も縦に干し

トイレにも木戸銭いると手を出され

エスカルゴこりやータニシと同じ味

究極の味はやっぱ白い飯

瀬戸内市 東嶺ますみ

マニキュアも塗って近頃いい女

口止めをされて背中がむず痒い

ライバルのどうぞに甘い罠がある

いい顔はあなたのためにとって置く

膝頭疼く明日は雨模様

岡山市 池田たか子

半世紀ぐずとせつかちヤジロベエ

運転をお願いする日は耐える口

トラクター夫が十歳若くなる

喜寿傘寿介護の話往き来する

妻の留守もう一杯を睨むタマ

岡山県 田中恵

組板が平常心の音で鳴る

卯木咲く野道ベダルがはしやぎ出す

葱坊主風の小言に耳を貸す

夫婦喧嘩時効の分も顔を出す

妻だつてにこにこばかりしとられぬ

竹原市 若 年 幸 子

孫育つスーツ揃える嬉しさよ
リーダーの気まぐれ皆黙んまりに
ご法事へピカピカになるお仏壇
吐いた愚痴静かに洗う風の海
青葉よ青葉わたしに翼くださいな

竹原市 土 井 輝 恵

右のもの左に置いただけの事
集金人玄関先の人生論

レシビから外す芋づる大根葉
井戸端会議激論は似合わない

墓建てるやつと意見が合つて来た

山口市 中 前 幸 子

風の器に一つの真実を盛ろう
夜空を彩るひとときの夢花火
あじさいのころ変わりを責められぬ
お賽銭カランと冷めた音で鳴る
豆の木がぐんぐん伸びて天を突く

宇部市 高 山 清 子

温暖化地球がいつか燃えつきる
湧き上がる雲原爆を思い出す
切り札は笑顔と決めて輪の人に
気配りが過ぎて話が落ちつかず
甘い口乗って残った苦い味

松山市 神 野 きつこ

梅のへた親子でほじる日曜日
エンドウのさやを剥く豆の反乱
豆ごはん蓋を開ければ初夏の色
平成の息子スマホはお手の物
初夏の花情熱秘めて咲いている

今治市 渡 邊 伊津志

ミサイルと隕石宇宙騒がしい
輪の中に居たくて少し角削る
馴れてるがたまに腹立つマイベース
春風に乗ると近道あるような
幸せを分け合うような青い空

大洲市 花 岡 順 子

鈍感で揺れる思いに気付かない
巣立つ日の小鳥へ赤い実が揺れる
ポケットにごめんなさいを握りしめ
言い訳無用約束は破らない
携帯を忘れ一日頼りない

四国中央市 篠 原 久

言葉尻拾えば怖い返り討ち
田起しが終り家族を湯に誘う
父の日父の顔見に里帰り
節電の為に早寝に切り替える
肉牛の出荷やさしい瞳に涙

高知市 三谷 待太郎

まず氣持アンチエイジは不滅です

いい人ヨ申し分なし何か欠け

自己陶醉歴史認識身の錆に

下手な矢を数繰り出すが手に負えず

唐津市 岩崎 實

雨蛙ガラス戸越しに話しかけ

したたかさ吾にない故この迷い

部屋トイレ花取り替えて孫迎え

徒長枝へ剪定鋏ばつさりと

唐津市 吉富 節子

会うたびに絆深まるボランティア

夫逝きて喜樂の味もうすくなり

原爆の恐怖の遺跡広島よ

梅雨晴れ間安らぎ求め菖蒲園

山鹿市 三谷 たん吉

政界も球界までも嘘つばち

野球など見ずにやらぬか抗議デモ

韓ドラを見る為だけのテレビなり

山鹿から二三歩外は生き地獄

シドニー 坂上 のり子

人を見る目が無い罪は選挙民

一本の線で仕切れぬ異宗教

愚痴聞いて上げたのにまた元の鞘

延々と体調聞かされる電話

メルボルン 藤原 ポン吉

放つ矢も足らずに頼る輸入品

ぼやけども老いを蹴散らす色眼鏡

目一杯キーを叩いて出来るふり

リスクとはその氣になつてしまう事

札幌市 富永 恵子

春の陽に窓明けはなし風を呼び

北国も芽がうるみだし背伸びする

絆できよさこい祭り予定表

バス降りてかすかに香る草いきれ

つくば市 嶋本 喬

竜巻きが吹抜け切った並木道

盆暮れが生き甲斐みたい白寿母

入学式母放っておき先行く児

空梅雨に水やりせかす植えた木々

東京都 井上 つよし

梅雨入り宣言出したその夜の星の空

働かぬ脳に油を差す徳利

一筋の涙がつたう童唄

広重の雨に暑さを救われる

東京都 高岡 弥生

古いは当たらなくても癒される

試合先軽食つまむ楽しみを

一手間をかけた川柳生き返る

文句言う年寄り何故か長生きよ

佐渡市 高野不二

エンディングノート買うだけ買って来る

年とって女房うるさくなつて来た

眼鏡掛けて見れば一桁ちがつてた

天道さんも狂つたらしい晴続き

静岡市 渡辺芳子

やりたい事まだまだあるよ八十路でも

目立たなくていいと思うとずつと楽

この地球日本に生れ今感謝

今日の予定みんなこなして良いお風呂

江南市 脇田雅美

夏の朝アラームよりも早く起き

理由があり夫婦が別に住んでいる

来る者は受け去る者は追いません

相槌に思う本音を包み込む

愛知県 樺嶺志

お隣が焼き茄子くれて里想う

忘れたの寂しさ募る介護の身

同じことまたも忘れて邪気のなさ

帰らせて泣かれた頃が懐かしい

大阪市 内田志津子

智恵と技資源不足をカバーする

新緑はきつと生命の原点だ

ストレスを溜めた私の乱気流

病室の友に届けた春ひとつ

大阪市 岡田元

歳とれば欠礼多く悔い残る

虫食いの文読み返し友偲ぶ

洗面器ゆらぐ我が顔泣き笑い

淋しさを大樹の陰で癒したい

大阪市 寺本実

白髪が少し混ざつた君が好き

気に染まぬ誘いのハガキ伏せておく

夜目遠目今の女はマスクする

参拝し帰りに気づく神無月

大阪市 枋尾奏子

太陽とアバンチュールのパナマ帽

海鳴りの中に探してみる本音

手鏡の魔女と作戦会議中

白地図を抱いて私はフリーター

大阪市 堀田温子

退職後朝昼晩は息詰まる

いいお顔にじみ出ているお人柄

神様の顔をイメージして拝む

登りつめ今は守りの中に居る

大阪市 前川善之

秘密知り知らぬ顔する妻の知恵

サイエンス使えば生きる道も楽

人の知恵も寿命に勝てぬサイエンス

勝つ為に目には見えない助けいる

大阪市 松田 聰

背中から自信一杯あふれてる
挨拶で場の雰囲気と和ませる
有難さ知った時には親は居ず
流行ってる店に益々足が向く

大阪市 吉田 知之

馴れぬ家事業つけても輝だらけ
政治より儲け先生情けない
梯子して旨い旨いとリポーター
赤信号平気で走りゆくペダル

泉佐野市 稲葉 洋

里育ちやはり土の香野草好き
溽暑来る地獄の釜の蓋開いて
夕立にホッとされたか地蔵さん
柄になく詩人氣取りで虫の夜を

河内長野市 辻村 ヒロ

自転車で何時も元気と見られてる
アレやコレ頭の中でかくれんぼ
メール打ち物足りなくて電話する
ちょい悪に懂れている夫です

河内長野市 藤塚 克三

目覚ましを止めて5分が我が時間
嫁さんとチョコレートパフェ食べたいな
暑い日は黙っていれば素麺か
妻の愚痴聞いて今日も頑張れる

河内長野市 穂口 正子

許さない軽い言葉の増殖を
済んだこと何かに付けて責められる
耐えた分性格少し悪くなり
歳取った自分の顔に馴染めない

河内長野市 山本 エミ

正確に働く時計あわてさず
おいお茶緑茶の缶を転がされ
雨だれに午後のひと時眠くなり
仏壇にお水をあげて暑いでしょ

河内長野市 渡邊 修

パパ野球ママはドラマで子はゲーム
トラ勝つ日まねき猫まで踊り出す
今年こそトラのマジック灯る秋
四代でチャーターバスの至福旅

岸和田市 中岡 香代

信念を曲げて生きねば生きられず
鮮明で妻に嫌われ泣く鏡
子どもが巣立ちキッチン泣いている
心にもカーテンひいて反抗期

堺市 増田 わこう

街行けばステッキ目立つ高齢化
社会批判できる川柳醍醐味か
原発の輸出責任誰がとる
軍備より外交交渉こそ平和

堺市 大和 峯二

つらい時笑顔贈られ救われる
人生は奇妙な旅と悟る日々
老いの身は日日断捨離で身も軽い
熟年になって続々生きている知恵

高槻市 三谷 白黒

里帰り育児の付いたホテル並み
里帰り爺は二階に追いやられ
好物の干物を貰う誕生日
儲かれば損する人も居るはずだ

豊中市 荒木 郁子

幸せのレシピをコピーしましょうか
爽やかな笑顔が紡ぐボランティア
老いの坂リュックスタイル板に付く
シニアこそ品良くおしゃれ出かけよう

豊中市 石橋 優明

残照の底に沈んでもの思う
日に焼けぬ肌はまこと白かりき
ひと睨み雨はね返し走り出す
終電車肩を寄せあい人の文字

富田林市 関 よしみ

置傘に向日葵そえて半夏生
見舞かす木立の上に未来ビル
天の川今年も託す片便り
紅型の仕付けを解いて酔う私

富田林市 中村 恵

朝飯が旨い元気が膨らんだ
人の輪へ玉虫色で紛れ込む
お小言を貰うつもりが拍子抜け
執着を脱いで仏に近くなる

富田林市 肥山 一文

妻の愛子から孫へと移つて
古希すぎて積むために本を買い
川柳を始めてやつと辞書開く
早や二年未だにもめる再稼働

羽曳野市 安本 美喜

背筋しゃんとおばあさんに見えるわよ
二機三機取材へりらし揚花火
庭隅の日の斑にぬつとまむし草
ステテコの柄物売られ着せられる

藤井寺市 田付 絹枝

マジシャンはピエロの様なかい服
ナチュラルが似合うと言われ薄化粧
近道と路地を曲れば元の場所
トラブルも花の下では声ひそめ

松原市 市川 雄太

街中で軍歌聞こえる昼の二時
汗ドバツと止まらぬ暑い変な梅雨
心のカーテン閉ざし全てを拒否してる
一日のタイムテーブル決めておく

松原市 大嶋 信次

大阪府 坂口 公子

散骨をせよと敗残兵の父
サイパンを生き抜いた父二等兵
居酒屋に旨いものあり新世界
横道に一手間かけた店がある

箕面市 寺井 柳童

大阪府 高木 道子

泥んこの子供見掛けぬ水たまり
ぐんぐんと伸びて竹の子親ばなれ
晴れの日も傘離せない雨男
若い血を吸えばよいのになぜ私

箕面市 村田 恵子

大阪府 西川 冷子

朝一番健康チェック猫トイレ
娘のセンス部屋の空気が若返る
逆転し娘のお下がりを着る私
いつだっけ最後に虹を見上げたの

八尾市 田邊 浩三

大阪府 山崎 早苗

根性で勝ったつもりが情で負け
常識が常識でないこの時代
腰痛と嘔きながら散歩道
サプリ広告全部飲まなきゃならぬオレ

八尾市 前田 紀雄

神戸市 井上 忠貞

常識を疑い心磨いている
正論を吐いて白い眼が突き刺さる
富士山を試したくなる古希の坂
想定外南海トラフ備蓄する

百歳に近いですのと言う誇り
籠つては居れぬ氣力はまだ二十歳
末娘が六十二とはなんて歳
最高は宿から見える青い海
タイトルは加齢という名の処方せん
ノウハウが長くて苗がうなだれる
何年振り亭主元気で留守満喫
納得の半分ほどで打つ相槌
梅雨入りも台風さえも見放して
家計簿に赤字目立つ老いの家
アクシデントたつたひとつに疲れ切る
老いの身に発破かけてる五月晴れ
断捨離も鍋一つ捨て二つ買う
体操の園児の笑顔アンパンマン
イライラが油断の心に入り込む
建築中これも誰かの終の家
願わくば終の棲家はふるさとに
ふるさとの物産展でまとめ買い
アンテナを張り巡らせてチャンス待つ
野仏が苔の中より顔を出し

神戸市 興 水 弘

うつかりをうまく茶化して笑い種
ぎこちない孫の便りを言いまわる
ひょうきんな友の便りが達筆で
元気ですその一滴沁みわたる

神戸市 新 保 登美子

禁煙の決意が揺らぐ待ち時間
したたかに打ったと気付く青いあざ
薄味がよろしおますと京のひと
勝負する前にメガネをしかと拭く

尼崎市 小 池 幸 子

才能が獄中にも金稼ぐ
減塩の努力に舌が慣れてきた
かすむ目で余生をのぞく老いの日日
うちわに絵露草描いて夏を待つ

加東市 岩 本 美緒子

天辺から笑う里山泰然と
日長ひとり無口のままで日が暮れる
高齢の抜け道はない一歩ふむ
余白には生きた証を残しておく

篠山市 酒 井 健 二

かかると人の傷口撫でまわす
食う為に食わせる為に生きてきた
食う事が全てであった敗戦記
外堀も埋められ自由奪われる

篠山市 稗 島 照 代

お喋りも気分転換生きる知恵
御洒落して気分爽やか若返る
大好きな自惚れ鏡見飽きない
万華鏡現在過去が美化される

三田市 足 立 つ な 子

快調だいつもの刻に目が覚める
寒さより暑さに弱い体です
初盆の義理で集まる人模様
順縁といえども悔し早すぎる

三田市 多 田 雅 尚

八十を超えて今なおボランティア
前も見ずスマホ見ながら来る凶器
駅を降り訛を聞いてホッとする
竜巻に生き残るのはモグラ族

三田市 野 口 晶 子

ブライドをちょい横に置きプロポーズ
一目惚れ逃げないように影を踏む
反省をする暇もなく明日が来る
良かったネなんとか生きた証ある

宝塚市 丸 山 孔 一

老老の介護の灯にも風が吹く
かばうとし数えながらのストレッチ
手と足の時速が脳とずれてきた
遠雷を聞いた鴉が逃げて行く

三木市 山口 久子

倉吉市 堀 かずこ

用事あり立つて忘れてまた座る
静かな夜わが耳だけの音楽会
友に逢い同じ服着て大笑い
梅雨入りと足腰痛さひどくなる

和歌山市 磯部 義雄

ホラ吹いたことなどないといふを吹く
一日で古新聞と呼ばれる身
口数とめつきり減った酒の量
ムチ不要言って聞かせる親の愛

和歌山市 さかた きく

エリートのレストランに育たぬ兄
若葉の青約束事を思い出す
がやがやと声が聞える蟻の列
一行に友の笑顔が見える文

鳥取市 津村 律子

百歳も待つているよとエベレスト
山かける友から届くわらび煮る
手作りの朝の朝食イチゴジャム
ふつくとおたふく豆にもらう福

倉吉市 田中 紀美恵

ガツガツと金残さずに喧嘩なし
ガツガツと勉強したが職はなし
力にはなれぬが愛はたとある
引力に負けるものかと木守柿

人生の過去から逃げて明日はない
ごめんねと一言いえば許すのに
時どきは誤解もあるが親友だ
いやな事大声出したすつとした

境港市 中井 虎尾

雨の梅雨待つて来たのは空ツつゆ
あの声は五線譜超えた高い声
旅の友どこに行ってもお月様
柔道の道は唯今工事中

米子市 池岡 たけし

歳重ねささやく声も大声に
広い空みんなごろ寝の雲の群れ
あの頃にささやきあつて共白髪
愛し子に大樹に育てと親心

米子市 生田 和之

二日ほど禁酒貫きこともなし
前庭に目つきの悪い猫がいる
金のない俺をおれおれ無視をする
眉毛毛伸びて背丈が縮みだす

米子市 小野 鶴子

生き写しこんな顔して泣いた亡母
今流行犬も帽子で散歩する
神官の烏帽子がゆれる山開き
人並の評価まずまず生きている

父の日があると知らない父になる
米子市 加藤 正二

本を買い迷いの種を積んでおく
選挙では出来ないことをすると言う
独りでは長寿の祝払い下げ

米子市 田村 周子

ジーンズの似合う若い娘脚線美
白髪になって赤色よく使う

大社さんお蔭で安泰八十歳

人間も死ぬまでもとお色気を

米子市 湯浅 俊久

頼みごと土産一つに背負わせる

へそくりがばれぬ程度のはしご酒

何をしたか忘れた頃に出る痛み

恋求め夜を縫い飛ぶホタルの灯

鳥取県 飯野 菖子

なるほどと感謝をすれば身も軽い

指令する頭は何時も空気よむ

入口も出口も見えぬ明日に生き

日の入りも伸びて春めく野良仕事

鳥取県 岡村 孝明

弦を弾く指に見とれて夢心地

うつとりと見とれて妻に袖ひかれ

美術展見とれて足が動かない

ふつくらの女性に見とれ乗りおくれ

物は取りよう失言だつて無駄でない
鳥取県 下田 茂登子

喜寿の坂残る時間を考える

夜の灯が見えぬわびしさ一人住む

投句することに意義あり投句する

鳥取県 橋谷 静江

雨ほしい畑の野菜アップアップ

アジサイが雨が欲しくて泣いている

大輪のバラが私を勇気づけ

地図のない道を辿つて今日を生き

鳥取県 松島 恭子

茜雲太陽雄大宙舞台

川柳は萎れた花の力水

一度だけ優しくしてと寝言いう

手に残る握手餅肌我の手は

松江市 相見 柳歩

外は雨松田聖子の歌は晴れ

罰金は痛いごちそう五回分

許されるウソ君だけが美しい

シャッターの音だけ君とふたりだけ

出雲市 黒目 英男

習い事心落ちつく時を持つ

なつメロがやけに身にしむ歳になる

可能性まだまだであると知恵絞る

円安に値上げラッシュが迫りかける

雲南市 菅田 かつ子

豪快なおなら笑って場が和み
ラップした心あなたに差し上げる
年金の何だかんだとすぐ逃げる
やつあたりコップが一個割れました

安来市 原 煩悩児

孫五年生母より先を行きたがり
新茶の香えびすだいいく好々爺
連休を農事多忙と子は悟り
爺独居お金の始末無頓着

岡山市 藤成 操江

足早に過ぎゆく日々を愛おしむ
悔いぬよう出来る範囲でとんでみる
また来れたあじさい寺で手を合わす
言い負けて自分の殻に閉じこもる

岡山市 永見 心咲

九州の香りみやげに娘の帰省
軋みそう空梅雨愚痴るアスファルト
乱高下株価と同化してる脈
前頭葉ギシギシ個性紡ぐ音

倉吉市 安東 モモ

つばめ夫婦巢を見に来ては去っていく
日曜日ゆっくりしろと枕言う
洗濯機そうじ機吠えていそがしい
洗っても草の嘆きが手に残る

備前市 森 ふみか

風吹いて昨日まで花今日はゴミ
人事課の部屋の空気が不足する
夕焼けに母に引かれて帰る鬼
二泊目は夫を案じる一人旅

竹原市 六田 半徳

妻が言う本物ホタル初対面
ジョウビタキ今年の飛来忘れたの
ふじの山世界の山に仲間入り
田植え終え気掛りなのは水のこと

府中市 馬場 利子

水溜りとべた嬉しさ風となる
足を病む夫を背負えば軽き身よ
食欲が減る度箸が重くなる
知らぬまに時を重ねて喜寿となり

富田林市民文化祭 富柳会 第63回 川柳大会

とき 9月28日(土)
正午 開場 (昼食は済
ませてお越し下さい)
ところ 富田林すばるホール
(電話 0721-25-0222)
(近鉄長野線 川西駅
下車 徒歩8分)

課題と選者 各題2句 席題なし
「若」 萩野 浩吉 選
「活」 岩佐 朝子 選
「触」 大内 初太郎 選
「奥」 松本 欣之 選
「直」 土田 森子 選
「実」 池 森子 選

出句締切 午後1時
会費 1000円(お茶・発表誌呈)
懇親宴 4000円(当日受付)
お問合せ 池 森子
(電話 0721-25-0603)
主催 富柳会・富田林市 他

新川柳鑑賞 (18)

麻生 路郎

宮詣り本人様は欠伸をし

(香林)

宮詣りというのは男の子なら生れて三十一日目女の子なら三十三日目に、その産土の神に参詣することである。からだよりも大きな丈の長い美衣を纏わせられている。それが親としての誇りのようでもある。しかし、この句では赤ン坊は何んにも知らないで欠伸をしているというのである。ユーモラスな写生句として一つの発見である。

子が放送します時間をふれ歩き

(光郎)

古句に「子を持ってやうやう親の馬鹿が知れ」と云うのがあるが、親の盲目愛ばかりは手がつけれないものである。この句は可愛い子どもが一寸した唄を唄うのであろうが、子どもよりも親の方が大騒ぎしているさまが眼に見えるようである。

初節句本尊さんは晝寝中

(形水)

初節句をうれしがるのは子ども自身ではない

く、親の方である。或は祖父や祖母である。青空に鯉が泳いでいようが、いまいが、初節句の本人は少しもごんじないのである。本尊さんと言う特殊な用語がこの句には特によく利いている。

先に脱ぐ子に手拭を持ってかれ

(猫三)

日曜の午後か。今日はお父さんに連れられて銭湯へ行く。お父さんは猿股のヒモが堅くてほどけない。グズ／＼しているうちに、子どもは素早い、バツと脱ぐなり、そこにある手拭を持ってサツサツと浴室へ行ってしまったという写生句である。実に軽妙に、銭湯風景を写している。親も子も生きている。

子供の絵どの花も真正面に向き

(夜潮)

こどもの直感はおそろしい。見たままを印象的に描くのである。花という花がみな真正面を向いて調和などを考えないところにこどもらしさがあって面白いではないか。

家出され子供々々ともう云わず

(谷水)

「うちの娘はいつまでも子どもで困ります」と人の顔さえ見れば、愚痴つてる母親がよくあるものである。そのくせ、その子どもも／＼しているのが、自慢なのである。ところが、いつのほどにか、いい人が出来、ここばかり

日が照る訳ではないと家出をした。

驚いて引き戻したものの、それからは子ども／＼と云わなくなったと云うのである。斯うした母性心理は昔も今も変わらない。

子を叱る声の子無しに笑われる

(半休)

親が子を叱る声というものは確に尋常ではない。半ば泣き声で叱っている場合もあれば事実泣きながら叱っている場合もある。ホントに叱るということとは難しいことであるが、親が子を叱る場合の声は懸命であり、必至である。叱つてるといふよりも叫んでいると云った方が当てる場合もある。そんな時に、そんなに叱らないでもと思うは他人である。子のない人には到底そんな場合の親の心境などが理解出来るものではない。

判っているように思えるのは常識でものを云っているのである。叱つて貰えなくなった子にその心境を聞いて見るがいい。

席譲るところか赤子ねかしとき

(方正)

郊外電車などでよく見かける図だ。北海道のサケのように、みんなが吊革にブラ下がついてても、一向頓着しない。

老人に席を譲るところか赤子まで寝かして三人分ほどの席を占領して平気である。女と云うものとはとつく／＼感じたのであろう。

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

ソファーに刀自という名のかさひくし

親子二代のへんくつに母は古い

張り替えた障子の中に母います

見送りの母ポケットへ無理に入れ

うす糊がきいてる母の小さい足袋

木の芽あえ母すこやかに八十九

母 昭和四十一年十月十四日没

手提袋持たす寝棺に又哭きぬ

鯨幕の上に万朶の秋桜

母逝きて七日の鐘の冷えて来る

覚悟とは別に七日七日の寂しさよ

河内の灯

習いたての手品は妻にしてみせる

アベックに違いはないが五十八

添寝して父の無情を唄にする

ネクタイをしめしめ喧嘩のつづきする

おつうじのあった話題も老夫婦

老妻に手を貸す梅の道でよし

時雨よし河内のはての灯を守る

紅葉寺明治の夫婦手をつなぎ

燃えもせずさめもやらずに珊瑚婚

迎え傘の妻に教える水溜り

英語 de Senryu ②①

麻生路郎句集『旅人』

英訳 吉村 侑久代 Kim HORNE
(岐阜保健短期大学)

颱風のあんな力が欲しくなり

*I want to be
as powerful
as a typhoon*

校長と意見の違ふ父をもち

*my father's opinions
vary greatly
from my principle*

～リバーウィローのため息～

(川柳海外普及の立役者、ブライスの著書 (1) SENRYU)

川柳英訳史を俯瞰すれば、日本人で初めて川柳を英訳した大正時代の和田垣謙三や、阿部佐保蘭を中心とした川柳翻訳研究会の活動は瞠目すべき事でしたが、川柳の本格的な海外普及、つまり川柳の国際化はすでに紹介した R.H. ブライスの戦後の活動まで待たねばなりません。ブライスは外国人として本邦初の川柳の英訳・解説書 SENRYU (北星堂 1949) を出版しました。谷脇素文の軽妙で漫画的な挿絵が挿入された 230 頁、A5 判の SENRYU は、アメリカで 3 ドルで販売され好評でした。英語で書かれ、海外で販売されたことによって、海外の読者を得ることができたことは、川柳の海外普及の第一歩となったと言えます。驚くことにブライスはその後も俳句と川柳、そして禅書をほぼ同時期に出すほど精力的に執筆活動をしました。吉田機司との共著『世界の諷刺詩川柳』(日本出版共同株式会社 1950) は SENRYU の翌年に出版されました。SENRYU では、俳句と川柳の違いと特質、川柳の特性、そして川柳作品を「女性」「子供」「母」「父」「妻」「夫」「姑」「親戚」「職業」「動物」「事物」「歴史的なこと」「人の心理」「人生」に分類しています。SENRYU では凡そ 530 句 (5 割は古川柳) の川柳が英訳されました。中でも「職業」、「人の心理」、「人生」を多く英訳したのは、ブライスの関心がそれらに向いていたからでしょう。またブライスが俳句と川柳の違いを詳しく解説したことで、海外で双方の読者を得ることができました。SENRYU からブライスの英訳を引いてみましょう。

涼み台うしろでがまが聴いている

三太郎

On the cooling bench;

Behind them

A toad is listening.

Santarō

俳風柳多留一二篇研究 2

菰かふり元樽酒も呑たやつ
細井 賛。
人といふものわとこもへゆびをさし
五七五

一二三二

小栗 清 吾・細井 龍夫
伊吹 和男・山田 昭夫

石川 道子

清 博 美

5 松がとれるとさむらいが百さがり

小栗 武家が年礼のために臨時の供を雇うと

いう類句多数の一。松の内（七日）を過ぎると報酬が百文下がるというのである。どこまで実態を表しているかわからぬが、需給関係から松の内は報酬が高いというのはありそうなことである。

日雇の供も直上りの松の内 九三五

出来合イのぶしうれ切れるまつの内

安五礼五

なお、おなじみの、

上下ハかそう式百で来てくりやれ 二三八
の句も勘案すると、松の内は衣裳付きで一日二百文、松の内を過ぎると百文に値下がり

相場だったものか。

山田 賛。なお「柳多留」八十八篇（文政八年刊）に、

武道やつしで四百取松の内 八八七

という句があるから、文政頃は値上がりしていたのかも知れない。

清 賛。

6 こもかふりとこでまんまもくつたやつ

小栗 薦被りは乞食。とは魚の幼児語。子

供の頃は、魚をおかずにしてまんま（飯）を食うという裕福な生活をしていたのに、今は落ちぶれて乞食になってしまったということ。人生いろいろ、有為転変の世の中だなあという句でありましょうか。

7 口中に茶ぶくろの有る神楽しゝ

小栗 茶袋は、①葉茶を入れておく紙袋。②

葉茶を入れて煎ずるための布袋（日）。

神楽獅子は、太神楽の獅子舞の獅子。太神

楽は、近世に行われていた獅子舞を中心に、品玉・曲鞠・皿回・曲撥などの曲芸を演じた

大道芸（角川古語）。

神楽獅子の獅子頭の口の奥に、茶袋状の布が取り付けてあることを細かく観察しただけの句と思う。手元の資料では、これを証明する絵を見つかることができなかったが、類句もいくつかあるのでそういう解釈でよいと思う。

茶ふくろを喰てるやうな神樂し、

安八梅 4

のどに行き留りのあるハ神樂し、

安六義 6

大神樂のどのあたりにのれん有り

拾四 1

門付の神樂ハ咽へ幕を張り

一五 3

石川 賛。私が見たのは、「のどのあたりにのれん有り」という感じでした。

清 賛。

8 二まいはへやしたと小はらひつたくり

小栗 ここで「小原」は、類句から見て、「小原盆」(黒木の蒔絵などのある小形のさかずき)「日国」のことと思う。

十露盤へしたむ小原のせわしなさ

初 38

たしなみの小原禿かふいて出し

明二樓 2

ふとつちやう小原に三ツ程ハ出し

末 10

長いもを小原へ取て子にあづけ

安六仁 4

また、「二枚生えやした」は、赤ん坊に齒

が二枚生えたことをいうのであらう。

芸も出来片こと口に齒ハ二枚

一三〇 26

女房が赤ん坊に、小原盆を玩具代わりにし

やぶらせていると、カチカチ音がする。「お

や」と思つて口中を覗いてみると、可愛い齒

が二枚生えている。「まあ、齒が二枚生えや

した」と言いながら、蒔絵が傷つかないよう

に小原盆をひつたくる。というような光景を

想像すればよい。

なお、蛇足ながら、小原盆については『や

なぎ樽研究』に考証がある。

清 賛。

9 けんぎやうとびんぼうゆすりしてはなし

小栗 ここで、検校と貧乏揺すりして話している人とは、検校から金を借りている人であらう。借金の催促をされている場面であらうか。貧乏だから金を借りたわけで、引き続き貧乏だから返せる筈もない。貧乏揺すりでもしながら、言い訳をするほか無いのである。

山田 賛。貧乏がびんぼうゆすりをしているところがミソ。

清 貧乏人が貧乏揺すり、賛。

10 はしたががり迄書置のばかりちぎ

細井 戸閉めになつていたので、どうしたのかと覗いてみたら、出奔したらしく書置きがあつた。それには小口の借金まで事細かに書いてある。事ほど左様に融通がきかず、几帳面過ぎて商売がうまくゆかなかつたのかも知

れない。それにしても、何処へ行つてしまつたのだろうか。お気の毒に。

書置ハめつかり安い所コへおき

八 21

書置が文章過ぎてむごくなし

筈 12

馬鹿律義とは誉るの欺そしるの欺

一五 15

山田 賛。ですが出奔でなく遺書ではないか。

石川 賛。私でも遺書かと思いましたが、家出でもよいわけですね。

小栗 どちらでも。私の趣味としては欠落の方が深刻でなくて好き。要は借金で首が廻らず書置をしてドロシしようという時に、主たる原因ではない端金まで細かく書いてあるのがオカシイ。

清 同右。

11 ゆびさしで座頭におしへわらハれる

細井 座頭に道を問われたが、目が見えないのを忘れて、尋ねられた行先を指さして教えた。居合わせた人にそのうつかりを笑われるのである。

小栗 賛。そんなこともあるね、というだけの句。

清 賛。

愛染帖

新家 完司 選

おめぐみのように自販機からお釣り
（評）あの「チャリンチャリン！」という怪びしい音はプライド傷つける。相手が人間なら「お金を放るな！」と叱りつけるのだが……

権原市 居谷真理子
川西市 山口 不動

お賽銭五百円玉やめとて

（評）お賽銭をケチるとご利益がないような気がするが、五百円あれば昼めしが食える。だが、重大な願いであれば出すべきだろう。

大阪市 津村志華子

無駄遣いしてポイントを溜めている

（評）オマケが欲しくてキヤラメルを買うようなもの。クレジットカードからコンビニのカードまで、敵はあの手この手で攻めてくる。

広島市 岸本 清

酒バック非常袋に三日分

（評）非常袋に用意すべきものは、水・乾パン・缶詰・懐中電灯・携帯ラジオ。そして、何よりも酒・焼酎。三日分で足るか？

鳥取県 齊尾くにこ
咳払い溜め息みんな言葉です

（評）そう、微笑みも眉間の皺もみんな言葉。そのような、声にならない言葉の意味を正確に受け止めるようにしたいものだが……

河内長野市 藤塚 克三

老人会マジックショーは超スロー

（評）演技者も観客も、礼儀を心得た人生の達人ばかり。タネも仕掛けもバレーバレーの超スローマジックでも、大いに受けて大笑い。

芦屋市 黒田 能子

階段をトントントンと上がれない

（評）トントントンと調子良く上がっていたのは随分前。今では手摺を握ってヨッコラシヨ歳相応の動きになってくるのは極めて自然。

藤山 遠山 可住

富士山がハハハとエベレストが笑う

（評）富士山は3776m。一方、エベレストは8850m。世界遺産の大先輩であり、高さも倍以上となれば笑われても仕方なし。

札幌市 三浦 強一

親バカの付けた名前に負けている

（評）親の望み通りに育つてくれる子は稀で、たいがいは期待外れ。「たいそうな名前付いてる普通の子 原井典子」という句もある。

青森市 守田 啓子

淋しさの募る一番星のころ

（評）二十四時間の中で、いちばん寂しく感

じるのは黄昏時。それは、照明などなかった太古からの不安感がDNAにあるのだろう。

紀の川市 辻内 次根

自画像は脱獄犯のような顔

武士道ととても思えぬネズミ捕り

奈良市 大久保眞澄

風見鶏あまた向きを変えている

人間ドック元氣なうちに往くところ

松江市 石橋 芳山

坊さんの経はでたらめかも知れぬ

賢さを見せつけてくる草書体

松山市 神野きつこ

地球儀で斜めになっている地球

コビーより切り抜きよりも手書きする

藤井寺市 太田扶美代

ベランダの手摺から見た世間さま

忙中閑メダカの数を読んでいる

京都市 都倉 求芽

忘れものいくつしたのか軽い肩

面積はすべて底辺から測る

羽曳野市 宇都宮ちづる

ワイヤーで持ち堪えているボインです

滑走路閉鎖したのは鳥一羽

枚方市 寺川 弘一

神さまに死んでからでは用が無い

交番と神殿いつも留守勝ちだ

藤井寺市 増井ヨシ枝

大根を抜いた穴そのままに初夏

唐津市 北村 松風

客の顔で数えるバスガイド

高槻市 安田 忠子

改札の内と外とでまだしゃべり

米子市 生田 和之

延命は図るなしかし放つとくな

京都市 三宅 満子

骨密度少し増えそう日向ぼこ

西宮市 藤本 直

禁煙中夢で一本吸いました

鳥取市 岸本 孝子

オレオレの知恵の進化が止まらない

今治市 渡邊伊津志

母の日に大吟醸の贈り物

母色透けた大福春の詩

教わったことを教えて教えられ

蘇山市 円増 純子

夏花壇ブルー集めて涼を呼ぶ

京都市 高島 啓子

ノンアルコールド乾杯が苦にならぬ

グランフロント散財しないにわつ子

堺市 村上 玄也

京都まで津波は来ないシユミレーション

瘦せたなら穿こうととつてあるズボン

阪神のチャンスになると風呂が沸く

河内長野市 山岡富美子

見栄と欲すると風船が萎む

初心者のままで卒業式がくる

米子市 後藤美恵子

遺伝子が顔の真ん中胡坐かく

浜松市 岡田 史郎

お返しを考えながら苗もらう

大阪府 米澤 俣子

ごはん時ぐらいいは帽子とりなさい

豊中市 藤井 則彦

俄か雨妻ともたつく相合傘

三田市 上田ひとみ

もう走つたりなんかはしない私

紀の川市 楠原 富子

追伸にヨイシヨの言葉忘れない

八合目あたりで首を傾げだす

三田市 堀 正和

体重は変わらないのに腹が出る

ちびるから履かないでいる桐の下駄

寝屋川市 森 茜

忘れものゝ叫んでくれた五階から

ガンギリオンいつの間にやら消えていた

弘前市 高瀬 霜石

週一度身体に悪いモノを食う

知り合いの離婚の波が押し寄せる

鳥取県 石谷美恵子

グー・チョコ・パー言う事さかぬ足の指

年金へ文句たれたり拝んだり

高槻市 片山かずお

予定入れ明日をしかと捕まえる

歳ですな短い足がよくもつれ

大阪市 谷口 義

ころつと死ねるかも知れへんやんか

切ないものの一つに足の爪がある

和歌山市 柏原 夕胡

絵筆洗った水のようなお人です

買つても当たらない買わないと当たらない

神戸市 山口 光久

帰る家あるから旅が楽しめる

大阪市 阿野壽美子

出無精の主人誘つて雨に遭う

鳥取市 春木圭一郎

飲んでいる時が一番幸せだ

八尾市 前田 紀雄

晩酌は前頭葉のカビ落とす

羽曳野市 徳山みつこ

半袖も腕のたるみがノーという

唐津市 坂本 蜂朗

妻の引くガイドラインに縛られる

大阪市 古今堂蕉子

リバウンド痩せるなどもう思わない

河内長野市 村上 直樹

次の世は過ぎた妻より足りぬ妻

藤井寺市 鴨谷瑠美子

空気入れるとまだしゃんとするマヨネーズ

枚方市 伊達 郁夫

席譲るただそれだけのボランティア

米子市 中原 章子

詐欺ではと先ず疑つて身を守る

西宮市 牧渕富喜子
餓死の字と親子をずっと思いけり

豊橋市 藤田 千休
天国に一番近いエベレスト

河内長野市 穂口 正子
口元に縦皺刻み婆さんに

西宮市 片山 忠
五百円毎日もらい浮気せず

海南市 小谷 小雪
六月の蛇きやしゃだから怖くない

三田市 雑賀 一泉
遺言書半分書いてそのまんま

鳥取県 山下 節子
いいニュースいたずら好きの友からだ

吹田市 太田 昭
でんぐり返りまだ出来るから老いてない

岡山市 永見 心咲
定位置で好球だけを待っている

弘前市 岡本 花匠
薬の元気を貰う散歩道

八尾市 田邊 浩三
年寄りが老犬を引く散歩道

枚方市 松原 保
十年も歩けば変わる顔馴染み

岡山市 工藤千代子
シグナルは黄色のままの恋でした

堺市 大隅 克博
順不同地震竜巻火事女房

海南市 堂上 泰女
万縁に酔い雑草を引いている

唐津市 山口 高明
肅々と進む軍備と借金と

鳥取市 福西 茶子
大火傷したから株は大嫌い

倉吉市 中村 毅
診察を待つ間でも指を折る

枚方市 丹後屋 肇
一皮が剥けぬ作句のじれったさ

尼崎市 春城 年代
お互いさまに無沙汰重ねて梅雨に入る

鳥取市 岸本 宏章
一歳児程度か僕の英語力

寝屋川市 平松かすみ
ドクターに見せる手の爪足の爪

弘前市 稲見 則彦
朝ですと軒のすずめに諭される

香芝市 大内 朝子
無職でも日曜なぜかほっとする

大阪市 奥村 五月
めし一杯酒は三杯まだたらず

岡山県 田中 恵
水走る大地いつきに活気付く

堺市 澤井 敏治
巨匠の絵出稼ぎ中と美術館

長岡京市 山田 葉子
梅ざらり今年も母は元気です

八尾市 吉村 一風
孫が来てころっと変える日曜日

堺市 矢倉 五月
自分では見られぬ寝顔ふと悪い

藤井寺市 鈴木いさお
よそ行きの声で愛燦燦を唄う

篠山市 酒井 真由
わだつみのこえ聞けとこそ夏の月

箕面市 広島 巴子
腐れ縁いえ良縁と五十年

つくば市 嶋本 喬
暮れなずむ港バックに老夫婦

鳥取市 永原 昌鼓
ドラム缶みたいな腹を持て余す

大阪市 岩崎 公誠
吾がためにしつかり食って生きている

和歌山県 森下よりこ
いつからか保護者の側に居る娘

和泉市 横山 捷也
肩書きが無いから名刺作らない

瀬戸内市 東横ますみ
オーイと言えどオーイと返らないこの世

亀岡市 井上 森生
そのうちに声も力も半分に

大阪市 栃尾 奏子
ばあちゃんにババ叱られている田舎

大阪市 藤田 武人
論吉留守カードばかりの財布です

高槻市 富田 美義
いい夜明けゴールが少し遠くなる

藤井寺市 俣野登志子
いい目覚め手足勝手に跳ねている

河内長野市 松岡 篤
異常なし早速友に酒のTEL

富田林市 中村 恵
退屈で夫に小石投げてみる

香南市 桑名 孝雄
老いの酒淘汰されないように飲む

紀の川市 北山 絹子
梅干を持参している夏の陣

茨木市 藤井 正雄
やけ酒を夜風が叱り冷えてくる

鳥取県 大塚美代子
結婚を待たず運んだコウノトリ

岡山市 丹下 凱夫
善人の顔してみんなうどんなん食う

高槻市 富田 保子
嫌々の検査で命拾いする

泉佐野市 稲葉 洋
冷や飯で育ち本流アレルギ

大阪市 榎本日の出
もどれない老いの行方も楽しみだ

鳥取市 土橋 螢
おふくろの味が元気を出せという

京都市 榎本 宏子
原発も息子も信じないでおく

和歌山市 平田 元三
夜祭りで出会う女性はみな美人

豊中市 松尾美智代
急く用事ないのでせかせかと歩く

堺市 羽田野洋介
手を放し目を離さない親心

大阪市 大川 桃花
かと言って明日の洗濯今日出来ぬ

宇都市 平田 実男
不意の客へさらけ出している楽屋裏

箕面市 酒井 紀華
朝の庭蝶が死んでる手を合わす

安来市 原 煩惱児
整形は動け内科は安静に

神戸市 白川 淑子
爺婆の椅子用意され運動会

大阪府 初山 隆盛
酒の威を借りても勇氣あらずさり

江南市 脇田 雅美
車椅子乗って介護のありがたみ

鳥取市 近藤 秋星
ボケ様も十人十色認知症

三田市 野口 晶子
頬ぶたればとんと落ちた妻のエゴ

寝屋川市 岡本 勲
医者二軒梯子でできますまだ元気

河内長野市 大島 友子
ひけらかすうんちく料理まずくする

鳥取県 竹信 照彦
空梅雨に傘踊りして雨を乞う

西予市 黒田 茂代
精神統一しても通らぬ針の穴

神戸市 奥澤洋次郎
お互いに居場所求めて生きる老い

生駒市 飛永ふりこ
愛ちよつと入れておむすび小太りに

加西市 中川 修
回る鮎孫の残した舍利が好き

富田林市 中井 アキ
煮豆とろとろ幸せな時間帯

米子市 竹村紀の治
クーラーが勿体無いと図書館へ

和歌山市 楠見 章子
ガラス玉でも着けていく場所もない

大洲市 中居 善信
ママシの首をひよいと擱んでいる農夫

日高市 根岸 方子
風評を他所にフクシマ旅の宿

米子市 高田 振作
父の日もひとりいつもの発泡酒

大洲市 花岡 順子
故郷にぶつきらばうな彼が居る

堺市 内藤 憲彦
一点差ぶつづつ言うな負けは負け

倉吉市 岡崎美知江
息子ともばちばち同居しようかな

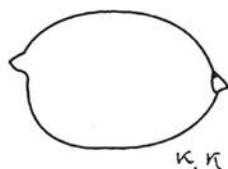
共選欄

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 754句)



「拭く」奥田みつ子選

曇りガラス拭いてあしたの夢をみる
鳥取市 夏目 一粹
言い勝った昨日の淀みそつと拭く
寝屋川市 森 茜
近道をせずに流した汗を拭く
堺市 遠山 唯教
自分史に拭い去りたい恥いくつ
大阪府 米澤 俣子
レコードをきれいに拭いて昭和聞く
和歌山市 上田 紀子
眼鏡拭く仕種で策を練っている
大洲市 中居 善信
きれいなうちはよく拭いていたレンジ
西宮市 緒方美津子
快い言葉にこころ拭われる
京都市 坪井 孝一
廃校の長い廊下の競い拭き
西宮市 秋元 てる
その先を促す眼鏡拭きながら
篠山市 酒井 真由
顔拭いて今日の天気を知らず猫
大阪市 古今堂蕉子
艶拭きをして真実を光らせる
紀の川市 宇野 幹子
悔し涙拭けばメラメラ湧く闘志
出雲市 伊藤 玲子
化粧おとすと鏡に亡母が現れる
富田林市 中井 アキ
しゃくりあげ涙拭いてる孫愛し
鳥取市 山下 凱柳

「拭く」森山盛桜選

身のうちの鬼を鎮める鏡拭く
和歌山市 古久保和子
仏壇を拭いて先祖を振り向かす
松江市 相見 柳歩
告白は心の窓を拭いてから
和歌山市 武本 碧
黒板の拭き当番がいた昭和
奈良県 谷川 憲
見栄張らず自分の生地で床を拭く
今治市 渡邊伊津志
口角の泡は小まめに拭いておく
鳥取市 岸本 宏章
レコードをきれいに拭いて昭和聞く
和歌山市 上田 紀子
窓拭けばもう紫陽花の七変化
大阪市 川端 一步
老眼鏡拭けばやる気が湧いてくる
京都市 清水 英旺
気晴らしになればとガラス拭いてみる
高槻市 片山かずお
口拭いてさて冗談はここまでだ
枚方市 平尾 定昭
エゴと欲拭いても直ぐに滲み出る
鳥取県 吉野いさお
諍いをしたテーブルを拭いておく
京都市 高島 啓子
如何せん拭くと恋路がなお真つ赤
生駒市 飛永ふりこ
便器拭くどこまで続く職探し
青森市 守田 啓子

旨い話眼鏡拭き拭き聞いておく	川西市	大坪	一徳
梅雨空を布で拭いたら虹見えた	大阪市	岡田	元
おトイレの神様拭いて差し上げる	鳥取県	小野	鶴子
ガラス拭く明日の世情を見たいから	藤井寺市	若松	雅枝
もぎ立てのトマト野良着で拭きガブリ	河内長野市	坂上	淳司
拭きましよう君の心が見えるまで	芦屋市	竹山千賀子	
未来図を覗くメガネのピツカピカ	香芝市	大内	朝子
お日様に恥じぬ暮らしの汗を拭く	大阪市	升成	好
自分史に拭いて消したい箇所がある	交野市	森本	弘風
昭和史に拭い切れない日を刻む	和歌山市	堀	富美子
大戦の不信拭きできぬまま	札幌市	小沢	淳
ピカピカに拭いた鏡に嘘はない	高知市	小川てるみ	
幸せな夢を見たくて眼鏡拭く	芦屋市	黒田	能子
もう泣くな妻の目尻を拭く介護	北九州市	岡田	幸生
老兵は机きれいに拭いて去る	弘前市	高瀬	霜石
拭き込んだ柱が過去を物語る	紀の川市	楠原	富子
拭き掃除から積みあげた芸の道	富田林市	片岡智恵子	
拭き込んだ黒光りには負けている	尼崎市	春城	年代
げんこつで拭いた涙は忘れまい	富山市	有澤	嘉晃
脳みそのカビも拭きたい梅雨晴れ間	加西市	金川	宣子
涙拭わず男は天を仰ぎ見る	堺市	村上	玄也
めがね拭く古稀のあしたを見るために	豊中市	水野	黒兎
傷口をそっと拭ってくれた母	大阪狭山市	矢野	梓

汚れたら拭けばいいさと楽天家	羽曳野市	永田	章司
恥かいた日は何度でも汗を拭く	大阪市	伏見	雅明
ハンカチで拭いた理由は話せない	京都市	坪井	孝一
雑巾がけ終えたら昼になつてゐる	西予市	黒田	茂代
拭き方が下手であの嘘見えた	八尾市	宮崎シマ子	
窓を拭く極楽浄土見たいから	交野市	森本	弘風
私の流れ拭きたい過去がある	長野県	丸山	健三
友情の継ぎ目は丁寧に拭いて	松江市	川本	畔
拭き込んだ黒光りには負けている	尼崎市	春城	年代
拭き取ったルージュのあとの物語	三田市	久保田千代	
拭き切れぬ程の涙よ絵灯籠	大阪市	津村志華子	
窓拭いてうるこ雲見る日曜日	和歌山市	さかたさく	
身辺に落ちてゐる愚痴を拭いている	米子市	中原	章子
お身拭いされた仏の艶つぼさ	大阪市	古今堂蕉子	
汗拭いてボチボチ話す姉妹	藤井寺市	高田美代子	
月も亡夫も覗いてくれる窓を拭く	吹田市	大谷	篤子
覆水を拭き取り夜の底を出す	備前市	森	ふみか
さつと拭きマニユアル通りご案内	奈良市	辻内げんえい	
拭いてもふいても元通りにならぬ	香芝市	大内	朝子
ハミングをしながら拭いている素足	雲南市	菅田かつ子	
生きる疑問シミにならないうちに拭く	箕面市	出口セツ子	
玄関を拭くと誰かがくる予感	紀の川市	辻内	次根
雑念をはらうワイパー加速させ	塩竈市	木田比呂朗	

娘は丸く母は四隅を拭いて終え

吹田市 太田 昭

難病の妻の寝汗をそっと拭く

神戸市 伊勢田 毅

胸奥にそっと拭きたい過去がある

明石市 桃谷 和郎

拭き取れぬところに昭和史の汚点

出雲市 竹治 かし

父の背を拭いて介護の日が暮れる

河内長野市 谷 久美子

墓石を亡母の背のよう拭いてます

奈良市 阿部 紀子

やさしさで心の傷を拭いてやる

豊中市 松尾美智代

まるまるを拭くふわふわのバスタオル

堺市 矢倉 五月

気持ち良い汗を拭ってボランテア

大阪市 津守 なぎさ

ガラス拭く窓美しく空青く

大阪市 山崎 君子

泣きじゃくる迷子の涙拭く婦警

横浜市 菊地 政勝

お身拭い仏も上気しておわす

奈良市 米田 恭昌

拭き取ったルージユのあとの物語

三田市 久保田千代

口紅を拭き取り主婦の顔になる

弘前市 福士 慕情

冷や汗を拭くハンカチは桃色だ

高石市 浅野 房子

太陽に誉めてもらった汗を拭く

八尾市 新海 信二

頬つたう嬉し涙は拭かぬまま

和歌山市 福井 菜摘

身のうちの鬼を鎮める鏡拭く

和歌山市 古久保和子

あと少し生きる命の芯を拭く

米子市 政岡未延子

秀 句

月も亡夫も覗いてくれる窓を拭く

吹田市 大谷 篤子

拭く人の心も磨く御身拭い

堺市 大隅 克博

人間を拭うてみたくなる地球

枚方市 海老池 洋

悔し涙いっぱいあった拭き切った

大阪市 江島谷勝弘

座席拭くとても神経質な顔

西宮市 片山 忠

いい人になろうなろうと足を拭く

瀬戸内市 東横ますみ

社会人たるものまずは拭き掃除

弘前市 高瀬 霜石

一巻の始まる前にメガネ拭く

海南市 小谷 小雪

取り敢えず汚れはすぐに拭いておく

島根県 伊藤 寿美

複雑な汚れに明日も挑戦だ

三田市 石原 歳子

雑巾は他人をキレイにして終える

神戸市 山崎 武彦

ずぶ濡れの魂を拭く数多の手

富田林市 中村 恵

拭くだけは拭いたが角が拭けてない

鳥取市 竹口 清信

汚したら自己責任で拭くひとり

和歌山県 森下よりこ

生きている証拭いてもつもの垢

岡山県 池田たか子

拭く方にまわれれば汚さないですよ

岸和田市 堤 梢代

階段を滑らぬほどに拭いている

玉野市 片岡 富子

ワイパーに拭きとらせてる苦い過去

豊橋市 藤田 千休

あと少し生きる命の芯を拭く

米子市 政岡未延子

拭いたって取れないハラワタの汚れ

松江市 石橋 芳山

お金だけが今日の涙を拭きとれる

四條畷市 吉岡 修

艶拭きをして真実を光らせる

紀の川市 宇野 幹子

秀 句

おしほりで顔拭き出してからオヤジ

尼崎市 藤井 宏造

汚されたブライド拭いて空に干す

鳥取県 斉尾くにこ

拭き上げて使うお世辞の裏表

川西市 日野岡和之

這えば立て

小栗清吾

江戸時代のことわざ辞典「警諭尽」に、「這^{たて}ば立てば歩^{あゆ}めと思ふ孫^{わがみ} 我身の年の寄るを厭^{いと}はで」という、いわゆる「道歌」が載っています。また、「柳多留」にも、

這えば立て立てば歩めの親心

四五二

と、まるつきりそのままの句が採られています。現在でもよく使われる「這えば立て…」の成句は、江戸時代から親しまれていたことがわかります。

赤ん坊が少しずつ大きくなって、這い始めたり歩き始めたりする。目が離せなくて大変ですが、親にとっては嬉しくてたまらない時期です。

這い習う子の骨を折る瓜一つ

傍一八

「這い習う」は、子供が這い始めること。ようやく這い始めた子供が、転がっている瓜（おそらく丸いまくわ瓜）を見つけて這って行き、小さな手で扱いかねている様子です。

這い着くと四五寸のけるまくわ瓜 一一一六
前の句の続きです。子供がまくわ瓜に這い着くと、「ほら、もう少し頑張つてごらん」と、瓜を四五寸遠ざけたりする。日常よく見る光景を細かく観察した句です。

将棋盤差し上げてこれ乳母よ

五二

子供はどこへでも這って行きます。この句の場合は、亭主が友だちと将棋を指しているところへ這って行つてしまいました。盤上をめちやくちやにしそうなので、あわてて将棋盤を持ち上げて、乳母を呼んでいるのです。

お齒黒の方へ這わせて叱られる

安元義四

将棋の方は、大の大人が二人、笑いながら困っているというほほえましい情景ですが、女房がお齒黒を付けているところへ這ってこられては困ります。お齒黒壺を引つ繰り返されたりしたら大騒動ですから、「お前さん、ちゃんと見ていておくれな」などと、亭主が叱られることになります。

這い習う子に立ちかねる里の母 二四四三

二四四三

ようやく這い這いができるようになった子供の可愛いこと。それが孫ならなおさらです。娘の嫁ぎ先へやって来た里の母が、離れがたくて、なかなか暇乞いできないでいる様子です。その気持、よくわかります。

やがて、よちよちと歩くようになります。
權蔵でからくりほどは歩くなり 七三

「權蔵」は、歩き始めた子供用のわらじです。それを履いて危なっかしく歩く姿は、からくり人形のようなのです。たしかにそんな感じですね。

立ち習う子に行灯を母押さえ

一一四二五

歩き始めた子供は、何にかまるか、どこで転ぶかわかりません。あらかじめ行灯を押えて倒れないようにするのも、母なればこそでしょう。

母の後追つてはしごを二三段

傍一八

でも、ちよつと目を離すと、母の後を追つてはしご段を上つたりしますから、油断がありません。そこで、

よく歩く子にくたびれる親の口

五五二

「そつち行つちやだめ」「ほら、つまづくよ」「危ないからお鍋片付けて」などなど、しゃべりまくるようになります。

真ん中にあんよはお下手ぶらさがり

拾十二

結局のところ、夫婦で手をつないで歩かせるのがいちばん安全です。まだまだ「あんよはお上手」まではいかない子供を、夫婦の真ん中にぶら下げるようにして歩く。幸せな光景です。

「自然」

川 端 一 歩 選



日本の自然汚した原発禍
途切なく川の情けや岩清水
豪雪に林檎の思考凍りつき
怖いもの一つ増えたぞ竜巻が
レアアース資源いっぱい次世代へ
被災地の自然の脅威見る辛さ
ブルドーザの音して自然一つ消え
自然薯のトロロで夏を乗り切ろう
アルバムにしぜんと笑顔湧いてくる
恋でしようか自然に手と手繋いでる
坐禅する耳に自然の音を知る
手当して自然に還すおもいやり
子育てへ気付かなかった自然の美
ふる里の自然に月も美しい
四季自然旅の醍醐味まだ尽きぬ
伸直り自然に話かけてみる
延命措置せずに自然に終りたい
大山に自然の筆が四季描く
自然分娩です神を信じます
なりゆきで三人の子を授かった

米子市	生田	和之
高槻市	富田	保子
弘前市	稲見	則彦
大阪市	江島谷勝弘	
江南市	脇田	雅美
藤井寺市	若松	雅枝
藤井寺市	太田扶美代	
鳥取市	西川	和子
羽曳野市	徳山みつこ	
高槻市	島田千鶴子	
八尾市	宮西	弥生
香芝市	大内	朝子
東大阪市	北村	賢子
大阪市	津村志華子	
藤井寺市	田付	絹枝
奈良市	宇賀	史郎
河内長野市	木見谷孝代	
米子市	後藤美恵子	
青森県	松山	芳生
堺市(東)	志田	千代

ごく自然ミニスカートの目が泳ぐ
四季のある国は地球のエッセンス
悠久の風が刻んだ仏岩
名人の強さの秘訣自然流
自然には空とみどりの辞書がある
日が暮れる自然と酒へ手が伸びる
自然には還らぬものは核のゴミ
太陽や風の力でエネルギー
大砂丘守る新種の草を抜く
働いた汗は自然の風が好き
あれ以来自然体では会えぬ人
スランブに足は自然とふる里へ
佳

自然発酵するまで愛は急かさない
あの頃のトマトは実にうまかった
悠然と山笑ったり眠ったり
自然主義ひとりおまけというお腹
蟻の列万華鏡より面白い
人

スクラムを組めば自然と出る力
またどうぞおいでなさいと言う自然
天

天界のリズムで四季が巡りくる
軸
大自然前に小人のような僕

和歌山市	上田	紀子
河内長野市	黒岩	靖博
弘前市	福士	慕情
藤井寺市	鈴木いさお	
長野県	丸山	健三
三田市	堀	正和
宝塚市	丸山	孔一
米子市	後藤	宏之
鳥取市	岸本	宏章
三田市	上垣キヨミ	
四條畷市	吉岡	修
河内長野市	松岡	篤
河内長野市	山岡富美子	
京都市	坪井	孝一
橿原市	居谷真理子	
大阪市	柴本ばっは	
弘前市	高瀬	霜石
大阪市	榎本日の出	
海南市	小谷	小雪
札幌市	小沢	淳

「赤い」

太田 扶美代 選



赤いばら思いがけないお方から
すぐに減る赤鉛筆を持っている
赤すぎるルージュ淋しさ抱えている
赤札に目がいく主婦の性でしょう
安保理も手を焼くやんちゃ赤い国
神楽舞清楚な巫女の緋の袴
夕陽沈めど僕の怒りは赤いまま
春樹が描くアカは秀才だった
消えることない原発の赤信号
綻びを何回縫った赤い糸
孫が去り赤いバケツが残る風呂
店員に魔法かけられ赤い服
モノクロの自画像頬に赤はかす
ふる里の墓で赤恥さらけ出す
面目躍如下地の赤が生きている
白髪だが血液はまだ赤い筈
ボストの赤がわたしの背中押してくれ
あの赤い夕陽が見たい帰ろかな
その刹那真つ赤に地球染め沈む
切ればまだ赤い血が出る筈である

尼崎市 小池 幸子
八尾市 村上ミツ子
大阪市 原田すみ子
紀の川市 楠原 富子
唐津市 山口 高明
大阪府 米澤 俣子
富田林市 中崎 深雪
大阪市 江島谷勝弘
羽曳野市 徳山みつこ
大阪市 佐藤 忠昭
大阪市 高杉 力
京都市 榎本 宏子
藤井寺市 鴨谷瑠美子
大阪市 板東 倫子
八尾市 高杉 千歩
堺市 奥 時雄
貝塚市 石田ひろ子
京都市 坪井 孝一
大阪市 北村 賢子
紀の川市 辻内 次根

赤いバラ棘を抜かれてから素直
望郷の赤い宝石ゆすらうめ
一輪の赤い椿に癒される
赤いシャツわたしのアンチエイジング
赤い薔薇は見よがしが鼻につく
赤一点そえるとグツと絵が生きる
赤い服誰も注目してくれぬ
赤白黄この錠剤が命綱
沖繩の真つ赤な花は血の色か
哀しみを核にまあるく赤い実だ
赤いシャツ似合って後期高齢者
その昔胸は真つ赤な薔薇だった
佳
前向きな人には赤がよく似合う
殺戮の歴史に残る赤い川
色褪せてほしい真つ赤な嘘ひとつ
古稀だって赤い風船飛ばしたい
献血のできる赤い血持っている
人
赤い実を食べた四十雀のその後
地
赤の功罪喜ばしたり騙したり
天
看護師の赤い車に惚れている
軸
有頂天赤信号が視野にない

高槻市 島田千鶴子
香芝市 大内 朝子
豊中市 松尾美智代
西予市 黒田 茂代
生駒市 飛永ふりこ
シドニー 坂上のり子
三田市 石原 歳子
長野県 丸山 健三
八尾市 宮西 弥生
橿原市 居谷真理子
鳥取市 福西 茶子
富田林市 中井 アキ
神戸市 山口 光久
堺市 澤井 敏治
河内長野市 山岡富美子
豊中市 水野 黒兎
八尾市 宮崎シマ子
藤井寺市 鈴木いさお
堺市 荻野 像山
鳥取市 土橋 螢

「あつさり」

竹 村 紀の治 選



模様替え決めてあつさりモノトーン
事務的に余命を告げるレントゲン
知らぬ間にあつさり慣れた発泡酒
長考もあつさり負けを認めます
飽食の民はあつさり物捨てる
薄味の愛が優しく胃に落ちる
あつさりと逆転されても虎ファン
タコ焼きの土産で直る痴話げんか
あつさりと負けて早早慰労会
肩書きもあつさり捨てた青蛙
その時がくればあつさりするオムツ
あつさりと軽く握手で行ったきり
薄味の方が楽しくなる此の世
怒らせてあつさり本音聞き出した
あつさりと夢のちぎれた蜘蛛の糸
ありがとう言つてあつさり逝くつもり
歩を一つあつさり呉れるはずは無い
早々に引き揚げてゆく負けた組
重点をずらしあつさり謎が解け
あつさりの蛸酢が好きなワンカップ

河内長野市 谷 久美子
南あわじ市 萩原 狸月
河内長野市 穂口 正子
海南市 小谷 小雪
鳥取県 細田 裕花
富田林市 山野 寿之
三田市 福田 好文
堺市 荻野 象山
鳥取市 福西 茶子
弘前市 高森 一吞
米子市 吉田 陽子
大阪市 榎本日の出
紀の川市 辻内 次根
和泉市 横山 捷也
和歌山市 武本 碧
鳥取市 岸本 宏章
大洲市 中居 善信
米子市 中原 章子
和歌山市 上田 紀子
大阪市 津村志華子

淡泊な味に馴染んで来た術後
コーヒー置いてさっさと出て行った
板前がトントントンと作り上げ
あつさりと言われうっかり聞き漏らす
手の平の運にあつさり逃げられる
このままでいいと思えるようになり
塩糍あつさり味の増える喜寿
淡泊になるまで積んで来た月日
今日は飲まずにあつさりと別れよう
花便り届けあつさり散る桜
あつさりと君のところに住みついた
あつさりと負けて支払う縄のれん
佳
打ち水と西瓜素麺冷奴
たけなわに消える田舎のシンデレラ
主語述語なしであつさり済む二人
柑橘の別れニコリと手を上げて
風船がしぼんでいちにちが終わる
人
おむすび二つあつさり距離が縮まった
地
ぬくもりに負けてあつさり打ち明ける
天
サヨナラのあとは振り向かないつもり
軸
お歳です心配ないと聴診器

東大阪市 佐々木満作
堺市 矢倉 五月
唐津市 坂本 蜂朗
堺市 村上 玄也
松江市 三島 崋丘
堺市(浪)志田 千代
豊中市 水野 黒兎
富田林市 中井 アキ
鳥取市 土橋 螢
出雲市 竹治ちかし
鳥取市 夏目 一粋
弘前市 福士 慕情
羽曳野市 徳山みつこ
鳥取県 斉尾くにこ
堺市 澤井 敏治
松江市 石橋 芳山
弘前市 高瀬 霜石
大阪市 柴本ばつは
青森県 松山 芳生
和歌山市 居谷真理子



観察と考察 (3)

本項の(1)と(2)は、作句方法として「観察して発見する」ことについて述べました。対象は自分や他人や物体や草木など、見ることが出来るものでした。今回は、観察できないものに対して「考えて」見解を述べる方法です。

自分を考える

心って体のどこにありますか
わたくしの心はへその裏あたり
節約を重ねているがケチじゃない
明日のこと考えるからケチになる
少しづつ間が抜けてきて敵が減る
始末書を書くほど悪さしていない
自分が「考えていること」は、心を観察すると分かります。
しかし、自分の「ここは何処にあるのか？」などは考えないと出てきません。また、自分の性格や暮らしぶりなども、考えを巡らすことによって、右の作品のように、初めて気がつくことや、予想外の見解が生まれることがあります。

他人を考える

聞き上手ブライバシーに触れてくる
転んだら直ぐ起きなさい老けるから
足のつくところで溺れる人もいる
勝負にはこだわらないと負けてから
顔はこっち向いて心はあっちだな
他人だからやさしくできるボランティア

小谷 集一
太田 昭
田中 章子
村上 玄也
吉岡 修
岡田 和子

仕事や商売を考える

戦争に行くより楽な会社員
美容師に逆らうなかれカット前
挨拶がうまいさすがに名誉職
坊様は教えを乞うと機嫌良い
ひっそりと夜逃げ屋稼業繁盛す
葬儀屋は大阪弁が使えない

上記の作品は、観察ではなく、他人の言動から気がついたことに対して「考えを巡らして」、あまり見たことがないユニークな見解を導き出しています。そして、それぞれの見解は、人生哲学の趣があり、読む者と一緒に考えさせられます。右の「仕事や商売」も他人ですが、仕事の特徴を対象としていますので敢えて分けました。それぞれ多少の揶揄を感じますが個人攻撃ではないので許されるでしょう。すべての職業にある特徴を考察すると面白い句が生まれそうです。

地球や自然を考える

地球泣かせたシッペ返しこの猛暑
温暖化ひたひた海が押し寄せる
人間をいやいや乗せている地球
この星の介護人間だけできる

この地球や自然の移ろい等も観察することはできます。しかし、右の句のように、頭で考えて対象を分析した結果は、それぞれ作者の「想い」が表われていて納得させられます。観察し難い「温暖化」や「四季の移ろい」でも、考え抜くことによって、無限の見解が生まれてくることを示しています。

野口 節子
菊元 誠忠
津川 紫晃
山下 節子
岡本 昇

宮埜 成仁
大川 桃花
堀 正和
細田 裕花
藤田 千休
嶋澤喜八郎

初より教室

題一マジック

太田 昭

水府師は、「誰にでも解るが、誰にでも作れない自分の句を作ろう」と言われたが一部の川柳家が、「解る句よりも解らない句の方が魅力的である」と解した。

平明的では物足りなくなつた一部の作家がやや意識的に作り上げたと思われる難解句とは逆に比較的初心の方が作る、いわば未熟や背伸びが原因の難解句など色々なパターンがあるようです。でき上がった作品は書き留めてから一度放置し、後日見直して、「人に解つて貰えるかどうか」推敲をして頂きたい。

【少しの修正で良くなる句】

原 覚えたてマジック披露大喝采 美知江

(下の句が6音になりました)

添 覚えたてのマジック披露株を上げ

原 マジシャンは舌も立端に芸のうち 一文

(立派が立端と誤字になりました)

添 マジシャンの舌も立派に芸のうち

原 乙女心だけは今でも残つてゐる 晶子

添 乙女心手品で今も残つてゐる

原 渡米止めマジック駄目と気づく仁勝治

添 渡米止めマジック駄目と気づかされ

原 マジックの指先にまた落し穴 洋志

添 マジックの指先にある落し穴

原 マジックで消したい過去がニツツ文香

添 マジックで消したい過去がある内緒

原 不思議だなほっそり見えた試着室(大)和子

添 手品かなほっそり見える試着室

原 マジックの謎が解けてゐる種あかし 昭枝

添 マジックの種を明かした種明かし

原 手品師は仕掛けた箱をかたときも 冷子

添 手品師は仕掛けた箱を放さない

原 魔法の手借りて地震を寝かせたい 正二

添 魔法の手借りて地震を寝つかせる

原 横文字になるとマジックに掛かる 紀雄

(下の句が4音になりました)

添 横文字になるとマジック引つ掛かる

原 マジシャンは人の幸せ請負人 志津子

(下の句が6音になりました)

添 マジシャンは人の幸せ引き受ける

原 父さんの下手なマジック見守る子(徳)正子

添 父さんの下手なマジック見せられる

原 マジシャンは言葉はいらぬ世界共通 眞砂子

(下の句が7音になりました)

添 マジシャンに言葉はいらぬ共通語

原 マジックで銭のなる木を育てたい 紀美恵

添 マジックで金のなる木を育てたい

原 だまされて入場料は高くない 狸月

添 騙されるから入場料は高くない

原 マジックは人を騙して無罪なり 孔一

添 マジックは人を騙してなお無罪

原 マジックで付けたし書きたい我が手相(高)弥生

(中の句が8音になりました)

添 マジックで生命線をつけ加え

原 マジシャンにハートのエースを抜き取られ 友子

(中の句が8音になりました)

添 マジシャンにハートのエース抜き取られ

原 マジックは老若男女興味あり(山)久子

添 マジックは老若男女差別なく

原 携帯を操る指を孫は見せ 開子

添 カードマジック操る指を孫は見せ

原 マジックの如く気楽に生きたいの(畑)節子

添 マジックのように気楽に生きたいの

原 マジシャンの手付きしかり見てたのに 登美子

添 マジシャンの手元しつかり見た答

原 種あかしすぐに見つかる不器用さ(石)久子

添 種仕掛けすぐに見付かる不器用さ

原 マジックの種は絶対愛だつた 安子

添マジックの種は愛だと見抜いてる
原雨上がりマジックのように虹が出る 明 美

(中の句が8音になりました)

添雨上がり手品のように虹が出る
原手品師もIT機器に不思議がり せいじ

添手品師もIT危機を不思議がり
原マジックをえいと掛けてプロポーズ 満知子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

添マジックをえいと仕掛けてプロポーズ
添マジックのように株価の乱高下 (株)玲子

原閉店とマジックインクで幕下ろす (高)道子

(中の句が8音になりました)

添マジックで閉店と書き幕下ろす
原勝ち進む老監督のマジックか 喬

添老監督マジック掛けて勝ち進む
原洗面所出てきたら別人になる きっこ

添洗面所出てきたら別人になる洗面所
添出て来たら別人になる洗面所

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

添株価の乱高下まるでマジックだ (株)玲子

モテモテの美女に変身してみたい
マジックに孫は真顔で笑わない 忠 貞

巧妙な技にはまって悔しがり
幽玄の光マジックホテル飛ぶ 絹 枝

幽玄の光マジックホテル飛ぶ
連れ添ったマジック今も続いている 孝 明

連れ添ったマジック今も続いている
マジックミラー心の中を覗かれる モ モ

マジックミラー心の中を覗かれる
オレオレも奇術師なのか仕掛人 回 春 子

オレオレも奇術師なのか仕掛人
宴会のマジック先にネタが割れ (楠)富子

宴会のマジック先にネタが割れ
己惚れをマジックミラー嘲笑う つ な 子

己惚れをマジックミラー嘲笑う
終演は鳩の出番と決まってる ひ ろ 子

終演は鳩の出番と決まってる
マジックの裏を見通す童の目 心 咲

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目 武 人

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目 (齊)宏子

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目 一 泉

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目 (見)温子

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目 史 郎

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目 (中)修

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目 治 子

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目

マジックの裏を見通す童の目
マジックの裏を見通す童の目

川柳塔鑑賞

同人吟 山 本 蛙 城

— 7月号から

は英単語だが、それに限るまい。理路不整の単語だけでは欺きが見え見え。

残り時間を大切に朝の箸

木 本 朱 夏

予てから暗喩の名吟に感じ入ってる。残り時間は普段思っていない有限の命について、日々の生活の始まる朝という時間に思い到ったのである。箸が生命に力を与える食を暗示して名詞止めで力強い。

会費だけ払い総会には出ない

村 上 玄 也

世の中には種々の会がある。会員として年会費は払うが、総会の通知が来ても出席する気になれない。どうせ議事は原案通りサクラたちの拍手で成立し、役員だけが再任に喜ぶだけのこと。その状況が穿って見える。

戦争を知らぬ政治家勇ましい

瀬 戸 まさよ

敗戦から六十八年が過ぎると、大多数の政治家には戦時下の苦勞も敗戦の悲惨さも我関せずで言動が勇ましい。饒舌が滑って慰安婦問題に及び、外国からも嫌悪された政治家も戦争を知らぬ年代だ。

先師の

子を死なし学校に子の多いことを想起させる。我が身の幼い頃が、ランドセルに情凝縮され自己の洞察に徹す。

カレーでええよ夫が話しかけてくる

太 田 扶美代

カレーはお手軽料理だが、具によつて栄養満点。亭主関白がある日、座を降りて話しかけてきた。そこで作者、厨房に入り腕を振るう。野菜に果物、肉にシーフードと煮込む。この句も自己洞察の句。

ずるずるとつるつると今日終わる

石 橋 芳 山

濁音と清音のオノマトベの配合の妙。この音感の裏から一日の行動の風景を直感すると、明日への意志の力が浮かぶ。

英単語羅列しているのは詐欺師

高 瀬 霜 石

経営者として奮闘する作者の実感。例示

昭和二十六年、初学の頃、同席の詩性派の句の鑑賞に悩んだ末、詩性句は暗喩を多用するので直喩で解釈するとよいと悟った。故に川柳の鑑賞は喩法と穿ちと自己洞察に気付くのが、重要であると思う。今回、この三点に鑑賞眼を据えて心静かに全句を鑑賞した。

以下に紙幅の許す限り感銘句を挙げる。

あんばんのお臍に母と子の昭和

山 岡 富美子

開戦・敗戦 焦土からの復興と激動の昭和。食糧も不十分な時代。あんばんは貴重。その真ん中の凹みが愛らしいが、単なるお臍ではない。銃後の母と子が分け合う境界の印でもある。お臍で時代を穿って見せた。

金網にしがみついているランドセル

栗 原 道 夫

この児童を眺めている人の姿が感情と共にいかにも優しい。

シンプルな手紙の奥にある秘密

川端 一步

手紙の文字は、ことばを形にしただけのものである。言語学者ソシュールによれば、ことば（ランガージュ）は言語（ラング）と言葉（パロール）に分類され、前者は事務的にAはBで不変、後者はAはB、ときにはCであり、またDにもなり得る多方向性を示すとした。この句は文字の多様性を秘密と指摘した。

ちやらんぼらん気楽に生きて顔の艶

岩崎 公誠

人間社会は互いの共同で成り立ち、一人では生きられない。そこから互いの間にストレスが溜まる。これを達観して付き合っても程々が良い。この状態がちやらんぼらんと表現された。この語感にも似た洞察が元気を生む。

変化球覚えときどき投げてみる

神夏磯 典子

ヒューマンリレーションは、互いの心情を理解することで円滑となる。身近な関係の中でも時間的ずれも起こり得る。従ってそこら辺を知るためには、最初に接する言

動を慎重に図るのである。その場の空気に合った試し球を用意すると自覚された句。

赤丸の意味わからずに悩む朝

熊代 菜月

朝は一日の始動の時、予てから付けた赤丸を見る。赤丸の唯の丸より重要な意味がこめられている。が思い出せない焦り。要件を付記して置けばよかった。ああと、自己嫌悪。

噂では地獄の間魔認知症

古今堂 蕉子

今や、この地球上で内乱や政権の虐殺やテロが横行して、生命を軽視する事件が多発している。地獄で死を司る筈の間魔王も高齢化には抗しきれず、認知症で無茶苦茶らしい。通り魔などに注意せねばと自戒。

冗談のどつてもうまい紙コップ

吉村 一風

紙コップの暗喩がすばらしい効果上げている。吹けば飛びそうな軽薄さだが中に知識を充たすと、冗談も真実らしくなってくる。

残された時間へ石を積んでいる

山本 希久子

自己を見詰めることに秀れた作者。人生の残された時間へ用意する物。それを石で表現した。この石の暗喩するところ知識であり、必要な経費であり、用具であり、遺言でもある。

残高をゼロで寿命が終われたら

山口 美穂

後期高齢者呼ばわりなどされる時代、終活などという文字も目にする。当然のように命の終りを想う。希久子句同様に自己洞察。残高にもいろいろある。世の為に成すべきことも仕遂げたいのだ。

聞かぬふり上手になつたホッチキス

長浜 美龍

ホッチキスの暗喩は、人と人を結ぶ役目と見る。人生円熟すれば、見ぬふり聞かぬふりも知恵の一つ。

八十路入り五欲煩惱冷めやらす

岩本 浩二

男性の平均寿命が七十九。八十路を自己観察するに五欲が消えぬなと思うこと頻り。仏の道から六欲が挙げられるが、この句一欲減っているところに、思考を巡らす工夫がある。さて何が減ったか。

水煙抄鑑賞

—7月号から

鴨谷 瑠美子

サービス過剰受け手もどくと疲れ出る

森脇 麗

買うと決めていない物の詳しい説明や
沢山のパンフレットを見せられて、断れ
ず困ってしまう時もある。

ユニクロで一式揃え夏の陣

桑名 孝雄

ゴルフの選手やテニスの錦織圭選手の
コマースシャルを見て買ってしまっただけ
ども、今年はこれが一番だと思ふ。

鼻の下のはして語るラブロマン

山根 弘子

聞いてあげる相手がいて何と幸せな方
でしょう。楽しい家族が想像できます。

男前上げてくるわと散髪に

梅木 澄空

ユーモラスな会話ですね。お帰りにな
れば、カッコイイと迎えられるのですか。

天声人語ええと言うからノートする

今井 万紗子

最近の天声人語は身近な事を解りやす
く書いてあって共感と呼んでいる。お友
達との話題にもついてゆけます。

ラフ過ぎて気が抜けそうなクールヒス

阿野 壽美子

永年会社に出勤されていた男性のネク
タイ姿に見馴れていた女性には、気持ま
で怠けているように見えるのでしょうか。

人生の縮図のような我がゴルフ

高杉 力

今回はナイスショットはあったし、ほ
どほどの成績だった、人生もよく似たも
のである。また約束してしまつた。

すれすれの検査結果で生きている

辻村 ヒロ

食べ過ぎず飲み過ぎず、いつも血圧、
血糖値、コレステロール、気にしながら
暮している。だから健康でいられる。

どろどろになって覚える堅い守備

寺井 柳童

八月には高校野球が始まる。朝日新聞
に大阪大会のチームの紹介があり、意気
込みが川柳として発表されている。

教育は親の責務と言つておく

長島 亜希子

この句のように言い切つてはいるが、
決してそうではなく、出来ることはして
あげようと言うやさしさも感じられる。

長生きも一人きりなら思案する

雑賀 一泉

本当の気持だと思ふ。夫がいて妻がい
て助け合い寄り合い乍ら暮らす、楽しい
事だけ考えていれば心配いりません。

渋滞に母が危篤の人も居る

土居 輝恵

実際にこんな事もあろうかと思ふ。自
分に置きかえると恐ろしい。どうか事故
のないようにと祈りたい。

極楽へ行くポイントが足りません

森 ふみか

ポイント集めるのは大変、カードを紛
失したり期限が切れていたり、でも良い
所へ行くためにゆつくりためて下さい。

観光のラクダは砂丘走らない

篠原 久

夏休みの旅行でラクダに乗る子供達も
思う。暑い砂丘をゆつくり歩いてくれて
ありがたう。人間の仕事にも当てはまる。

しじやらつと報告

全日本川柳二〇一三年青森大会

稲見 則彦

前夜祭はPRが功を奏し、予想を上回る三七〇名の参加で、立錫の余地もない状況であった。むんむんとする熱気の中、



ねぶた囃子にハネトの乱舞

地方に住む者にとつて、中央の川柳作家の生の声を聴くことが一番とばかり、あちこちで交流の輪が広がっていた。さすがは川柳で鍛えた強者である。臆することとはなかった。前夜祭のクライマックスはねぶた囃子にハネトの乱舞であったが、大野風柳氏、雫石隆子氏、天根夢草氏がみごとに衆目をかいくぐり、ハネトの中に紛れ込んでいたという落ちがあった。これには会場がやんややんやの大喝采、みんなが跳ね踊り、暫しどよめきの埒場と化した。青森の夜は深く、それぞれの思いで更けていった。

六月九日、戦いの朝は静かに明けた。

リンクステーションホール青森には六百五十余名が集まった。津軽弁の講演に笑い、アトラクションに津軽の風を感じた。そして、広島県の田辺与志魚氏の「人間の森に絆という根っこ」が文部科学大

臣賞に輝き、大会の幕を下ろした。特記すべきは、柳田健二氏をはじめ青森県の四人六句が上位を占めたことである。



大会の様様

この大会に、ほんの僅かのかかわりを持った者として嬉しい限りである。また、蘭幸主幹、楓楽理事長始め川柳塔同人が多数お出で頂いたのが、心強い限りであった。さて、僕ですか？ ボクはやはり全没でした。勿論後日、全没の仲間と楽しくグラスを傾けました。

『麻生路郎読本』 余滴 (16)

「再び半文銭君に與ふ」を読む ③

葉 原 道 夫

大正12年2月に、川上日車・木村半文銭は「小康」を發刊した。路郎は日車から熱心に誘われたが、参加しなかつた。「苦闘四十年」(「川柳雜誌」昭和18年12月号)で、路郎はこうに述べている。

「その後、日車氏は半文銭氏と共に「小康」を出したが、私は日車の強請を斷じてしりぞけ、これには参加しなかつた。

(中略)

私は靜に考へた。柳界は麻の如く亂れて全く收拾するところを知らない。何人も川柳を愛してゐるには違ひないが何れも自派獨尊であり、兄弟牆にせめぐの類である。これではいけない。お互ひ川柳家同志がいかに、可なりとして褒めちぎつたところで、一步社會へ出て見れば、まるで社會から川柳の存在が認められてゐないではないか。これではいけない。

こゝに眼をつけた私は日車氏等の強請懇望これつとめてくれた友情をも振り切つて、社會的な柳誌、社會を對照とする柳誌刊行の計畫をすすめたのであつた。

「小康」が出されたときのエピソードを、三好革郎は、次のように記している。

□序でだから* (1)川柳雜誌創刊當時に、君と日車君が「小康」を出さうとされた時の事情を僕の知れる限りを書いて君が* (2)「あの中から二人でも三人でも眞の作家を導き出さなければ結局、自己を引き下げて手を携える事も無意義に終るであらう」と路郎君に忠告されたといふことが、君の言ふが如く眞に路郎君の立場に同情されて出た言葉でなく、君達の仕事を助けしめんが爲めの一の政略上から出た忠告であつたと云ふ

ことを明らかにしたい。* (3)小康が生れた時に川上日車君が君と蚊象君とを承諾せしめ、路郎君に對しては君即ち半文銭君と路郎君とで二面の編輯をして貰ひたい。僕(日車)は他の連中を引連れて他の面に陣取り、高級なものと大衆的なものの二の両面を持つたものを作らうと思ふと路郎君に承諾を求めに來た時は、路郎君は「雪」「土團子」「後の葉柳」* (4)「楊柳」と幾多の雜誌を出して失敗して來てゐるその苦痛を再び繰返したくない、右の雜誌と大差のない「小康」を出したところで川柳を社會から認められない丁度胃の痛む人が胃の存在を知るやうに、川柳を知つてゐるといふ社會の一部の人達を相手にして雜誌を出すことは不賛成である。川柳を社會的に認めさす爲めには、少なくとも短歌や俳句の域にまで藝術的價値を認めさせるべく我々は川柳を知らない人に川柳を讀ませ、味はさせる必要がある。即ち軀全体の問題として社會全般の人に川柳を知らしめるやうにしたい、若し藝術的な質の優れたものを残さうと云ふのなら日車、半文銭、* (5)森田森の家と路郎君の四人が一緒になつて四人だけの作品を發表する機關として雜誌を出すといふのであれば、

死物狂ひにもならう。然し全然立場の違ふ人までを引連れて雑誌を發刊するといふことは從來幾多の雑誌が踏んで來た道と同じ道を行くことで、其結果は大抵分つてゐるから、僕は君達と行動を共にすることは出來ないといつて路郎君が斷はつたが、日車君がどうしても路郎君を放さず、*6水府君と路郎君を南の柴藤へ連れて行つて君も確か同席だつたと聞くが、その席上で路郎君も「小康」に入つて貰ふことになつたと日車君が水府君に言つた時に、路郎君が僕はそんな事は承諾して居ないと言つたのでその席が非常に不愉快なものになり、水府君が二次會の勘定を拂ふとしたので日車君が例の調子で怒り出したといふやうな面白い喜劇があつたことをその當時僕は聞いて日車君らしいことをやるなアと笑つたことであつた、その結果が*7君と日車君は「小康」を續けたまへ、路郎君は川柳雑誌に立て籠るそしてどちらが先に目的地に行きつくか知らないが、君と日車君は君達の立場で進めばよい川柳の社會進出を目的とする路郎君はその目的の貫徹に向つて進まうといふことで結局路郎君の「小康」入りはおちやんとした。だから君の路郎君に對す

る忠告は「小康」へ引張り込まんが爲めの忠告と言へるではないか、*8其後路郎君が「小康」が休刊された時に經營も編輯も引受けてやるから君達は句作の方面だけに精進し給へと言つたのを、君達は斷つたではないか。

*1 「川柳雑誌」は、「小康」創刊の一年後の大正13年2月創刊。したがつて「小康」創刊の時期を「川柳雑誌創刊當時」というのは、正確ではない。

*2 「川柳雑誌」創刊當時に言つたことなのか、「小康」を出す時に言つたことなのか、後で考える。

*3 創刊号は、大正12年2月25日發行。

幹事は、川上日車・木村半文錢・馬場蹄二・杉村蚊象の四人。編集兼發行人は蹄二。投稿先は蚊象居。蹄二の本名は慶三。別号は無銭洞主人・福泉居士等。蚊象の本名は嘉三。蹄二・蚊象とも「番傘」同人を辞めて参加した。

創刊号「一人旅」で、蚊象はこう述べている。〔番傘〕から放れると云ふ事は、私として大なる苦痛であつた。過去を振り返へつて、何物かを思ふ時、私には言ひ知れぬものがある。全て革

新の前には一切の情實を去らねばならぬ。因襲の習俗に馴れたる私として、創立以來の情實を前にして「番傘」といふ集權から放れる事は、私自身の革新の第一歩でなければならぬ。其意味に於て私は柳界の革新を叫ぶものではない。現在では唯自己の改造を聲明するに過ぎぬ。(以下略)

「小康」は、各号8頁(四号のみ12頁)で、日車・半文錢・森田一二の文章と創作欄からなっている。日車・半文錢を中心に、「小康」作品を若干挙げておく。

創刊号

時計鳴る前につたり時計鳴る 日車

二号(大正12・3・25)

棧橋の長さを離れ行かんとうす 半文錢

新しい簞笥に聲が突き當り 蚊象

三号(大正12・4・25)

土掘れば土土ほれば土と水 日車

その人の靴が光つてゐる哀れ 半文錢

髪の毛の音がして来る春が来る 蚊象

四号(大正12・5・25)

人眞似の出来る阿呆な鳥がある 半文錢

一本のマツチを持つてゐる強さ 一二

人一人通らぬ路に人一人 蚊象

五号 (大正12・6・25)

一握りの胡麻は三百六十四 日車

六号 (大正12・7・25)

電柱の二本互ひに鳴る斗り 半文銭

電線に降りそ、ぐ雨おそろしい 蹄二

七号 (大正12・8・25)

お月さまこんなに草が枯れました

雅樂王

鼻を打つ天地創造の二日目に 半文銭

籠の戸に黄な嘴のかちと觸る 同

八号 (大正12・11・25)

梅干の一つが莫迦に嬉しき日 一二

牛の背に日輪様の秋のいろ 半文銭

群衆の口みな動き澄める空 日車

深みとは何水甕に水のなき 同

九号 (大正13・3・25)

屑籠屑籠また轉任だとさ 日車

* (4) 「楊楊」は、小島紺の介が発行者。

日車は創刊号から同人として、路郎と

半文銭は二号から客員として応援した。

* (5) 森田一二 (1892~1979)

のこと。「小康」が出る一年前の大正

11年6月、名古屋で「新生」を創刊。

* (6) 水府が同席しているのは、「番傘」

の客員であった日車と半文銭が同人の

蹄二・蚊象、客員の路郎を「小康」に

入れる了解を得るためか。それにし

ても、同人が引き抜かれながら二次会

の勘定を払おうとするところに、水府

の人情がうかがえる。「柴藤」は、当時

道頓堀にあった鰻屋。「番傘」(大正12

・3・1発行)の「一番地より」に、

「日車氏は半文銭、蚊象、蹄二の三氏

とともに雑誌「小康」を出します」と

淡々と報告しているが、同年12月1日

発行の同誌の「歳暮録」には、(大正

十二年を送る。今年の大阪柳界は随分

多忙であつた。「小康」がまづ反番傘

の旗を立て、起つ」とあり、平静を装

つてはいるが、水府の忤怩たる思いが

推測される。

* (7) この時期にはまだ「川柳雑誌」は

発刊されていないので、「川柳雑誌に

立て籠る」はおかしい。

* (8) 「小康」は、四号から森田一二の「新

生」と合併。七号のあと、二箇月休刊。

八号のあと、三箇月休刊。九号の、「同

人推薦と異動」に、(前略)次に久し

二氏が、主義の根本問題の相違から、

今度同人を辞退さるゝことになつた

とある。更に番傘川柳社からの要望で

馬場蹄二が同社の同人として復帰。ま

た、杉村蚊象が松竹合名会社に入社以

来多忙のため、編集から離れ平同人と

なる。これをきっかけに新体制をとつ

た「小康」だが、九号(大正13・3・

25)で廃刊した。「小康」十号に載せ

るべく用意していた作品十四句を、半

文銭は「川柳雑誌」(昭和2・5)に、

「小康十號分(以下舊稿)」として発

表しており、「半文銭句集」(昭和8年

7月10日発行)にも、「以下十四句未

發表(小康十號句稿)」として収録し

ている。

路郎が「川柳雑誌」を発刊することを決

めたのは、大正12年の年末であつた。「川

柳雑誌」創刊号(大正13・2・15発行)の

「編輯室から」で、路郎は雑誌発刊の経緯

を述べている。次はその要約である。大正

10年5月に「みをつくし」(川柳以交吟社)

が創刊した当時から路郎は、水府と共に同

誌の顧問であつた。「みをつくし」の会員

が増加するにつれ、単なる会員相互の機関誌に満足出来なくなった会員から路郎が主幹となって雑誌を大きくしてくれとの要望があった。あまりに熱心なので路郎も受けることにした。ただし、次のような条件をつけた。世間に川柳を宣伝し、初心者指導に力を注ぐものとする。また、雑誌を堅実なものとするために多くの吟社を併合する。以交吟社会員の了承を得た路郎は、短時日のうちに、神戸の柳影草社の高橋古城山、筒袖の中川露太樓、山口の柳川洲馬、千両箱の原史風等に参加を要請し、大正13年2月「川柳雑誌」を発刊した。

「番傘」(大正13・1・20)に、(△以交吟社は路郎君が主宰する事となり川柳雑誌社と名を變へました。「みをつくし」に代る「川柳雑誌」は近日出る筈です」とある。この時点では、水府も「川柳雑誌」を、単に「みをつくし」が名前を変えたものだと理解していたようだ。以交吟社以外の吟社にも参加を要請していたことは、まだ水府の耳に届いていなかったのかもしれない。「川柳雑誌」創刊号の記事のほとんどは路郎の手になるものであり、雑誌創刊に向けて孤軍奮闘する路郎の姿がうかがえる。

さて、*②の(あの中から二人でも三人でも眞の作家を導き出さなければ結局、自己を引き下げて手を携える事も無意義に終るであらう)は、いつ半文銭が路郎に言った言葉なのだろうか。

「あの中」とは、路郎が指導をしていた「みをつくし」(川柳以交吟社)のメンバーを指すと考えられる。

路郎を「小康」に引き入れるためではなくて、単に半文銭が路郎のことを思っていたとするならば、路郎が「川柳雑誌」を発刊しようとした大正12年の暮れに言ったと考えられなくもないが、三好の本文末尾の(結局路郎君の「小康」入りはおぢやんとした。だから君の路郎君に對する忠告は「小康」へ引張り込まんが爲めの忠告と言へるではないか、其後路郎君が「小康」が休刊された時に(以下略)を見ると、「小康」を出そうとした時に言ったと考えるのが穏当だろう。

大阪市立中央図書館所蔵の「みをつくし」17号(大正12・1・1発行)と18号(大正12・2・1発行)には、路郎の書き込みがある。「川柳雑誌」創刊時の中心メンバーだった竹田蘆穂と吉川唾人についての書き

込みが殊に多い。17号の竹田蘆穂の雑吟五句(下心あつて娘の歌留多とり)(御祝儀をやるに仲居はよくきこへ)(氣の毒と言ひ掛取を又來させ)(紅葉傘此方を見かす行つて終ひ)(女房の智恵で掛取又歸へし)についての書き込みを記しておく。

〈五句、低級な落語家の口になる言葉を句にしたもの或は天保時代の俳文藝的句でこんなのは將來捨てなさい〉(考へて見ると芦穂君は題詠の方が雑吟より飛放れて好い題詠より見て雑吟の至難は誰でもだけれど、一雑吟今少しねられたら以交會の第一人者なり今一息努力なさい。私が評する事の出来ぬ様なられるのはもうすぐです)

「小康」入りを誘われた路郎は、今まで以上に熱心に「みをつくし」の指導をしように思ったに違いない。そして、将来的には川柳の社会進出を目的とする雑誌を出さなくてはならぬと再認識したのではない。将来、社会進出を目的とする雑誌を刊行した時には、今まで川柳に縁のなかった人たちに一から川柳を教えて育てなければならぬ。そのためにも、路郎は「みをつくし」の指導に力をそそいだのではないだろう。(次回に続く)

民族の詩歌 (15)

―人間陶冶の詩

三好 專平

（あなたは美しい）

普通に読めばわからないところのない文章である。しかし、この文章が、どういう状況の下で言われたのか、ということを考えてみると、事は複雑怪奇なことになる。

たとえば、反語になる。美しくないあなた。「なんていやらしい人」と嫉妬に狂った言にもなる。殺したいという意味にもなる。嫌がらせ・憎悪・嫌悪・皮肉・侮辱・礼賛と、さまざまに解釈できる。「善処します」は何もしないことである。

「お前はアホやなあ」と大阪の人が言うとき、たいていは顔面通りにとってはいい。「かわいいやつちや」というぐらいのニュアンスである。人間はもともとスカタンにできているのや。人間みんなチヨボチヨボや。えらいことなんかあれへん。人

間肯定の精神。

英文学者の福原麟太郎（1894～1981）が好きな言葉として「アイ・ラブ・ア・フル」（愚者を愛す）を挙げている。これはチャールズ・ラムの好きだったという言葉である。ラムは、姉の精神が不安定なため、生涯独身だったが、随筆家シェークスピアの研究者として知られる。

川柳は、「うがち・おかしみ・かるみ」の三要素を大切にする文芸である。人間肯定のプラス志向を持つ。人間をうがてば、所詮同じ穴のムジナである。そこに笑いが生じる。どんなつらいことでも軽くイナセル。バナナを踏んでツルツと滑る人を見て思わず笑うのはそのためである。見ている人が傲慢であるわけではない。うぬぼれているとかでもない。川柳はそういう人間の本質に依拠する。北野武が、よくバカとかコノヤローを連発するがこれもアホと同じである。方言には似たような言い回しがたくさんあると思われる。それらがそのまま川柳になると考えていい。何も肩肘を張る必要はない。

麻生路郎が川柳を「人間陶冶の詩」といったのは、人間や社会の真実をまっすぐに見

つめ、隠ぺいすることなく描き出さねばならないといったのである。そうすることによって、人間は人間らしくなる。人間らしい生き方ができる。江戸末期の川柳が、俗に堕ち、だれからも顧みられなくなったようなところから、現代川柳が蘇生したのは、こういう先人たちの努力のおかげであるといっている。再び老人や賢者の玩弄物にはならない。

我々庶民は、決してたくさんお金を持っているわけでもないし、地位や名誉を持っているわけでもない。だからこそ、豊かに生きたい。豊かさは測れるものではない。また、すべてすばらしいものははかれないように思われる。心を、生きる力を支えてくれるような文芸で、川柳はありたい。

俳句を習っていたとき、師の南部憲吉（飯田蛇笏の弟子）が「俳句は何も言わない方がいい」といって「数へ日の大きな茶碗つかみけり」という私の句をほめてくださったことがある。何も言わないというのは、裏返して言えば、すべてを言うことである。川柳の極意も同じところにあるにちがいない。

人生について思う事

堂上泰女

私は、小中高と、やや緑の多い片田舎でそれこそ平和に、平凡に暮らしてきました。大学時代は、叔父の家に居候し、少なからず気を使いましたが、四年生の時は、下宿も許され楽しい青春期を送れました。

卒業後、家を離れ、他府県に就職し、四年間、今にして思えば、色々な苦難に会い一番自己練磨の時期であつたと、感謝しています。あの時があつてこそ、今の自分が形成されたと、思います。生活一切を自分でやり、子の面倒を見る中学教師は楽しくもあり、心の負担でもありませんでした。

青年団に属し、アルプスへ登ったり、ワンダーフォーゲルに参加したり、楽しい日々の反面孤独にもさいなまれました。里の兄が様子を見に来てくれた時、車を

追って涙した程です。

下宿で友達も出来食事と一緒に出かけ楽しい反面、個々に抱えている苦悩も浮き彫りになって、若く澁刺とした時代でも、生きてゆくって大変だなと思ひました。

四年間、先輩や同輩に助けられて、やつと過しましたが、下宿の孤独生活が嫌で両親のいる和歌山に帰り、結婚しましたが、子供を保育園に預け、日々、綱渡りの生活でした。子供が病氣した時、眠らずの看病で仕事に出たものです。授業中に入院の子の心配で涙が滲んできたのを生徒が気付き、「僕等あんばい自習してるから、先生帰ってみて上げて」といつてくれた優しい子の顔は今もくっきり浮かんで来て、「あの子、きつと幸せになっているだろう」と想像しています。人々を思いやる優しい子はきつと幸せになれる筈です。

それで私も可愛い子には旅をさせろで高卒以来息子を旅に出したままですが、良いパートナーを選び幸せにしています。お嫁さんはお世辞も言わず裏表のない愛情に満ちた方で、子の目には狂いはなかつ

たと、我が子を信じてきた事に今さらながら、感動をしています。

就職難の生きにくい昨今、生きてゆくって大変な事ですが、自分を信じ、こつこつと積み上げ、建設的に生きていきたいものです。時には思いがけない積み木崩しにも出会いますが、めげずにがんばりたいと思います。

折れそうになった時、支えてくれる友、信頼できる幾人かの友、父母はもう死んだけれど、その代り二人の子等夫婦、孫とみんな心を支えてくれます。お隣のおばあちゃんだつて心を支えてくれます。温かい心ある優しい人達ばかりです。

門前に小学校が在りますが、先生はじめ給食を配布するおじさんも子供好きでとても心が癒されます。青虫観察に出たこられた先生の誠実なお人柄、生徒の人權を大切にした、偉ぶらない物言い、こういう所から生徒さんの心が育っていくのだと実感しました。

日本の未来に幸あれ。孫達の未来に幸あれ。子供達の未来に幸あれ。祈るのみです。

最後に川柳塔の皆々様方に幸あれ。

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年10月に表彰する。
- ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
- ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を受賞しない。
- ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には受賞しない。
- ⑤ 六賞の選考委員は、その任期中は賞の対象としない。
- ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、下記の通り定める。
- ⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
- ⑧ 檸檬賞は二名の選者がそれぞれ5句ずつ選出した10句中から主幹が決定するものとする。
- ⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、常任理事会の委嘱を受けた選者が受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。

(備考)

この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成二十四年から実施するものとする。

一賞選考規定

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選者は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長とする。各賞15編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席(5点)、第二席(4点)、第三席(3点)、第四席(2点)、第五席(1点)の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 主幹・理事長
地方関係 〔4〕Ⅱブロック (11) Ⅱ選者数
〔東日本〕 (2) 北海道 東北・関東・信越・北陸・東海
〔近畿A〕 (4) 大阪
〔近畿B〕 (2) 滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山
〔西日本〕 (3) 中国・四国・九州・沖縄・海外
- ⑤ 地方関係の選者は、適宜交代制を取り、均衡をはかることにする。
合計13名
川柳塔欄・水煙抄欄に6ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

平成二十五年度二賞選考委員

第一次選者（七名）

小島 蘭幸・西出 楓楽・川上 大輪・新家 完司
河内 月子・木本 朱夏・鶴田 遠野

第二次選者（十三名）

本社関係（二名）

小島 蘭幸・西出 楓楽

地方関係【4】Ⅱブロック（11）Ⅱ選者数

【東日本】（2）北海道・東北・関東・信越・北陸・東海

早川 遡行・三浦 強一

【近畿A】（4）大阪

水野 黒兎・宮西 弥生・村上 玄也・山本希久子

【近畿B】（2）滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山

西口いわゑ・三宅 保州

【西日本】（3）中国・四国・九州・沖縄・海外

竹治ちかし・牧野 芳光・川崎ひかり

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選
択して応募下さい。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔
賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間
違いのないようにお願いします。

平成二十五年度各賞選者

愛染帖賞 新家 完司

檸檬賞 奥田みつ子 森山 盛桜

一路賞 北野 哲男 小川てるみ

各地柳壇賞 太田 昭 政岡未延子

兼題「供」

太田扶美代選

オアシスもシェルターもある子供部屋
外遊へお供が少し多過ぎる
きびだんごたった一つで鬼退治

兼題「這う」

西川 無限選

富士山の供艶やかな三保の松
仮設へもSPしかりつて行く
お供えの一品だけは好物に哲夫
正和
月子
寿子
大子
希久子
美羽
郁夫
和夫
瑠美子
まつお
朝子
蕉子
紀乃
完司
富美子
哲子
浩子
希久子
朱夏
隆彦
見清
千代
遠野准一
勝弘
賢子
いさお
朝子
セツ子
たもつ
あきこ
わこ
完司
楓楽グキブリが這ったと妻の関の声
欲のため這いずっている生き地獄
這うでも飲みに来いよと言ふ見舞い
路郎忌だ這うでも行く句会場
這うでも一目逢いたい人がいる
這い上がる根性くれた父の喝
這うでも君の葬儀は見届けろ
やっこさ妻のパンチで這い上がる
這うでもいつて行きます三三次会
虫這う男がいつも横にいる
無我夢中這いつくばって生きた自負
どん底を這うて掴んだ宝物
真夜中の電話に重い空気這う
気にするなミミズの這った字も個性
這い上がる二軍選手のド根性
泥臭さ身上にして這い上がる
這うでも逢いたい人は黄泉の国
這うように登った八十歳の意地
清貧に生きて地を這うすべを知る
這い這いが出来たと娘からメール
グキブリが這うとみんなが立ち上がる
スランプの危機を脱して這い上がる
這い上がり今を盛りと蟬しぐれ准一
英旺
哲男
克己
月子
アキ
郁夫
たもつ
万紗子
敏治
郁夫
浩子
朋月
誠一
則彦
靖博
好初物をお供え頂く事にする
孫のお供でバァバ公園デビューする
通院のお供に眼鏡文庫本
相手には不足なですお供する
供述がころころ変わるシャツの紅
相愛の犬が黙って付いてくる
おにぎりはお供をすればくれますか
粗供養が二つ忘れてある屋台
いつだつてお供のようなカスミ草
お供にはスマホが良いと桃太郎
付き人のように夫に従いて行く
生前の供養每晚飲んでいる
おほほほ私の供は論吉です
お供して今日は歌舞伎座アウイナ
キビ団子くらいでお供できません
孤独な人お供いっぱい連れている
心細い夜は蛍を道連れに
子供らの発想翼ついている
零戦になった供出の鉄瓶
米国のお供そろそろ独り立ち
散歩の老母へお供という名の介護ありがたく大師のお供する遍路
沈む船お供できぬと離党する
路郎忌へ命ある句をお供えんか
あなたの残像を一期の供とする
わたくしのお供はいつも針のない時計
お供えをケチると軋むお仏壇
後悔と懺悔を供に生きている
佳准一
勝弘
賢子
いさお
朝子
セツ子
たもつ
あきこ
わこ
完司
楓楽グキブリが這ったと妻の関の声
欲のため這いずっている生き地獄
這うでも飲みに来いよと言ふ見舞い
路郎忌だ這うでも行く句会場
這うでも一目逢いたい人がいる
這い上がる根性くれた父の喝
這うでも君の葬儀は見届けろ
やっこさ妻のパンチで這い上がる
這うでもいつて行きます三三次会
虫這う男がいつも横にいる
無我夢中這いつくばって生きた自負
どん底を這うて掴んだ宝物
真夜中の電話に重い空気這う
気にするなミミズの這った字も個性
這い上がる二軍選手のド根性
泥臭さ身上にして這い上がる
這うでも逢いたい人は黄泉の国
這うように登った八十歳の意地
清貧に生きて地を這うすべを知る
這い這いが出来たと娘からメール
グキブリが這うとみんなが立ち上がる
スランプの危機を脱して這い上がる
這い上がり今を盛りと蟬しぐれ准一
英旺
哲男
克己
月子
アキ
郁夫
たもつ
万紗子
敏治
郁夫
浩子
朋月
誠一
則彦
靖博
好

地を這った苦勞あつての今の幸
這い這いの時から育つ好奇心
這つても出席すると喜ばす

能子
久美子

地べた這う蟻は身の程知つてゐる
這つてもゴールを目指すど根性
身のたけを生きて地を這う虫である

正雄
たもつ

底辺を這つてチャンスを狙つてゐる
ミミズが這つたような文字ねと笑われる
根のうに這うて大事な役担う

明子
好月

ジェラシーが胸のあたりを這いまわる
ほふく前進うまく懐もぐり込む
生きるため這いつくばつていた昭和

扶美代
靖鬼

這い上がる隙間教える仏さま

武彦
公誠

佳

加お里
アキ

どんな底を這つて神さま仏さま
なめくじの這うた跡だね涙だね
どうしようもなくわたくしに這う猜疑心

あきこ
朝子

這い上がる氣力へ一条のひかり
ジッと見てようあの子はきつと這い上がる

ばつは

人

あきこ

いつまでも哀が這うから髪を切る

あきこ

地

完司

這つても進む十七音の道

完司

天

保州

四つ這いになれる氣がする森の中
情念のとりことなつて闇を這う

保州

兼題「ポトリ」

松原

壽子選

絶対に泣かぬときめていたポトリ

朝子

夏椿ポトリと落ちた恋の闇

楓

昨日のことポトリと記憶から欠ける

黒兎

続編を覗くとポトリポトリポトリ

アキ

蛇口からポトリ本音を聞かされる

美羽

源流のポトリ集めて母の海

壽之

句想練る雨のトレモロ聴きながら

いさお

一滴の雫大河となる命

好

レモン一滴紅茶の顔がひき締まる

靖鬼

ついポトリ洩らしてからの敵味方

(久)千代

叶うなら椿の花の終わる方

かずお

せつかくの決意も鈍る雨ポトリ

能子

夢ポトリ大地に深く消えてゆく

幸泉

真つ直ぐに人を愛してポトリ逝く

たもつ

思惑を見透かされてる水の音

柳弘

九回裏名手の手からああポトリ

多恵子

水源のポトリが束になる大河

公誠

絶頂へポトリ辛辣な批評

黒兎

ラリレロ片仮名ポトリ零れ落ち

勝弘

あの世からポトリ返信ハガキ来る

保州

一粒の涙がポトリ仲直り

美羽

雨垂れがポトリとなつてやがて虹

萬紗子

ポトリポトリショパンの調べ森の雨

隆彦

反論の厳しさ汗がポトリと落ち

美智子

ポトリポトリ未来へ繋ぐ種をまく

美龍

わたくしを絞るとポトリポトリ酒

完司

水百選ポトリと雫する命

弥生

幸せな蛙に紫陽花のしずく

求芽

ひからびた花は恵みの雨を待つ

賢子

真夜中のポトリ蛇口が風邪を引く

朱夏

逢うて来た傘のしずくが抱く余韻

紀乃

わたくしの蛇口を洩れるのは哀か

あきこ

末席で野心ポトリとこころげ落ち

まつお

ポケットからポトリと落ちた証拠品

紀子

涙ポトリどつとくやしき堰を切る

美智代

女の人の雫す涙に負けている

かずお

雫する樹だ母さんのような樹だ

眞理子

饒舌がポトリポトリと罪雫す

たもつ

一滴のコロンで男朝を決め

多恵子

汗ポトリまさにいのちのひとしずく

たもつ

百歳の言葉心にポトリ染み

セツ子

汗ポトリまことにいのちのひとしずく

たもつ

ポトリポトリいつまで漏れる放射能

直樹

点滴へ命繋いでいる祈り

たもつ

兼題「仕掛け」

岩田

明子選

再稼働タネも仕掛けもありそんな仕掛け花火闇のひとつき手握る先ず仕掛け後は選挙が済んでから甘かったよく飛ぶ球という仕掛け喫煙で停職人件費を浮かす一票の裏からキナ臭い仕掛けバースデーケーキの中にある仕掛け断りの靴を綺麗に揃えられ重荷から解放ノラという仕掛け着こなしした黒は仕掛けを秘めている金溜める仕掛けどつかないものか肩揉み券増やし待ってる遊園地ぜひ一度体験したい色仕掛け仕掛けとも知らずに落ちた蟻地獄目の醒めぬように蛸壺引き上げる人を釣る糸一本にある仕掛け速度違反しかけたワナに引っ掛かる嘆いても神の仕掛けに逆らえぬ異であれ君の仕掛けは皆食べる愛らしく恋を仕掛ける猫の爪色仕掛けかかった男嬉しそうハンカチを配り羽根布団を買わず種明かし見ていた鳩が戻らないお魚と知恵の格闘する仕掛け

正和 紀華 正和 紀華 浩子 紀雄 正和 紀雄 完次 蘭幸 ばっは 和夫 たもつ 郁夫 由一 朝子 靖鬼 弘風 求芽 堅坊 朱夏 好文 賢子 無限 見清

札束の仕掛けに踊る人の欲ライバルが仕掛けた罠に引っかかるせつかな鮎を疑似餌があど笑うプロポーズ仕掛けが少し遅過ぎたちよこざいなと蛸が笑ったタコの壺仏壇のかくし扉にへそくりが仕掛けなどない母さんの握り飯誰の仕掛けか割り切れぬ人事わたしという仕掛け花火が爆ぜている仕掛けないアジサイまさに熟女です盃の底に小さな穴一つ大福が仕掛けた甘いあまい罠この辺で仕掛けなさいよ男なら佳

敏治 光久 好 政男 真理子 蕉子 郁夫 多恵子 あきこ 日の出 久美子 まつお 武彦 久美子 セツ子 富子 哲夫 耕治 まつお まつお 保州 扶美代

五つ六つ歳をサバ読む定期券程度の差こそあれ誰もみな詩人自分史に書ける程度の過去をもつほほみんな中流だった良き昭和酒五勺まで許してくれる糖衣錠寅さんの失恋ほどの恋でした八幡宮小銭程度の頼み事何とかなる程度で女城守る地獄からさらに突き落とされた株隔世遺伝孫はとびきり出来がいいその程度ですかあなたの命がけ申し訳程度節電しています身の丈に合わせ車は軽にする苦しまぬ程度に恋はしていた日本史はマンガで学ぶ程度です手加減があった昔の子のケンカ老いらくの恋も豚マンも程々ある程度と言えはお察し下さいなほどほどに泣いた笑った生き抜いた私の広い牧場で放し飼いな程々にしとく夫婦の無言劇火のような父を手づかみ出来る母褒めるにも程度があると叱られる記憶とはそんな程度を目撃者ある程度分かれれば読んだことにする

哲男 楓楽 紀華 篤 哲夫 朋月 まつお 弥生 雅明 直樹 富美子 まつお 宏造 瑠美子 一步 茂 淑子 則彦 ヨシエ 奏子 明子 奏子 見清 保州 一步

兼題「程度」

小島

蘭幸選

或る程度のめる体力ある至福
近所では軽く挨拶する程度

天邪鬼肚のどこかに住まわせる

河童の皿程度の自負は持っている

越えられる程度に神が出す試験

縛らない程度の愛を下さいね

人のいいのも程度のもです茄子の花

身のほどを半歩踏み出したくて読む

この程度の傷はジョークでも治る

母さんは叱る程度を知っていた

好き勝手暮しの程度言えませんが

身の程を悟る淑女のおちょぼ口

佳

身辺整理どこまですれば良いですか

思い出し笑いはほどほどの幸せ

ふふふふこんな嘘なら許します

おみくじの末吉ほどの気やすめで

偏差値の程で人間計れない

人

この程度にしとく自分を責めるのは

地

ピンセットで抓む程度の恋でした

天

常識の程度に紙ヒコーキを飛ばす

軸

スマホくるくる程度がわからなくなつた

唯教

光久

靖鬼

完次

茂

哲子

俣子

真理子

扶美代

黒兎

美智子

柳弘

アキ

恵

わこ

朱夏

浩子

真理子

万紗子

句会 燦 燦

6月句会を読む

子 博 賀 芳

短足で重心低く倒れない

忠 昭

どつしりと安定感。多少のことではビクともしない。なあんでおつしやるこんな方の背中ほど、ちゃんと指先でつついてみたくなる。

夫には浴びせ倒して勝ちました

恵

出ました、必殺「浴びせ倒し」の技。夫はもう息も絶え絶えにリング上でのびている。今度こそ懲りたはず、と妻が高らかに勝利宣言しているスキに、あらら、どこへ消えてしまわれた。たぶんいつもの居酒屋かな。

微生える程もちました六十年

欣 子

こちらは穏やかだ。「もちました」を妻は安堵と読む。夫婦で過ごした六十年。どんな夫婦にも微は付き物といえ、生える時期はさまざま。五年、十年、二十年と節目を乗り越え、金婚式も過ぎてからの微は、もはや雨後の苔のように美しい。

風鈴を吊って小さなクールビズ

政 男

粋なご提案だなあ。お気に入りの風鈴を吊ってわが家流のクールビズ。流行りのステテコファッションと組み合わせれば、なにこともスイスイ涼やかにはかどること請け合い。

カラオケにそれきり誘ってください

弘 一

なぜと考えていたら別の兼題に同じ作者の次の句が。(カラオケ2番いつも割り込む癖がある、その朗朗たる2番を聞きたい。

人間ですごい泣いたあと笑う

真理子

まさに「すごい」の一語に尽きる。そしてこの頼もしい笑顔とともに本欄の担当をバトンタッチ。たくさん佳句と向き合わせていただいた半年間、ありがとうございました。

わさけ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

忘れ物チエックうるさい休み明け
休み明けきょうもあくびで夜が明けた
ぼつとしたうちの亭主の休み明け
休み明け怠け心が目をさます
孫帰る夫婦喧嘩も休み明け
休み明け洗濯物の花ざかり
ガツガツとするな残りに福がある
ガツガツとせずに普通に生きている
ガツガツと食べてた戦後ふと思う
ガツガツと作り甲斐ある食べっぷり
ガツガツと食べなくていい平和な世
ブライドの芽がガツガツを許さない
心ない噂ガツガツからみつく
歯は無いがガツガツ夢は食べられる
青虫のようにガツガツ春を食う
妻に勝つ神通力が欲しいなあ
子を背負う力が減ってまいるい背な

義人 久芽代 勝憲 悦子 滋 美知江 玲坊 陽之助 和子 美佐枝 美美子 美千千 道子 三津子 清 みち子

一馬力で来た嫁今は十馬力
へなちょこな力も時に助け舟
震災で絆が見せた底力
力抜く事を覚えて卒寿行く

微力だとけんそんなすが目が笑う
終わるのをみんな待ってる歌唱力
消しゴムが動き始めた記憶力
食欲は入れ歯に力借りていてる

止められぬ諦めきれぬ原子力
消したのに時々痛む恋の傷
自分史の消したい過去に値をつける

消えかけた窓がくすぶるおぼろ月
邪魔者を消して楽しい三次会
邪心消し生きる力をたぎらせる

生れたら消える運命のシャボン玉
わが人生ちよつと消したいほかした
人間の匂いを消して神になる

窓越しの夕陽に心煌めいた
夕焼へばつと鉄を片付ける
夕焼の嬉しい明日のリユックサック

夕焼に染まり読んでる母の文
夕やけも封書に入れて出す手紙
夕焼けがにんげんの業つつみ込む

旅の子を思い母の折り知る
祈る事忘れた日々のシャボン玉
安楽死そんな折りも時にする

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

重利 玲子 玲子 節子 泰山 紀の治 龍枝 芳光 石花菜 耕治 野蒜 美代子 重忠 照彦 公恵 貴恵 紀美恵

ひとつ折るとひとつ安心するようだ
礼拝堂神は赦して下さるよ
折鶴も辛い折りはもう止そう
新緑がアベノミクスを盛り上げる

幸せになりたい緑色コート
それは滴となつて命を生む緑
無意識につかむエンピツ緑色
懐メロを聴くと私の芽も緑

緑の地球孫とどんでんぐり植えてる
思い切り転んで明日が見えてくる
特売の広告気にする主婦になる

道の駅どれも採れたて主張する
らつきよバリバリ明日へ挑む音で食べ
どんな夢みてるの寝顔しかめ面

頑張れと背中を押してくれた君
春の風たしかに私生きている
和歌山三幸川柳会

八相の鐘の音色と歩む明日
懐に入れば毛虫でも庇う
棺桶に入れるようにダイエツト

レモン一個入れて憎しみ相らげる
入口で躓く癖が直らない
スイッチが入ったままの水すまし

妥協して入れれば鬼の巣も温い
しなやかに生きたし人の輪に入る
一瞬の閃きどこに入れようか

何もかも入れて翔びたい乱れ箱
孝子 菜摘 幹子 准一 宏夫 美智代 かず子 稔 碧報

蘭恵 輝風 静美 汎美 千代美 笑子 半徳 白狐 淑子 厚子 歩美 栄香 比呂子 史子 千枝 一路

性格の良さを買われて婿養子
本題にやっと入るか長話

義雄
みね

入門書の前で止まっている多趣味
煙幕を張っても透ける下心

義泰
高夫

炭を焼く煙の匂い継ぐ茶髪
汽車ボツボツ煙絵になる歌になる

町子
昇

大気汚染テレビ観る度出るくしやみ
躰きもせずに百足が歩いてる

美枝子
和子

長居せぬ桜の花は利口かも
利口ではないが上手に舵を取る

順一
昭枝

お利口と言われお預けまだ続く
為政者に賢いなどとはめられる

ダン吉
次根

一粒の種が利口に実を結ぶ
生き様を時世に合わす利口者

元三
絹子

利口ぶる男のタイが歪んでる
馬鹿になることも利口のうちである

章子
保州

いい人が逃げてしまった高望み
反省する度にブライド欠けていく

典子
富子

一日の反省あたまた下げておく
反省をしたか視線が柔らかい

美羽
碧

一言が反省の種まいてる
あの時になんで気付いてやれなんだ

当代
ひろ子

断捨離をします遺影を裏向けて
反省と希望をつなぎ新緑へ

起世子
正治

川柳クラブわたの花(大阪) 寺川はじむ報

優等生と言われ久しい卵の値

宏

天国への誘いもうちよいお断り
悲しみは時代と共に忘却へ

和子
栄美子

焼鳥の食欲誘う古のれん
五分五分の手術根性試される

孝子
愛子

東北の記憶をつなぐ松林
大根が人間魂見上げてる

博子
妙子

時代越えあるがままと生きる日日
来てはいいやほしくない誕生日

節子
かなえ

薄味に慣らされ今やこれでよし
ひよつとして詐欺かも知れぬ深呼吸

明美
美代子

よく耐えた慰め合える仲の良さ
空と海青さに解けるわだかまり

耀一
義明

誰だっけマスク同士のあいさつ
家族葬時代の風に乗るとする

浩三
俊子

郷愁を誘う楽しい国訛り
バブル期を惜しんで懐かしむ財布

一風
はじむ

川柳塔まつえ吟社(島根)相見

柳歩報

優勝の旗が笑顔でゆれている
逆風へ老いの白旗など揚げぬ

町紅
浜丘

ライバルを誉めて芝居の旗上げる
日の丸の旗には重い枷がある

ちえこ
雪代

勝利への風呼び込んだ応援旗
旗揚げの野心を秘めて風を待つ

左余
玲子

いつまでも大きな旗でいてあげる
原爆忌日の丸に巻く黒い布

ゆき
幸子

沢山の名刺余して退職日

たけし

三浦強一選

朝子

恥かいてかいて人間らしくなる
生きるとは数えきれないさようなら

智三

小言にも少し愛などトツピング
胸張ろう落した財布戻る国

公誠

ひと言にたつぷり塩が効いている
出来たての命おなかを蹴ってくる

美代子

勝負まだ捨ててはいない首の皮
人間で満足今日もよう笑ろた

桂子

来年も生きよと予定もつる
飾らない人だ話してみたくなる

大気

佳句地十選

(7月号から)

山本義子選

朝子

恥かいてかいて人間らしくなる
極楽へ行って見たいが帰れるか

紀美恵

うかつにも出口にあった落とし穴
いささかも恥じることない足の裏

桂子

ひと言にたつぷり塩が効いている
エゴのある間は命保証する

章司

いたすらする瞳の輝きを見ましたか
賞味期限とくに過ぎる玉手箱

一瑤

こんやくになるまで絞る石頭
かかると受けた役目に縛られる

石花菜

キミ

余るのは疲れストレス飲み薬
企みが最中の中で発酵す

梅干しを甘く煮るのは失礼だ
飴玉をなめてしまった共犯者

甘さ控え目看板にする菓子どころ
甘いもの盛るとニコニコする器

ささやいた愛を繋いで共白髪
甘いもの食べて癒され毒になる

パパ族の娘に甘い送迎車
自分史にそつと加える甘味料

エンディングノートは白いまがよい
ノートにはうれしい記憶だけ書こう

書き物の定番今はスマホです
ノートからはらり万札舞い落ちる

ノートから飛び出してくる青い春
真つ新なノートに記す一行目

尼寺のノートを軽く読み流す
唸り声役に立つて家のポチ

唸り声上げて沈んでいく夕日
唸つても反対廻りせぬ時計

やつてやる低く唸って決意する
松露川柳会(鳥取)

山本 正光報

久松 久松

花見酒三角四角丸くする

清 華

浜釣りに韓国のごみ引つかり

蟹 郎

こつこつとタンス貯金も羽根が生え
通帳をながめにつこりおじいちゃん

出不精になってさびしい老の靴
サンダルに足も涼やか夏の靴

スマートな靴がはきたくダイエット
お出かけへ靴を磨けば心急ぐ

和 代

草 庵

寿 代

桂 子

注 湖

久 枝

久 絵

輝 山

幸 代

美 智

芳 山

青 帆

柳 歩

知 恵

千 里

博 子

長 吉

靴紐を締めて登ろう老いの坂
夫と子の靴音違う妻の耳

オンボロの靴が馴染んで捨てられず
ビカビカの靴で並んだ入社式

富 柳 会(大阪)

古 田 千華報

単線の車窓へふわり春の精
カウンターの美女の隣が空いている

グメンネの機会逃して臍を喰む
どん底の薬一本がワンチャンス

厚化粧して四帖半丸く掃く
お付き合い線を引いたり外したり

四角な面ぬいで仏の座に眠る
迷妄の世界流転する輪廻

空耳か妻のハミング春うらら
揺れ乍ら直線保つ正義心

切なさで薄れるまでをスクワット
散れば咲く私めげないサルスベリ

捨て石が昼寝しなが待つチャンス
今は句黒と赤とを着換えよう

袖の下ぐらいで崩れない四角
村人の命を繋ぐ路線バス

ひび割れが走ったあの時の会話
直線のまなざし心射られた日

深い桜は女だと思ふ
生き方が違う四角のままでいる

そうでした杉に会ったあの日から
自画像の中に未来の太い線

和 子

静 江

鈴 枝

正 光

雄 々

奏 子

武 人

高 鷲

寿 之

佳 子

柳 子

晴 美

壽 峰

彦 次

慶 子

ア キ

千 華

この一線なにが何でも譲れない
湧き水を生命線に吸らせる

紅いろに遠く生きてる雪中花
川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

まだ生きているつもり鷲峯山のほり
晩学の横で見守る電子辞書

シンプル癒しの庭に椅子ふたつ
庭の木が過去の繁栄示してる

裏庭の隅が気性に合っている
家の庭花とめだかの癒し系

亡母に逢う旅なら一度してみたい
今日を寝る蛙の声の旅枕

別れずにずっと旦那の尻拭い
狭い土地せめて心に広い庭

一徹な旦那も涙もろくなる
老いた身と張り合っている庭の草

旅はどうかえ足腰にきている
へそくりは旦那が知らぬ宝物

介護してはいたくまでは旦那面
入婚の旦那で猫になっている

浜釣りに韓国のごみ引つかり
ゴミ捨てと庭の手入れの定年後

値切るのも旅の楽しみ土産買う
浜釣りに男口ロマンを追っている

旦那寺で法事も出来ぬ不況風
この手では掴みきれない旅模様

還暦で思い出作り旅をする
海外の旅あの人とこの人と

和 子

七 朗

常 男

森 子

茶 子

弘 子

盛 桜

咲 和

茶 子

小 鹿

孔 美

照 彦

八 重

か お

富 久

実 満

完 司

宣 子

蟹 郎

い さ

満 子

彩 子

惣 子

す み

露 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

和 子

定年になった旦那が邪魔になり
一枚の鱗おとして旅の宿
坊ちゃん育ち商法知らぬ旦那です
浄土から旦那が戻る筈がない

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

一粹報

擬似鉤へ文句たれては高軒

お掃りの幸せ手弁当の空

消去法で最後残ったのがあなた

散々に文句たれては高軒

カッとした蛇蝎の尻尾良く喋る

海風ぐとわたしの愛も芽生え出す

手弁当広げ一家の田植え歌

扶養家族ずつしり重い手弁当

全身をこたらかしつづききのびる

次の世へ皆んな行くんだ慌てまい

手弁当持つて只今家出中

こたらかす事も覚えて介護する

急がして箸が無かった手弁当

文句たれ貴方は隅に居ておくれ

こたらかしこたらかし解くもつれ糸

若いねと言われ背すじをピンと張り

手弁当を作つて呉れる妻拝む

ヘアカッターカッターするほど髪がない

慰安婦をなめるとひどいめにあうぞ

母の味教えてくれた手弁当

文句たれ文句言わずにいられない

末座から手を上げている文句たれ

明日あると思うな今を頑張るぞ

美代子

美ツ千

くに子

はるお

洋々

美恵子

無限

凱柳

地佳平

とも湖

金祥

一瑤

圭一郎

妻子

回春子

あしび

蟹郎

一京

節子

雅女

茂登子

房江

清信

昌鼓

美佐枝

秋月

弘康

飲み込んだ我慢きり胃が痛む
生きている価値探す日々百二十才
縄のれん隅におります文句たれ
文句たれ逃げ道だけは知っていた
向う意気強いだけです文句たれ
文句たれ確かに理屈合っている
どれカッターすれば生活楽になる
市庁舎先が見えぬと文句たれ
手弁当箸を忘れてベンで食う
カッターして坊主はお経よんでいる
初デートそつと差し出す手弁当
死火山になって静かな文句たれ

南大阪川柳会

津守

柳伸報

労働の尊さ父の背が教える

輪転機フル稼働して株騰げる

首長ならテレビに出て勤務中

朝の駅企業戦士は皆無口

定年後主婦の仕事はまかされる

ヘルメット被りバリバリ五十代

仕事人間家族の輪から外される

ハローワークで仕事見つけるのが仕事

業績はトップやる気のひとつなり

時給いくらでわたしの時間売りに出す

花の手入れするのが母の持ち仕事

いい仕事してると敵を褒めておく

定年のないおふくろの割烹着

残業のあと居酒屋へフルコース

駅長のタマは終日寝る仕事

春名

惣子

振作

葛子

行男

善夫

はつ江

孝二

虎尾

重忠

享一

粹

一粹

祥昭

和雄

勝弘

たもつ

秀子

柳右子

恭昌

庸佑

修

紀乃

シマ子

郁夫

柳弘

なぎさ

清

仕事する男の顔にある誇り
職人の誠意を尽くす音がする
手に職があつて不況を泳ぎ抜く
自惚れをボキボキ折つて丸くなれ
ボキボキと流儀に添わず花ばさみ
パーティーのドレス華やか顔は地味
峠越す命の尊さ眩しすぎ
亡き祖母の愛を眩しく思い出す
太陽がやたら眩しい二日酔い
眩しさと競演しての水澄まし
眩しと言われ嬉しい水澄まし
花嫁が眩しい父の目に涙
80歳の快挙眩しいエベレスト
時間いっぱい粘っていますバイキング
凡フライボトリ夕陽が目に入る
句読点打つて昨日を切り捨てる
八十の快挙夢引き寄せる意志

川柳塔みちのく(青森)小寺

花叢報

桜咲く淡い色香が君つつむ

ひと想う初恋の色淡い虹

弁解無用はくは男だ生一本

きつぱりと金策断る不精ひげ

鮮やかな線香花火です私

子の巣立ち淡い期待が送り出す

淡い恋まだ夢見ている金魚

背伸びして生きた背中が笑つて

きつぱりと言えず嫁いで玉の輿

八十路淡い夕日に染まつて

一步

弘子

楓楽

忠昭

志華子

あさ子

更紗

ルイ子

昌紀

正春

典子

克己

柳伸

あや子

栄子

集一

直子

一湖

小とみ

吞舟

つとむ

龍馬

きよし

ひとし

洋子

初江

美鈴

最後まで笑顔忘れず残ります
反抗の瞳が涙をひた隠す

深い誤解も聞いてよ貴方だけ
日本語に訳すと余計ややこしい

言ひ訳は要らぬ午後から雨になる
誤りのりんご黙って籠の中

言ひ訳のつづきは明日考える
誤は後先ずは泣く子を抱きしめる

人形は汚れの涙を語らない
ばらばらを束ねる君の手腕買う

ばらばらで妥当に見てる世間の目
先ず群れをばらばらにして襲う獅子

収拾がつかなくなった会議室
の外れそれでも狙い続けている

平和というのを外して何とする
試し打ちだから気軽に的外す

川柳茶はしら(愛知)

関本かつ子報

確りと前見ていてもゴツンコ

還暦を過ぎたら平気赤い服

中立の立場で空気読んでる

中日が負けてる暇でしょうがない

玉の汗からだのくばみつたり落ち

人類に支配されない空模様

カーナビも勘ねてゐるのか遠回り

川柳塔きやらぼく(鳥取)大塚

恵子報

眼科歯科耳鼻科と予約して通う

蘭

克子

寿子

佐一

大輪

徑子

秀子

英子

よしこ

小雪

富美子

泰女

愿

紀久子

ほのか

保州

紀子

遡行

まみ子

美千代

幸子

雅美

百合

かつ子

おかつば頭の私を映す古い井戸
今朝も又鳥に起され目がさめる

日没の影あちこちと忙しい
ほんこつ車切り替え時に情が湧く

今のところ天気予報は神である
なぜなぜと兎の返答に疲れます

星のとし地球の寿命人のとし
ありがたや亡父と一緒に白髪だ

思うまい今夜ねむればあすになる
花粉症身も心も儘ならず

ほたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

雨だから文士気取りで本を読む
浅からぬ御縁あの日も雨でした

雨宿り優しい人と二人傘
久々の雨に庭木とほつとする

雨音に眠れぬ一夜夫不在
梅雨と夏乗り切るのだと言ひ聞かせ

長雨の鬱を晴らして虹が立つ
苦しいが三回食事出来ている

苦心談自慢に化ける酒の席
サンセット惜しみぐんぐん伸びる影

ぐんぐんと空気を裂いて宇宙まで
若さでぐんぐん伸びる脚も背も

苦瓜がぐんぐん伸びるエゴの夏
つくしんぼぐんぐん伸びてハカマ脱ぐ

命ぐんぐん伸びて福祉が追いつかぬ
お試しに父は惚れてる育毛剤

瑞枝

亜弥

喜周

鶴子

千代

麗

寿々子

恵子

ゆき

初枝

正子

久子

長一

桂子

順子

郁子

黒兎

信男

勝

幹治

正代

美智代

春代

純子

扶美代

年相応惚れた女性が変わる
年の功悩みをさばく好い加減

川柳同好会みらい(鳥取)吉田

陽子報

笑顔しか浮かんでこない悔み欄
ありがとう誰にも言える老いになる

老い二人言葉の刺は切りおとす
新しい靴馴染むまで履き続け

結婚は一度恋なら何度でも
原発が足枷となり霧晴れぬ

ぶつくりと切れた輪ゴムの自己主張
まだ解けぬ自分で書いた走り書き

汽水域本音が言えず立ちつくす
古稀迎え過ぎし日思うしみじみと

足跡へ何を残してきたか問う
仕事場のラジオが腕のリズムとる

ラジオからカレーの匂い漏れて来る
ごめんなさいを言わされて霧晴れる

発表日回転寿司の席がない
それぞれに合うた器の中で生き

気紛れに蹴った石から笑い声
小皿たち箱のまんまで眠ってる

テレビ派のほくも深夜はラジオ族
血を止めてくれた輪ゴムよありがとう

器には合わない野望を持て余す
地球を汚すための一日始まった

スイッチに灯がつく母のほめことは
反骨心輪ゴムで飛ばすほどはある

オスブレイ落とす輪ゴムは買つてある

柳童

康子

みどり

茂子

温子

章子

美恵子

和之

陽子

真帆

葵

かずこ

恵美代

三郎

みち子

信子

敦子

嘉子

安子

薫

慶一

華蓮

一眸

和代

菜美

川柳さざやま(兵庫) 北澤 稠民報

だんだんと歩幅が狭くなる歳に
枯れ山椒一つの己の種育て庭
髭の無いチャップリンなど想定外
悪友のちよつと来いやを待つて出る
行先は図書館の名を言つて出る
照る日曇る日年輪重ぬく夫婦
雪囲い愛のボタンが一二輪
鳥たちの囀りうれし亡夫の墓
介護して亭主関白人れ代わる
忙しいこつちやサツカー見にやならず
17回忌今の気楽さ感謝する
各校の歴史留めて合併へ
とりたての野菜やつぱりおいしいね
生涯を免許証持たず安堵得る
目途ついて肩の荷少し軽くなる

京都塔の会 樹本 宏子報

号砲一発錦着るまで帰らない
心折れはつかり穴があきました
目に青葉高野川を背に吟行会
木漏れ日が宝ヶ池で頬撫ぜた
ドーナツの穴はつかりと子の笑顔
時々ばつかり雲に乗る記憶
暑うなりばつかり穴の空いた跡
そよ風に若葉青葉のファンファーレ
刀傷老舗の誇り保存する
聞き上手やんわり探り入れてくる

久子 美緒子 純子 哲男 稠民 真由 勇 多美子 開子 可住 かほる 幸子 ちかあ 照代 美智子

探られぬように貸金庫に入れる
青紅葉右脳左脳を刺激する
ばつかりと口開け泳ぐ鯉のぼり
再開発どこもよく似た駅になる
口だけの一念発起夢に盛る
想い出の発見があるオモチャ箱
発表会俺の名前がなんでない
ばつかりとハートマークのメール来る
探られて心当りがある弱み
ばつかりと人魚が欠伸したあぶく
つまずいた所が発点だった
スイカトマトばつかり浮いてた夏休み
酌み交わす本音を探る無礼講
ばつかりと背中が割れて脱皮する
句会より森林浴に良い日和
何か探るような目付きは生れつき
探しものひょんなところで見つけ出し
ボランティア自発的だと言う若さ
ぼつかりの穴日にち葉がきいてくる
人生の余白探つて旅に出る
覚えてた景色比叡の裏表
女手の手紙に妻の目を探る
喜寿超えてはつかりばかり好きになり
アラ探し皆な同じと安堵する
もう一度探つてみたい赤い糸

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

はばたいて鳩は静かに雲になる
したたかに生きた男の子守唄

ふりこ 美籠 幸香 耕治 文代 義昭 寛十郎 柳明 すみ子 靖鬼 義子 則彦 啓子 満子 かずお 光子 昭子 葉子 弘之 輝美 英旺 森生 さゆり 弥生 好榮 はるみ

画用紙にほのほとした家族愛
なつかしい友と出会つて声しほる
そのままの君が好きだとプロポーズ
悔しいがはばたく羽根が広がらぬ
人生に泣いて喜ぶ約束も
老境に入る暮しか寺が好き
言いわけはしない僕には空がある

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

統一球コミッシヨナーは黙つてた
あべのハルカスめざせ売上げ日本一
ハルカスを仰ぐ真夏の蟻の列
新聞がスマホに完敗する車内
銃剣に折れぬ魂彬の句
あの人の口を止めてよあの人の
母さんが決めた事だと逆らわず
晩学で溜めたノートに宿る夢
妻と母比べて何時も怒られる
若葉風やさしい言葉かけられる
人住まぬ生家の庭に蜚蜚む
宿かりのとても自由なお引つ越し
瞬間に分身働くカメレオン
許すことばかりで母は小さくなり
生き様の手本が母の背にある
芽出しの葉手に取り明日を考える
遺影から背筋伸ばせと叱る母
一泊は柩で過ごし行くあの世
妻とより同居が長いピロリ駆除

恵美子 澄子 ちよえ かつ子 英子 昌子 清泉 和雄 美智子 敏子 哲男 勝弘 柳弘 信二 忠昭 桃花 たもつ 朝子 見清 すみ子 弥生 いさお 千代 敏治 大気 篤

大きな夢を抱いた若葉が天を突く
お母ちゃん一番耳に心地良い
危機宿すアベノミクスという民話
鍵盤に命宿らせコンチエルト
許しあう瞬間にみる青い空
くつきりと未来が見えた稲光り
リビングの母は何でも知っている
六月の真夏日泳ぐ若葉風
あの時の母の気持が今わかる
若葉風グリーンミラーを聞きながら
散る花が若葉に託す核ない世
ピンチにはどこかで母の声がする
（松）敏子
蟬の羽化カメラ構えてもう三日
口惜しいが母に肉じゃがまだ勝てぬ
冷めたお茶飲み干し母の目にもどる
あかり

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

天才と親は言います奇抜な絵
同じ生きるなら呆れ果てられるまで
ドライブ中気付いた免許不携帯
暗示にはとつても遠い枇杷の種
阿呆やなあ言ってる友の顔が好き
翌日は半値になったこのスーツ
こめかみがピクピク株の上げ下がり
古い殺好きな市長に困ってる
青信号魔女のトリックかも知れぬ
診断後びくびくしつつ結果待つ
百態の雲が奇抜なポーズ見せ
失敗から奇抜な事を思いつく

廣子 一志 直子 堅坊 紀乃 祥昭 信子 たかこ 敏子 秀夫 六点 あかり 五月 かずお いさお 求芽 佐津乃 洋志 倫子 勝弘 郁夫 美智子 義昭 千恵子

さよならを転機にしたらすんだのに
おばちゃんが恥を忘れたミニパンツ
究極の奇抜と思う陽が昇る
その人のドラマも乗せた救急車
土壇場で踏みとどまった底力
母と言う殻を破って赤い服
微調整しながら永久の愛誓う
脱皮するたびに人間丸くなる
良心は売らぬと決めてびくつかぬ
奇抜さが首を痛めた絵画展
懐の論吉に惚れて嫁ぎます
佳い話ひと歩きをして困る
殻脱げばとともやさしい風に会う
饒舌が過ぎると耳が呆れてる
「おばちゃん」を詳しく知った趣味の会
千枚の論吉ぶとんで寝てみたい
いつからか好物みんな妻の味
節電を口実家事をサボってる
満願を果たせば母に遭えますか
人が好きお喋りが好き殻を出す
大阪はあの程度かと恥をかき

川柳大阪

森松まつお報

食べてもたへこんでいますタイエツト
一言で僕をへこます強い妻
へこんだら修正液で立ち直る
人生のへこんだところで四股を踏む
あっぱれな人だ黒子に徹しきる
あっぱれは登頂させたシエルバたち

修風 弘風 たもつ 和夫 満作 榮子 集一 野鶴 一歩 麗仁 典子 朝子 柳弘 堅坊 武彦 賢子 志華子 ルイ子 正 五月 柳弘 五月 柳弘 五月 美龍 勝弘

あっぱれをいっばいあげるIPS
あっぱれな妻の手練で泳ぎ切る
あっぱれと言いたい政治家待ってます
百歳の医者現役で人助け
お見事に的を外して言う議員
あっぱれと言われたことが拠りどころ
王子様連れて出戻る一人娘
富士山さま形崩れず保ってね
父の日は素知らん顔のわが息子
人のいい顔なら公道よく聞かれ
それはそれはやさしい顔をしたいけず
春の顔並べ踏切り楽しそう
恋猫のせしめ顔で朝帰り
こんな顔ですがまつすぐ生きている
七十を過ぎやつと鏡の顔認め
わたしの世界私の彩に染めてます
世界一うるさい嫁も縁はえん
寝ていても儲かるらしい株世界
原発ゼロ仲間広げる世界ある
空想の世界はいつも五月晴れ
何よりも家族の笑顔世界一
憲法がアベノミクスに不都合か
のりしろの幅を抜けてある絆
富士山が世界遺産の顔となり

長柳会(大阪)

坂上

淳司報

陽性と判り出産決めた嫁
愛燦燦何故か儚く辿る詩
生ビールのどから手が出る半夏生

芳香 万紗子 喜楽 鉄心 堅坊 心平 彦太 善純 紀雄 朝風 温子 笑風 柳昌 美花 信醉 一步 美世子 まつお 珠生 司 比呂志 功 淳司 克三 光弘

野良猫の縋る目に負けうちの子に
過ぎたこと収めて欲しい飲む時は
期限切れ見てまた元の冷蔵庫
三叉路で決断出来ず立ち竦む
決断の時は女房の許可がいる
決断が遅くて人の後を追う
ルビコン川渡る決意が顔に充ち
アルバムの中に残した宝物
もて過ぎて伴侶決まらずまだ一人
芯のある愚痴もこぼさぬ妻が好き
雨がほしい嘆いてせがむ田の蛙
別れぎわまたねと軽い嘘をつく
あじさいの藍を集めて初夏に逝く
決断へ背を押して蒼い空
言い過ぎてひと品増やす晩御飯
聞き分けの良過ぎる妻にある不気味
決断は玉虫色の処世術

川柳花の輪(大阪)

岡本

最終回猛打集中逆転打
近づいた孫の足音猫にける
葬儀終え額集めて形見分け
幼稚園バスで園児をかき集め
かあさんの来る気配して門に佇つ
頭垂れ街頭募金子の為と
辛くとも泣いた気配は見せぬ母
孫の来る気配にサイフのぞく爺
ちよつとした気配で判る母の勘
気配すら感じたくない我あるじ

幸子
正子
もこ

マサ

篤

武男

弘光

久美子

けい子

靖博

正博

輝子

和代

孝代

隆彦

芳野

薫報

照好

やすの

勇太朗

敬子

一幸

あや乃

みちる

薫

泰子

陽

収集癖寝る場所もない鬼小屋

岬川柳会(大阪)

八十田洞庵報

克衛

年子

智子

茂平

治

寛

富美子

晴美

覚庵

洋子

令子

和美

雪子

清一

桜琴

洞庵

はびきの市民川柳会(大阪)永田

章司報

普通のくらしずっと続くと思つたに

スタッフにパソコン達者がいてくれる

与謝野晶子の様にはゆかぬ恋心

日曜日のババはバジャマのまま昏れる

噂にもあんなを信じ聞き流す

スタッフは家族だけです町工場

姿を消した愛犬はどこ身を案じ

流れには逆らわないで生きてきた

大津波過去現在を流し去る

ふる里の風やさしくてつい油断

大好きな油断チワワに噛み付かれ

肩で風切つて小石にけつまずく

夏負けを防ぐ食前酒はピンク

夏の声すだれを吊れと言つて来る

天災も油断をすれば人災に

源氏から恋物語延々と

ケセラセラ川の流れに逆らわず

スタッフが守り育てた後継者

下馬評を信じて油断して不覚

犬嫌ひ尻を噛まれてトラウマに

愛犬にも税金かかる国となる

川柳を恋人にしてゆく余生

恋文をすたれさせたはメールの世

サークル檸檬(大阪)

松尾美智代報

ノラ猫に餌あげるのは罪ですか

見て見ない振りが一番重い罪

春の宵妻と遺影を選び合う

罪だとは思つていない天邪鬼

罪人の親玉ならばここにいろ

金残し死んだあとから罪つくり

夫より先に逝くのは罪ですか

胡麻を搾りながら太らせてる絆

埋れ火の目覚めにこころラリレロ

順調に老いたカルテに歩を合わす

おおかには掴んでいるが風まかせ

自分史に消せぬひとりの罪を抱く

指切りを反古にしたのもあれも罪

猿杏

ヨシ枝

喜久子

美喜

悦子

里喜雄

かつ美

登志子

敏

庸佑

光男

久仁子

いさお

章司

房子

昌紀

久仁雄

光久

たもつ

加お里

美智代

扶美代

蕉子

希久子

義子

智恵子

いわゑ

淋しくて紅茶に砂糖入れすぎる 楓 案

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

甘過ぎる話の裏に持つ疑惑 庸 佑

きっぱりとノーを返されほつとする 堅 坊

酒のあて亡妻偲ぶ割烹着 肇

セピア色写真に過去をたぐり寄せ 郁 子

子の寝顔見てほつとする仕舞風呂 比 志

雑談の中に本音を垣間見る 美 佐 子

絵手紙のカンナの朱にもある涙 さらり

雑音に惑わされる弱い意志 健 二

妻ランチお膳にポットカップ麺 幹 治

アベノミクス年金族はあてにせず (永) 玲 子

雑念を掃いて集める座禪堂 歌留多

あてにした老後の夢は夢のまま 武 彦

何をしても早くて雑なのは血筋 かず お

身内ゆえかえてあてにしたいくない 久 子

疑うのがワシの仕事と嘆く刑事 茂

ほつとさす人の傍から埋まる席 (岩) 玲 子

疑うこと知らぬ赤児のつぶらな目 満 子

病んでいる自分が余計好きになり 則 彦

実直とわかる楷書の筆のあと 美 龍

六甲川柳会(兵庫) 伊勢田 毅報

あつさりと逝くには多過ぎるサブリ 和 夫

当てはずれムニムニ呪文唱えだす 葉 子

均衡を保ち落ち着くやじろべえ 求 芽

小走りを待つてはくれぬ発車ベル 能 子

虹の彩足して自画像描き上げる 無 限

喝入れる朝の珈琲少し濃く 美 穂

亡妻がまたそこにいるような梅雨晴れ間 毅

無知ゆえの誤解が胸を締め付ける 光 久

空梅雨に苔はしょんぼり喋らない ひ ろ

身体にも苔が生えそな雨続き 登美子

野仏が苔の中より顔を出し 忠 貞

ふる里を忘れさせない国訛り 繁 義

ふるさととはどの子にもある青い空 洋 一

ふるさとへ邪悪な心消しに行く 政 一

古民家も娘のふるさとだ守りぬく 弘

富士よりもやはり故郷の桜島 文 香

もう誰も居ない田舎へ一人旅 武 臣

久々にお客になった里帰り 道 子

念のため補欠にも出すラブレター 茂

契約書うなずきながら判押さぬ 浩 司

したたかさ少しゆるんで円くなり 寿 朗

したたかに生きてる今が花かしら 照 子

里の道辿れば昭和の風が吹く 美 恵 子

梅雨に入り雨の降らない空不気味 洋 次 郎

図太さの中庸がいい子の未来 武 彦

過労死の子備軍も乗る終電車 宏 造

気儘からバラが届いた誕生日 い わ ゑ

図太さが影ひそめてる美女の前 み つ 子

先生が好きで先生困らせる 楓 案

大阪の気圧が上がるオスブレイ 紀 雄

アベノミクス気圧配置が読めません 光 男

友達れて酒だ魚だ高気圧 絹 枝

カミさんがどうも気圧の谷にいる 勝 弘

予報士が美人で今日は高気圧 雅 枝

棋譜ならべプロの空気にふれている ま つ お

習うより慣れるで行こう恋の道 一 歩

習ったはず脳が知らぬと横を向く シ ル ク

鴨谷瑠美子報

新しい野菜作りに習う日日 喜 代 子

今日習いあした忘れて生きている 美 代 子

わたくしはブーケ秀句を選っている 森 子

ありがとうサヨナラ棺へのブーケ み つ こ

スタッフ一同と書いてあるブーケ 扶 代 子

うれしなブーケが胸に飛んできた 雄 太

金婚の特等席にいるブーケ 龍 一

花束をもらった今日は主役です ち づ る

悲喜こもこも送る花束花の色
花束をメダルと共に抱き締める
被災地のブーケ折りのうずにいる
薔薇のトゲ承知で抱いてくれますか
六月の神話を持つているブーケ
元カレからもブーケが届くブライダル
いさお

大山滝句座(鳥取) 新家 完司 報

玉葱を吊ってこの世を賑やかす
お忘れにならぬ程度に顔を出す
ネジひとつ抜けた頭がよく遊ぶ
酒好きの虫一匹と同居中
忘れものしながら前へ前へ行く
みなさんと話すときには猫である
オール電化だけとあけますお灯明
履歴から汚点が一つもう消えぬ
その戦住めない土地にするためか
市役所のトイレの便座ぬくめ過ぎ
のうのうと過ごし汚れていくタオル
漁村です幕は揃って海へ向く
欠点もほどよく持ったお人柄
住み慣れた家が埃をよく溜める
犬と住みととき猫が訪れる
何をしに来たのかさてな箸もって
あじさいの七色変化人生も
体型も似た者夫婦五十年
目的が無い前進は続かない
幸せな老後の住まいケアホーム
揃うまで待てば津波にさわれる
仁美

婦美枝 信二 フジ子 六 点 瑠美子 いさお
安子 登貴枝 芳光 紀の治 くにこ 芳山 照彦 大鯨 恭子 けいこ 美ツ千 忠良 美恵子 麦青 鬼一 重忠 恒子 鈴野 希楽良 すみゑ 仁美
完司 岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子 報 蛙城 昭 香代 玄也 和美 信二 仁緑 幸子 ダン吉 隆昭 敏治 珠太 忠太 保州 弘子 洋 ひろ子 みつ江 侑子 康信 義泰
少子化の教室覗く鯉鰯
シナリオをオレのト書きで演じきる
ひたすらな花の心が分かるまい
ただ耐えること教わった戦中派
交通事故シナリオ変えたランドセル
トックリの傾き受ける嫁ぐ夜
赤とんぼひたすら母の水辺舞う
クラス会湧き出す思い時忘れ
シナリオになかった僕の家族葬
子の快癒ひたすら願う百度石
ポップコーン爆ぜて夢湧く夏の雲
シナリオになかった人と暮らしてる
斜めから見る癖きつと親ゆずり
シナリオはどうあれ今日という舞台
坂道を見上げて起る不整脈
ひたすらにお百度を踏む個の世界
ひたすらに心広げる墨を磨る
雲はいいなあシナリオの無い風が吹く
魂の旋律湧き上る拍手
写る時いつも斜めで瘦せて見せ
ひたすらに核廃絶の夢を追う
倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦 報 悠子 光 瑞子
うらめしや晴着の袖に百合の葯
百合の名にイメージ膨らむ初見合い
やっぱりね和服の女性百合のよう

鬼百合も名前に恥じず凛と咲く
骨董屋骨董に凝る客探し
川柳に凝っているとは言いにくい
好きな事病気を忘れ時忘れ
ブレートの肩凝りなのか大地震
煮凝りがごちそうだった終戦後
ササユリに凝って益々老い達者
創作意欲いつとき夢中和紙人形
難しい話をすれば肩が凝る
木の葉から読まねばならぬ木の想い
カミさんの顔色読んで生きている
その一手読めたらきつと勝てたのに
顔色を読んで合わせる語り口
心読む猫と仲良く住んでいる
テレビ欄見たい番組丸付ける
ぶかぶかと下手なラップを吹くでない
ぶかぶかの脳でしかありません
酸素切れ金魚ぶかぶか助け呼ぶ
ぶかぶかと見せてるチャップリンの靴
ぶかぶかのハート空気が読めません
死ぬるまで読む気で積んでおいた本
川柳さんだ(兵庫) 堀 正和 報 哲男 忠 好文 章子 キヨミ 歳子
三界に家なき筈の良いいびき
脂肪だけ増加夫の七回忌
ああ暇だ誰か葬式出さないか
孫達に唱歌の景色見せ歩く
巡る来るいつか陽の目を見るレトロ
乾燥の肌に脂肪で艶を出す

ラブレター煙が未練語りだす
湯煙でたるみ隠したフルムーン
青春を駆けた街なみ今レトロ
どの顔も童にかえる赤トンボ
七輪の秋刀魚けむりの味がした
いいじゃない餌がいいから太ってる
カツ丼にたくあん三切れ欠かせない
分水嶺浮かぶ木の葉にアドバイス
贅肉を付けてストレス追っばらう
DNAびったり合って逮捕され
夕立で小さな傘に君と僕
故郷の匂いは僕を忘れない
紫陽花園にわか雨で七変化
体脂肪水を飲んでも肥えてくる
何かある今日は私を煙たがる
張り合わず阿吽で生きる老夫婦
仲人の相性びったり嘘でした
海に線引かれまこつく魚たち
ふんどしと浴衣で夏を懐古する
五着目もびったりですと試着室
三つ折にして隠したい腹の肉
口ずさむ「十九の春」に戻りたい
芸達者玄人うけする音痴節
君が代を聞くと戦の音がする
レトロ家具揃えてしばし小宇宙
湯煙りの向うもやはりオジイさん

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

順子 宣子 一子 美籠 淑子 つな子 ひとみ 一泉 健二 雅尚 雄太郎 茂山 雅司 富夫 聖也 祐康 俊昭 晃 野薫 徹 恭子 ちあき 晶子 朋月 光久 正和 一徳

運動会さすが家の子うちの孫
ロスタイム気儘は大目に見てほしい
子の喧嘩気儘同志の小ぜり合い
人間の勝手気儘に哭く地球
お祈りのかわいいおてて祖母の真似
若武者がすすく育つ甲子園
諦めるのは早いまだ道半ば
パンもビザも米瑞穂の国だもの
オシヤマな娘妻の口實が板につき
ためらわず夕陽明日へ裏返す
裁判員裁く資格を自問する
難聴が気儘にさせる老い二人
誤解だと言っても無駄なシャツの紅
さすが亡妻保険たつぷりかけて逝く
かあさんが留守だと子供寄り付かぬ
子育てに孟母三遷転居する
私の心はいつもあなたで満ちている
時どきの気ままも大事故なぬため
優しいが頼りにならぬ人でした
結局はごめんさいとありがとう
さすがだな白寿の笑みに座が和む
痛いところ突かれて舌が縫れだし
母さんは笑って嘘を見抜きます
幼児をアンパンマンが占めている
地球儀で無賃の旅をしています
シーズンオフ静かになったカニの街
順調に心と体退化する
八十は八十なりのチョモランマ
味方などひとりも居ない気儘者

淑子 弘子 光子 折杭 文香 武臣 美籠 美津子 遼子 野鶴 浩司 千賀子 茂 毅 利子 伯備 比呂志 求芽 哲男 盛夫 秋果 朋月 直 勝弘 哲夫 正和 ひとみ 章子 歳子

美辞麗句つらね夫の遺言書
映画館シルバー族が占めている
子報士が待っていました雨の音
それでもさきまなネコにいやされる
曲解で親友までも背を向ける
岩美川柳会(鳥取) 石谷美恵子報
時間稼ぎ冷たいコーヒー飲んでる
セコイ俺古長靴をときを捨てん
郭公の啼くひとときを深呼吸吸
古傷を癒やしてくる里の海
幸せを詠んでいる時逝く夢を
ご意見番賢すぎるとややこしい
美しい花の名前がややこしい
ややこしい話題のようだ近づかぬ
淋しいね咳を案ずる人もない
振り向いて欲しくてやたら咳をする
咳一つうるさいヤジを一喝す
発声の訓練咳を一つする
緊張をすればするほど咳がでる
ああ言えばこう言うややこしい器
ややこしいページ飛ばして読書する
咳こんでゆっくり噛めと注意され
咳ひとつしても気遣う妻がいる

川柳ねがわ(大阪) 籠島 恵子報

敏夫 順子 キヨミ 宏造 嘉代子 清帆 昭弘 重忠 幸安 茶子 忠良 節子 圭郎 一瑤 蟹郎 たぬ 菖子 一粹 和子 雅女 美恵子 博泉 壽峰 亜成

泥酔の足が似たクツ履いてくる
大相撲後姿は皆同じ

熱烈な求愛丹頂のダンス

腹立てて地球の神様逃げちゃった

子を叱る母は逃げ道空けてから

すっぱんを愛してくる人探す

試行錯誤やと似てきた母の味

天寿まで日日を大事にして生きる

木漏れ日と踊るワルツは風の精

程ほどの幸せでよい冷奴

温情に飢え少年が荒れてゆく

欲ばって吃水線がびりだす

温情に生きる力の車椅子

鍵火元夫婦互いに声掛けて

生い立ちを聞いてまわりがあたたかい

間違われ背中をドンと叩かれた

骨太方針とこかで聞いた世迷い事

似たような食事毎日くり返し

熱血に温情もあり慕われる

警戒をしても新車で来る詐欺師

機嫌見て追加の酒を止めにする

春キャベツそろそろ野心芽生えだす

千人針巻いた戦士の悲運の死

政界の人で溢れる針の山

針といえは千人針を思う歳

縫い目から母の仕立ての見える

馴れ初めはボタンを付けてあげたから

寿子

博

祥昭

秀雄

薫

弘一

麗

賢子

朝子

洋

仁清

修

ルイ子

尚世

忠央

銀杏

鈍甲

さち子

かすみ

三郎

弘風

恵子

富子

恭昌

舞夢

弘子

すみ子

羅針盤正確ですか日本丸
九条で千人針は持たせない

うどんの後もコーヒーでしめくくる

スパンコール着るは内気の裏返し

内気でも大事なことは先に言う

内気つい嫌な事でも引き受ける

思いきり缶を蹴ってる内気者

聞き上手内気の心開かせる

思慮分別あつて内気の良さみえる

無欲とは言えぬ断捨離まだ迷い

都合よく記憶なくなる酔っ払い

妻が逝き亭主関白小さくなり

これしきを妬いた度量を笑う酒

残された命を深く受け止める

若すぎるカップルベビー大事にな

生きる道礼を通せば恙なし

クラシック聞いて夢想の昼下が

母偲ぶとき糠漬けと煮ころがし

白内障術後眩しい妻の顔

箸までがおしやべりになる女旅

手を上上げてきつちり渡る一年生

万緑に色鉛筆は十二色

雨の日もめぐみに感謝と生き

誘われても行く気になれぬチョモランマ

京の路地少うし濡らし梅雨に入る

雨しとど今日のわたしを知る如し

引導を頼んだ庵主先に逝き

浩二

昭

みつ子

蕉子

日の出

知之

捷也

楓楽

照子

千歩

桃花

紀子

正雄

志華子

公平

善之

満作

集一

げんえい

眞澄

哲子

哲子

貴代子

みつ子

年代

いわゑ

藍

佛や鬼にそれなり誘い受けてます

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

いいのかな原発売りに行くなんて

亡き母の仕草ありあり思い出す

顔に出るありあり判る下手な嘘

ほつていてやっぱりあの娘が好きやねん

あついなあ話の渦にいるオウム

暗闇でつなく手と手で解り合う

立ち話夫の愚痴を猫笑う

言い訳の言葉はそぞろ闇の中

口元は笑うが眉が本音言う

何遍も背くあんたを羽交い絞め

背信の息子氣遣う親ころ

下心ありありと見え嫌気さす

逝った夫闇夜に光る一つ星

授乳みてありあり浮かぶ母の胸

知らなけりや嫉妬の間に落ちなんだ

ほとと溜息誰かを好きになつたよう

隠しても心の闇を照らす月

ノックしていいですかそのハートにも

笑み浮かべころ温もる聞き上手

母上さま長谷の牡丹で又逢えた

新緑の間に五感を遊ばせる

叱らずにさがしてほしい誉めどころ

立ち眩みしそうだ京の百万遍

祝賀会急に味方が増えている

行間にありあり怒り見える文

義子

洋子

千代子

寿美子

寛十郎

よしひさ

泰子

柳明

富夫

和子

雪菜

楓花

幸香

野薫

里江

初音

ひとみ

ヨシエ

哲夫

キヨミ

五月

菜々子

正和

かずお

蓄水

今頃はと思ひめぐらす小糠雨
ひと言で前に進めた闇の中
背く子もやがて大樹と親心
背かれて飲んでるほかに術はなし
腹の虫芋焼酎で手懷ける

川柳塔さかい(大阪)

村上

玄也報

散骨希望大海原を墓地とする
足かせを外して視野が広くなり
エブロンを外し我が家のホステスに
真似される俺も成長したのかな
タイミングを外され上手く叱れない
彼氏できても亡夫の表札外さない
生意気にベットも墓で眠ってる
作り方真似ても遠い母の味
外された外野の席で見えたもの
先輩を真似て轟沈いっき飲み
この人に夢を託して当て外れ
猿真似はするなと孫に言っている
感謝して伝える愛もお金いる
桁外れうらやむ気にもなれません
親不孝親の真似しただけのこと
行間に伏字で外す過去が棲む
遺骨ないまま建てられた兵の墓
コースに調子はずれが一人いる
風そよぎ月も湯船で泳ぎ出す
なんですか補聴器外し聞きなおす
人の道踏み外したら付けが来る
付け睫毛外すと眠たそうな顔

美 龍 見 清 勝 巳 朋 月 い さ お
扶美代 五月 敏 教 唯 山 像 子 叔 半 錢 和 夫 舞 夢 の ん 子 日 の 出 世 紀 子 好 誠 一 玄 也 雅 明 時 雄 和 幸 澄 光 空

母ちゃんに使われているお父さん
補聴器をはずし風評から逃げる
婿と言うあだな二次会外される
母さんのつかいか棒が折れそうだ
最初は真似そしてオンリーワンになる
素人が登れば梯子外す株
父の愚痴言わぬ母さん真似できぬ
仏花水お墓の方へ向けてやる
料亭でトップを外す策を練る
ネジ外れ調子狂った古稀の坂
ネックレス外してくれる手が恋し
味のある後姿を真似てみる
ご先祖に愚痴を聞かせる墓参り

月 子 朋 月 由 一 冬 虹 千 代 健 吾 さ ぐ ら 愿 清 り つ え み つ こ 篤 子 天 笑

事務所便り

一路集と檸檬抄はご存知のように選者が
複数になります。にも拘らず一枚の用紙
で投句される方があります。当然そのま
ま選者へは送れませんので事務所で転記
致します。

檸檬抄は指定の綴じ込みの用紙で、又
一路集は課題ごとに川柳塔社の用箋に記
入して下さい。

川柳塔社用箋は送料込み、三冊千円で
販売しております。その他の投句もサイ
ズの違う用紙はご遠慮ください。尚、締
切日が土日祝祭日になる場合は前倒しに
なります。

(山岡富美子)

残暑お見舞

季刊

「川柳展望」

A5版

一六〇頁

誌代 四、九六〇円(年間)

☆見本誌進呈いたします。

電話 072(649) 5226

FAX 072(649) 2334

〒567-0009

大阪府茨木市山手台

4-6-3-101

川柳展望社

鮎のささやき

中 居 善 信

伍健まこりのひんがし

愛媛の柳祖、前田伍健さんを忍んでの川柳大会も五三回を数える。愛媛も今、ある意味で過渡期である古い柳人たちが亡くなり、若い人達へと選者が移行している。そんな中で今年の伍健まつりには目玉が作られていた。

川柳塔主幹、小島蘭幸先生を迎えて課題吟「誓い」の選者をお願いされていたことである。蘭幸さんは十五歳位から川柳を始められ五十年が過ぎたと言われている。まだ六十代であるが、全日本の中でもトップクラスである。多くの参加者はその事を知ってか、物音一つ立てず披露を聞いていた。

披露は声は大きくないのだが、よく通る声である。それとテクニクが凄い。最初に投句者の番号を読まれるのだが、一音おとして番号を読まれる、一拍置いてから、句を読まれる、間髪を入れず呼名が起る。それを楽しんでいた時。「少年の誓い 二月の青い麦」が読まれた。呼名をされたその方は目を瞑って「ほっ」とされた様子が見える。そのままの姿勢で頭を静かに下げられた、机に顔が付くほど下げてから元の姿勢に返られたのである。少し離れてこの様子を見ていて、その方よっぽど思い入れのある句だったんだな、とおもった。

採って頂く句はどの位置であれ嬉しいのです。分かって頂いたと思う感謝の気持ちでいっぱいである。いい大会で会った。来年もこんな大会にされたいものだ。

ジュニア

川柳



鳥取市立青谷小学校 川柳クラブ

課題「宿題」

宿題は大人にすすむ階段だ

6年生 相見 秀仁

宿題を頭かかえて考える

6年生 黄金 咲希

宿題のやる気スイッチ入らない

5年生 田中 そら

宿題を早く終わらせ遊ぶんだ

5年生 長谷川 奈緒

宿題がないとわたしは天国だ

5年生 村上 舞

宿題をていねいにしてほめられる

5年生 廣澤 真凛

宿題はまじめにやればお茶の子だ

5年生 谷尻 つかさ

休日には宿題ためて寝不足だ

4年生 吉村 茉佑

(指導 日置和紙の里川柳会)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	18日(日) 14時締切 更年期・怒る・追加・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	18日(日) 14時締切 幕・深い・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	18日(日) 13時開場 姿勢・再起・開く	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	19日(月) 13時40分締切 気取る・傷・あいまい・自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	20日(火) 13時30分締切 姿・ヒント・飛ぶ・さっぱり 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	23日(金) 10時開場 こっそり・届く・水・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪台町1-4-8 西川義明
和歌山 三幸 川柳会	24日(土) 12時30分開場 送る・明日・一生	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
八尾市民 川柳会	川柳大会 25日(日) 12時開場 本誌7月号 P.127 参照	八尾文化会館5F 近鉄八尾駅下車西武でパート東隣 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
はびきの 市川柳 民会	25日(日) 14時締切 花火・握る・焦る・シーズン	綾南の森 公民館 近鉄高鷺駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	25日(日) 13時30分開場 リタイア・一筋・げっそり	開発ビル 2Fホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪 川柳会	26日(月) 18時開場 だんだん・泳ぐ・下着・不意に	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	26日(月) 14時締切 ぱっちり・景・解く	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露 川柳会	26日(月) 20時締切 筆・打水・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光
川柳塔 すみよし	31日(土) 14時15分締切 ガイド・びりびり・言う	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 さ か い	夜市川柳大会 7月31日(水) 10時半開場 本誌7月号 P.127参照	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
城 北 会 川 柳 会	3日(土) 13時開場 余裕・気まずい・タイミング 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	3日(土) 14時締切 裏・抜ける・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉 吉 会 川 柳 会	3日(土) 14時締切 絶対・すんなり・敬う	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 な ら	8日(木) 14時締切 惑う・物・睡眠	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
あかつき 川 柳 会	9日(金) 14時締切 儂い・日・得意・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	10日(土) 14時締切 養う・欲・野暮	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 ま つ え	10日(土) 13時45分締切 堀・昼寝・くどい・がらがら	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川 柳 塔 打 吹	10日(土) 14時締切 列・虫・ひやかす	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
西宮北口 川 柳 会	12日(月) 14時締切 骨・流れる・ビール・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川 柳 あまがさき	13日(火) 14時締切 騒ぐ・カロリー・ささやか 自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川 柳 同 好 会	13日(火) 13時30分締切 会議・てこずる・印象吟	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川 柳 塔 わかやま 吟 社	17日(土) 14時10分締切 兼 題=星・きよろきよ・後始末 課題吟=表	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 柴原道夫
川 柳 塔 みちのく	17日(土) 16時開場 運転・がっくり・刻む	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぱ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
岸 和 田 川 柳 会	17日(土) 14時締切 仕組・萎れる・爪・トリック	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代

柳界展望

★平成25年度造幣局様の通り抜け川柳には1340句の応募があった。本社同人の天位。

通り抜けして決めました樹木葬

坂上 淳司

★第10回大野風柳賞はひとり静さんに決定。

白という色はときどき妖怪に 他4句

準優秀に木本朱夏さん

切っ先は我に向くなり鎌の月 他2句

☆三浦強一氏(同人・札幌市)は、北海道新聞「どうしん川柳」選者16年間の功績に対して、6月8日、全日本川柳協会青森大会前夜祭に於て表彰された。

☆板尾岳人氏(相談役)は、全日本川柳協会80歳以上の功労者として、6月8日、青森大会前夜祭に於て表彰された。

☆伊勢田毅氏(同人・神戸市)は危険物業務の功績により、春の叙勲で、瑞宝双光章を授賞。

☆新家完司副主幹は「杜人」238号に「宗教と川柳」を執筆。

☆木本朱夏さん(副理事長・和歌山市)は、「新思潮」121号に橘高薫風評伝「薫風曼荼羅」を執筆。

☆前田尋氏(本誌表紙の画伯)は6月20日〜25日まで「里山を廻る」と題して、ガリリー堺できり絵展を開催。好評を博した。

☆前田楓花さん(同人・鳥取市)は立体ちぎり絵展「和紙の風に吹かれて」(7月27日〜9月1日

まで、あおや和紙工房)に於て、立体ちぎり絵体験講師を務める。問合わせ、〇八五七―八六―六〇六〇 あおや和紙工房

▽御芳志お礼△

〇山本希久子さん(参予・吹田市)から、日川協文学賞準賞受賞記念お礼として金一封を拝受。

▽出 版△

◇藤井則彦氏(同人・豊中市)は「栄光のアマノジャク」これぞ自己変革の突破口を出版。新書判、206頁。現代図書発行。一三〇〇円＋税。

新同人紹介

阿野の 壽美子

―天笑・(志)千代・美津子推薦

山口不動

―天笑・(志)千代・美津子推薦

は河内天笑名誉主幹、西出楓楽理事長、河内月子副理事長他、多数参列した。

▽新誌友紹介△

大阪市 高井 節子

紹介者 西川 義明

▽お詫びして訂正△

▼7月号P47上段3行目、定本尾葉句集↓西尾

梁。P49下段5行目、い汁・汗。P1262段目18行目、石田博泉氏↓清泉

氏。P45下段23行目、ヘッ次回P8月5日(月)AM10時

第2回 川柳カード大会

日時 9月28日(土) 13:00～

会場 たかつガーデン(8階)たかつ西
近鉄上本町または地下鉄谷町九丁目下車
〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町7-11
TEL 06-6768-3911

開場 13時(ご昼食は各自お済ませください)

出句締切 13時30分 開会 13時40分

『第一部』対談 佐藤文香×樋口由紀子

『第二部』句会 各題2句・欠席投句拝辞

題と選者 「泣く」 湊圭史 選

「方」 清水かおり 選

「赤い」 野沢省悟 選

「チョコレート」 筒井祥文 選

「学校」 新家完司 選

事前投句 「サイズ」(8月25日必着)

小池 正博 選

(2句・大会出席者に限る・懇親会出欠明記)

投句先 〒675-0011 加古川市野口町北野1314-24

齊藤 幸男 宛

会費 2000円(17時から懇親会 6000円)

お問合せ 〒594-0041 和泉市いぶき野2-20-8

小池正博 TEL/FAX 0725-56-2895

主催 川柳カード

第21回 和歌山県川柳大会

日時 9月29日(日) 11時開場

出句締切 12時30分 開会 13時

場所 和歌山商工会議所・4階大ホール

参加費 2000円(内訳 ※事前投句料1000円

当日参加費1000円 軽食・記念品・発表誌呈)

事前投句・兼題及び選者 各題2句(雑詠は1句)

事前投句 「雑詠」

和歌山県川柳協会 会員結社代表 選

事前投句 「みかん」 楠見 章子 選

兼題 「昭和」 山下 修子 選

兼題 「箱」 桑原 道夫 選

兼題 「海」 田中 山海 選

兼題 「チャンス」 日野 愿 選

兼題 「折る」 西出 楓楽 選

柳話 「川柳や あれから250年」

川上 大輪

事前投句 8月22日(木) 必着

※投句料1000円なお、当日出席者は会場

にて1000円を納付のこと

※欠席投句 出来るのは事前投句のみで、

兼題は当日出席者のみ可。

懇親宴 4000円

投句先・問合せ先 〒640-8111

和歌山市新通7-17 古久保和子 方

主催 和歌山県川柳協会

第3回 播磨川柳大会

日時 9月29日(日) 10時開場

場所 姫路労働会館 3F 多目的ホール

姫路市北条1-98 TEL 079-223-1981

JR姫路駅徒歩15分 兵庫県合同庁舎南側

課題 各題2句 締切 12時

「読む」 上原 翔 選

「旗」 藤原 紘一 選

「売る」 宮本 喜明 選

「記憶」 大森 一甲 選

「踏む」 赤井 花城 選

会費 1000円(発表誌呈、秀句に賞謹呈)

事前投句(未発表句、各題一句・投句料1000円)

「戻る」 前田美巳代 謝選

「汗」 古川 奮水 謝選

投句締切 9月10日(火) 当日消印有効

投句先 〒670-0057 姫路市北今宿3-9-33

堀野 隆史 方

播磨川柳協会事前投句 係

主催 播磨川柳協会

番傘川柳本社創立105年記念

全国川柳大会

森中恵美子句集『水たまり春秋』発刊

日時 10月6日(日) 10時開場

場所 ホテル大阪ベイトワ

(JR弁天町駅、地下鉄弁天町駅下車)

〒552-0007 大阪市港区弁天1-2-1

TEL 06-6577-1111

事前投句 「数」 森中恵美子 謝選

宿題 「センター」 江畑 哲男 選

「異」 大西 泰世 選

「紙」 小島 蘭幸 選

「偉い」 雫石 隆子 選

「したたる」 尾藤 一泉 選

「鮮やか」 田中 新一 選

◎当日の出句締め切り 11時半(席題なし)

◎事前投句、宿題とも各題1句(欠席投句拝辞)

◎事前投句は所定の用紙に記入、8月31日必着

会費 3000円 軽食・記念品

森中恵美子句集『水たまり春秋』

懇親宴 10000円(要予約)

問い合わせ・申し込み 番傘川柳本社

〒530-0047 大阪市北区西天満5-6-26-605

TEL 06-6361-2455 FAX 06-6361-2456

主催 番傘川柳本社

編集後記

★富士見えていよいよ華麗 食堂車 薫風

★新幹線から富士山が見えとちよつぱりと得をした気分になるから不思議だ。「富士には月見草がよく似合う」と言つたのは太宰治。富士薔という花もある。なにを添えても富士には似合う。

★その富士山が世界文化遺産に登録された。富士山麓は不法投棄のゴミの山だと聞いた。富士にゴミは似合わない。富士を汚してはならない。今後の大きな課題である。

★「新思潮」(岡田俊介代表121号の特集「現代川柳を飛翔した作家たち」)は、現代川柳の発展に貢献した六人の川柳人を取り上げてゐる。岸本吟・時実新子・寺尾俊平・松本芳味・福島真澄と橘高薫風先生の評伝である。

★薫風論は私が担当した。拙い私の筆では400字詰原稿用紙に23枚は手に余つた。楽原道夫さんの助力を得て悪戦苦闘すること二カ月。苦しくも楽しい執筆の時間であつた。

★生前、薫風先生が「現代の六大家に僕は入るだろうか」と仰つたことがある。今回、現代の作家の一人として特集されたことに感慨を覚える。先生にお聞きせねばならないことは、まだまだたくさん残されている。これから先生句文集と向き合ふねば……。

★「総理から百寿祝われむず痒い」熊本在住同人・永田俊子さんの6月号の作品。高齢化が叫ばれて久しい川柳界広しといへども、百歳現役作家は珍しい。ますますのご健勝をお祈りしたい。

★今号、鳥取市立青谷小学校「川柳クラブ」の生徒

ひとこと

ジュニア川柳

鳥取市立青谷小学校では地域でいろいろな特技を持った人を掘り起こし、ゲストティーチャーとして迎え、いつでも小学校に出入り出来る取り組みを行っています。

「日置和紙の里川柳会」も平成二十三年度より、会員の棚田大、小谷賢の両氏が指導にあたり、毎年十名前後の生徒が「川柳クラブ」の一員として、校長先生のご理解

と担任の先生の助言のもと、頭をひねっています。

子供たちの柔軟な発想に感心させられることもしばしば。因みに青谷小学校には他に特徴のあるクラブがあります。「和紙クラブ」は因州和紙を使つて花造り、「民謡クラブ」は貝がら節を唄う。

会員は四年生以上で毎月どれかの部に所属して、先生と指導者のもと、楽しい時間を過ごしています。(前田 楓花)

の作品を紹介している。

これをきっかけに祖父、母親、親子で川柳に馴染んで頂けたら……と思う。

各地でジュニア川柳の輪が広がることを願う。

★路郎賞・川柳塔賞の応募の締切は8月10日必着です。多くの応募をお待ちしています。(朱)

◇朝日新聞7月1日付の「天声人語」欄で紹介された、サンキュータツオ著「学校では教えてくれ

ない! 国語辞典の遊び

方」に惹かれ早速一読。◇この中で著者は、今の時代は辞書を複数冊読み比べ、言葉の持つニュアンスを多角的に捉えることが必要と説く。

◇つまり辞書はそれぞれ出版社の意図や編者の考え方や等により、表現の仕方や語釈に違いがあること、或いは初版と改訂版とで内容が変わるケースも多いと指摘する。

◇改めて複数の辞書を読み比べることの大切さを教えられた。(い)

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成24年9月号から平成25年8月号までの自分の入選句から5句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募
川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日(土)必着のこと

④ P 104・P 105を参照して下さい。

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(10月号)

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「渋い」(8月15日締切)

10月号発表

大内 朝子 選 — 共選 — 竹治ちかし 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

10月号発表 (8月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸 選
水煙抄 (8句) 川上大輪 選
愛染帖 (3句) 新家完司 選
檸檬抄 (2句) 竹治ちかし 共選
大内朝子 共選
一路集 (3句) 「経」 江見清 選
「敷」 大石あすなろ 選
「がっちり」 近藤正選
初歩教室 「箱」 (3句) 太田昭担当

11月号

檸檬抄 「門」
一路集 「条件」「余る」
「ピント」
初歩教室 「望む」

本社8月句会

とき 8月5日(月) 13時開場・13時40分締切
— 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。—
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし 「食いしん坊パンザイ」 木口朱夏
兼題 「紙」 山口光久 選
「溢れる」 岩佐ダン吉 選
「ガラス」 出口セツ子 選
「終電」 久保田千代 選
「ゆうゆう」 鶴田遠野 選
小島蘭幸 選
会費 1000円
投句料 500円 (各題2句以内) (切手可)

本社9月句会
6日(金) 午後1時から
兼題 「服」「ためらう」「くるくる」
「鳴る」「古着」

第32年度 夜市川柳募集

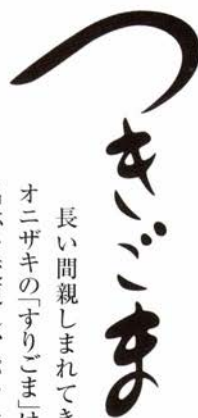
第3回「塊」両川無限選
ハガキに3句 8月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料84円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)
二〇一三年(平成二十五年)八月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アト
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話(〇六)六七七九一三四九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。

今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL  0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>